

しんおに。

～新説・鬼遊戯～



幹谷 セイ

Illustration 葉月 七瀬

みきやbooks

学内のどこかに封じられている「鬼」の封印が解けたら、強制的に鬼ごっこはスタートします。その時点で、学内にいた人間全員が「参加者」です。学校の敷地を覆うように逃亡防止の結界が張られるため、戦線離脱はできません。

鬼と目を合わせる、もしくは体のどこかに手を触れられると、魂を抜きとられて仮死状態に陥ります。参加者全ての魂が抜きとられると、その時点で全滅となり、ゲームオーバーです。結界は解け、その場で鬼は封印されます。

鬼にとられた魂は、そのまま鬼と共に封印の中へと引きずり込まれ、その魂の持ち主は本当に死にます。

鬼ごっこを終わらせるためには、参加者が全滅する前に、鬼を再度、封印することが条件となります。

鬼は月の魔力に弱く、日没になると自動的に再封印されます。それまで無事に逃げ延びられれば、確実に助かります。

・注意点

一人以上の人間の魂が抜かれてしまった状態で鬼の封印が完了すると、ペナルティとして、そのうち誰か一人の魂がランダムで選ばれ、鬼の封印の中に道連れにされます [重要!]

ただし、特殊な術を用いれば、道連れにされる魂を特定の人間に固定することは可能です。

キョンシー使いは敷地内に魂を保持していないため、鬼と真っ向対峙しても死ぬことはありません。ですが最初から魂の数に含まれないため、最後にキョンシー使いだけが生き残っていたとしても、全滅となります。気をつけましょう。

鬼ごっこ中、結界の張られた敷地内から出ることはできませんが、`外から中に入ってくる、ことは可能です。携帯も通じ、外界との連絡もある程度は可能です。

これらの内容を理解できた方は、本篇へお進みください。

プロローグ とある男子生徒の懺悔

人生の終わりを覚悟した、そんな一瞬。

廊下の死角に小さくなって座り込んだ身体は、オンボロの機械のように激しく震えていた。立ち上がれない、腰が抜けた。

側には、たくさんの生徒や先生たちが倒れている。息こそあるものの、このままでは鼓動が止まるのも、時間の問題だ。

あの化け物の姿が、今でも目蓋の裏に焼きついて離れない。瞬きするたびに、その白い髪が、赤い眼をした般若の仮面のような顔が浮かんでくる。

全身の水分を気持ち悪く揺さぶる、悲鳴にも似た奇声が、鼓膜を振るわせた。

幻聴ではない。すぐそこまで、迫っている。

こんなはずじゃ、なかったんだ。ただの好奇心だったのに。

とんでもない罪を犯してしまった。

僕が解き放ってしまった化け物のせいで、多くの人たちの命を犠牲にしてしまう。

この危機的状況を何とかするには、僕自身が蒔いた種を摘み取らなければならない。

術は発動した。道連れになるのは、僕の魂だけだ。

覚悟は決まった。しかし、悔いは残る。

彼女の心に、大きな傷を作ってしまった。あの娘の古傷を、抉ってしまった。

ごめんなさい。

全てを元には戻せないけれど。せめてこれ以上、誰も泣かずにすむように。笑顔でいられるように。

できる限りの努力をしよう。

震える足を酷使して立ち上がり、おぼつかない足取りで、死角から飛び出した。

耳元で、鬼気迫る制止の声が響く。しかし、立ち止まるわけにはいかない。

僕は勢いよく廊下を駆け抜け、一直線に化け物――鬼めがけて突っ込んだ。

一．鬼の出る高校

それは、金曜日の昼休みのこと。

春の陽気もうららかで、やっと高校生活に馴染めてきたかなと思える、そんな雰囲気的一年一組。

教室の中央付近に、妙な噂で盛り上がる二人組がいた。

「この学校、鬼が出るんだって」

「へえ。バイトの鬼とか、テストの鬼？」

「違う！ 本物の鬼だって。角が生えてて、おっきくて、なんか怖いやつ」

「本物って、あんた見たことないでしょ」

「ある！ 豆まきのときとか。あっ、おばあちゃん家に鬼の剥製があるんだよ。すごいいリアルなの」

「ああそう。なんか違う気がするけど、まあいいんじゃない？」

「由喜ちゃん。全然、信用してないでしょう？」

「信じてるよ。おばあちゃん家に、鬼の剥製があるんでしょ？」

「そこじゃないから！ 話ずれてるし、もおー！」

机に手を乗せ重心を取りながら、真剣な話をしているのにまったく相手にされず地団太を踏む少女、月見談子。

セミロングのストレートな髪の毛、目立ちどころのない平凡な少女。

だが、その捉えどころのない雰囲気は、常人を寄せ付けない、独特の空気を醸し出している、とよく評される。

昔からオカルト的要素の含まれる事象が大好きで、よく奇妙な行動を起こしては、周りから不審な目で見られている。

話している相手は、談子の前の席に座り、談子をからかって暇を潰している友人、名残由喜だ

。小学校時代からの談子の親友であり、いちおう世間からは、捉えどころのない談子の、善き理解者として知られている。男子生徒も顔負けの長身。短く切った茶髪が、明るく活発な性格を、よく表現している。

至って平凡かつ、まっとうな人種であるものの、何の抵抗もなく談子と親交を温められる辺りに異質さを見出され、周囲からは変人扱いされている、理不尽な少女だ。

今もまた談子は、由喜に軽く流されながらも、何の信憑性もない噂話を拾ってきては熱演を繰り広げているのだった。

▲ ▲ ▲

談子が通う、東京のちょっと田舎にある、仁鳴じんめい高校。

この学校には、はるか昔に封印された鬼が眠っているという。

その噂は、入学当時から、どこからともなく流れてきた。この仁鳴高校伝統の昔話らしく、根拠も証拠もないのに、長い間語り継がれて消えることがない。

どこの学校にもある七不思議、みたいなものだろう。そう判断した新入生たちは、特にそんな話を信じる素振りもなく、ネタがなくなったときの話題の題材程度に認識しているのが普通だった。

しかし、そんな摩訶不思議な話が大好きな談子にとっては、紙面一面を飾り立てても足りないほどの壮大なニュースだ。

だからこうして、ひとり盛り上がり、高揚する感情を数少ない友人にぶちまけているのだ。由喜は迷惑そうにしているが。

「鬼を封印した御神体みたいのがね、学校のどこかにあるんだってさ。でも誰も見たことないんだって。きっと人目につかないところにあるんだろうなー」

「談子ちゃん。見た人がいないってことは、存在してないってことなんだよ。分かる？」

目を輝かせて想像上の御神体をうっとり見つめる談子を諭しながら、由喜は茶々を入れてくる。

だが、その程度でめげる談子でもなかった。

「ちがうよ、きっと人には見えないように、結界とか張って守ってあるんだよ。あー、気になるなあ。誰が、そんな高度なことやってのけたんだろう」

「あんたの頭の中に湧いてる、ウジムシ君たちでしょ」

「すごーい、あたしの頭……」

「ああ、ダメだこりゃ」

妄想モードに突入した談子に呆れて、由喜はこめかみを押さえて息を吐く。こうなると、何かきっかけでも起こって現実に引き戻されるまで、談子は元に戻らないと分かっているから、それ以上何も言っていない。

「私的には、その鬼とやらに食われた、小さな女の子の幽霊が出るって噂のほうが、信憑性があるけどねえ」

鬼の噂に引き続いて有名なのが、その噂。

かなり昔の話で、かつてこの地にあったとされる神社の一人娘が鬼に食われ、未練を残した魂が辺りを漂って出てくる、というものだ。

どちらにしても信じる要素はないが、テレビでよくやる心霊写真特集などが好きな由喜は、そっちのほうが話題にするには楽しそうだと感じているらしい。

談子とはいうと、お化けや妖怪は好きだが幽霊は嫌い、という妙な偏りを持っているので、そういう話は進んでしようとしな。たいして変わらんだろうと、由喜に何度突っ込まれたか知れない。

「はっ、鬼なんて、いるわけないだろうが。馬鹿馬鹿しい」

突然、右隣の席から、野次が飛んできた。一気に現実の世界へ引っ張り戻された談子は、怒りを煮え滾らせて、声の主を睨み付ける。

気怠そうに椅子に浅く腰掛けて、背中を反らせている男子生徒。名前を、しゅんみんあかつき 春眠 暁 という。

黒髪黒眼、目つきも顔色も悪く、小柄でどこか陰湿な雰囲気はあるが、黙ってじっとしていれば婦女子から黄色い声を浴びせかけられそうな、それなりに端正な顔立ちをしている。

現にクラスの女子生徒たちが、彼氏にするべきか否かと幾度も激論を繰り広げている。由喜も意外とタイプらしく、「私より背が高ければなあ」と本気で悩んでいた。

しかし、談子にとってはどうでもいい話だった。人は見た目ではない、中身で選ぶものだ。それがモットーの談子に、外見的秀丽さなど、何の意味も持たない。

付け加えて、自分の趣味好みにケチをつけてくる、ウザったい人間に好意を抱けるほど、人間離れもしていない。

そもそもこいつは、入学当時から談子が奇怪な話を繰り広げるたびに鬱陶しいと喧嘩を吹っかけてきていたため、今では犬猿の仲となっている。

今回も例外なく、談子が黙っているはずもない。

「うるさい！ あんたに頭ごなしに否定される覚えはないわ」

「存在しないものを否定するのは当前だろう。お前の歪んだ頭から放出される妄想話が、こっちまで流れてきて実に不愉快だ。そんなひん曲がった脳ミソしてるから、ネクタイまでひん曲がってるんだよ」

談子は慌てて自分の首元を見た。学校指定の黒いブレザーから覗く、同色のネクタイ。不器用な談子が自分で取り付けると、なぜか右上がりに傾いてバランスが悪くなってしまう。

癖なのだからどうにもならないと認めているが、なぜかこいつに指摘されると、すごく腹が立つ。

「ほっといてよ。だいたい、何でいちいち人の話に首突っ込んでくるわけ？ あ、分かった。あんた友達いないから話し相手いなくて寂しいんでしょ。いっつも席に座って、一人でボーっとしてるもんね。そうならそう言えばいいのに。本当に素直じゃないんだから。そんな裏表が逆さまな、憎たらしい性格してるから、制服の下に着てるTシャツまで裏表逆なのよ」

暁は驚いて自分の胸倉を掴んだ。カッターシャツの下から覗いていた、青いTシャツの縫い目が表に出ている。

少し顔を赤らめて、暁は睨みをきかせる。談子はニヤニヤ笑った。

二人の目線の中に、火花が散る。意地でも目力で勝敗を決しようと、互いに躍起になる。

小さいが盛大な花火大会を閲覧しながら、由喜は大きく息を吐いた。

「あんたら、本当に仲いいわねー」

「「よくない！ 誰がこんな変人と！」」

指を差し合って怒鳴る。

「おーおー、声まで揃えちゃって。由喜さんは少し妬いてしまいますよ」

好みのタイプの隣の席の男子生徒にか、長年連れ添ってきた愉快的親友にか。頬杖を突いて、由喜は客寄せパンダでも見ているような視線を、談子たちに向けてくる。

「キシャー」

「ガルルル」

談子と暁は、奇声を発しながら威嚇しあう。

そのコブラ対マングースのごとき熱い戦いに終止符を打つように、チャイムが鳴る。五限目の担当教師が、教室に入ってきた。

「皆さん、席について。授業を始めますよ」

科目は古典。担当は、このクラスの担任である新任教師、瀬見時雨^{せみ しぐれ}だ。

若い年齢のわりに落ち着いた空気がとても大人っぽく、鋭いイメージを持たせるシャープな赤縁メガネをかけこなしているわりに、やさしくとろんとした瞳が厳しそうな雰囲気^{せうき}を緩和している。

長い髪に、ふわふわウェーブのパーマをかけた、小柄な女性だ。この学校の卒業生だというから、生徒たちから見れば先輩にもあたる。

チッと舌を打ち、談子は不機嫌そうに席に座り直し、教壇に目を向けた。暁も普段から座っている目を更に鎮座させて肘を突き、前方を睨み付ける。

その眼の先にいた時雨は、怒りの視線をとぼちり^{とぼちり}で受けていたが、特に気にする素振りもなく授業の準備を始めた。

なかなかタフな先生だ。四限目の世界史の担当教師なんて、暁と目が合っただけで腰を抜かしていたのに。それくらいでないと、現代の高校教師なんて勤まらないのかもしれないが。

「じゃあ、教科書開いてね。今日から新しいところに入りますね。タイトルは、『鬼に金棒』」

時雨の声を聞き流しながら、開いた教科書には目もくれず、談子は黙々と考えていた。

あの夢も希望もない、談子を馬鹿にしてばかりの馬鹿者共の額を床にこすり付けるためには、やはり鬼の封印を見つけるのが一番手っ取り早いだろう。

宛てはないが、談子には鬼を見つけられるに違いないという確信があった。改めて、強く決心をする。

――何としても、鬼を見つけ出そう。

「では月見さん、教科書読んでください」

突然当てられ、我に返った談子は慌てて立ち上がり、教科書を見た。

「えーと、鬼に金棒とは、野球部員に向かってケツバットを連打する監督の意ではありません？ ……なんじゃいこりゃ」

二. 幼い生徒会長

放課後。談子は一人、校内をコソコソと徘徊していた。

もちろん動機は一つ。鬼が存在すると胸を張って言うための確固たる証拠を掴むべく、学校中を探索しつくすためだ。

絶対に見つけて、あの談子を馬鹿にする連中にギャフンと言わせてやる、本当にギャフンと言った日には、それを録音して校内放送で盛大に流してやろうと意気込んでいた。

何か怪しそうなものはないかと、辺りを慎重に調査しながら前進していく。主に庭の石や木、教室なら古そうな教材設備などをチェックしていた。

が、熱中して周りが見えなくなってしまったために、自分がどこにいるのか、さっぱり分からなくなった。

まだ学校の地理にも慣れていない、少し方向音痴な談子は、すっかり道に迷っていた。

そんな談子が行き着いた、廊下の隅にひっそりと存在する、よく分からない古い教室。今は使われていないのか、生活感がなく閑散としている。

疲れたので休憩しようと、辺りに人がいないことを確認して、挙動不審に辺りを見回しながら中に忍び込んだ。

無人の教室を見渡す。背の低い、幅のある木製和筆筒が目に留まった。かなり古そうなもので、上にはうっすら埃が積もっている。

筆筒に意識を傾けると、頭の中に声が流れ込んでくる。

『この中には、なくてはならぬものが入っておる。それを扱うことができるのは、来たるべき時に現れた、選ばれし者のみ。

触れてはならぬ、開けてはならぬ。

中を覗いてはならぬ。中のものを取り出してはならぬ』

老人みたいな、しわがれた声が、談子の頭の中に響き渡る。辺りに人の気配はない。目の前の、この筆筒が語りかけてきているのだ。

談子には、鬼の手掛かりが得られるという確信があった。その理由がこれだ。

談子は時々、生物以外のモノの音が聞こえるのだった。幼い頃から無意識に使えた、ほとんど誰も知らない特殊な力だ。

今日もその力を頼りに、ずっと昔から学校に存在していたであろう、古い無機質なモノたちを探しては、耳を傾けてきた。

が、これと言って重要そうな話を聞くことはできなかった。モノは一方的に自己主張をするだけで、こちらから意図を伝えたり、尋ねることはできない。当てが外れて、お手上げ寸前になっていた。

しかし、この怪しい古筆筒は、何やら意味深な発言を繰り返している。

なくてはならないもの、とは何だろう。

ひょっとして、鬼に関係したモノだろうか。

と、勝手に都合のいいように解釈してしまうのは談子の悪い癖だが、手懸りが何もない今、とにかくがむしゃらにできることから実行するしか、自分の欲求を満たす方法は思いつかなかった。

そっと箆筒に歩み寄り、引き出しに手を触れる。三段ある内の、一番上の引き出しだ。鉄製の引き輪を掴み、ゆっくり引っ張った。

開かない。

鍵でもかかっているのだろうか。しかし鍵はもとより、それを差し込むべき鍵穴さえ、どこにも見当たらない。

色々な角度から箆筒を眺め回していると、今まで死角だった場所に低い台が置かれていて、その上に二体の人形が置かれていることに気付いた。

焼き物の陶器でできた置物は、向かい合って立っている。片方は全身が青く、腰に黄色と黒のトラ柄をした腰巻をつけている。

もう片方は赤い身体に大きな同柄の布を巻いていた。胸部の二つのふくらみが、それが女をかたどったものであることを示唆している。そして両方とも、頭から二本の角を生やし、手に釘バットのような鋭利な獲物を握り締めている。

考え直すまでもない。

この姿はどこから見ても、鬼。

談子は目を大きく開いて、緊張した。

手にとって暫く見回してみるものの、特に怪しい点は見当たらない。何やら話し声が聞こえるが、よく聞いてみれば、昔の少女マンガに出てきそうなロマンチックな愛の囁きというやつで、それほど重要な内容でもないし、興味もない会話だった。

少しがっかりした。しぶしぶと元の場所へ鬼たちを戻そうと手を伸ばした。

その時。

「これ、お主。そこで何をしておる！」

「ひゃあ！」

人気など全く感じられなかった背後から、突然の怒鳴り声。予期せぬ出来事に、談子の心臓が飛び上がり、手から鬼たちがするりと抜け落ちる。

陶器製だから、落とせば割れる。実際、高いところから落下して衝撃を受けた二つの鬼の人形は、ガシャンと大きな音を立てて砕け散った。

「のああっ！」

やってしまった。予定外の失態。学校の所有物を破損してしまうなんて、小学校のときにプロレスごっこをして窓ガラスを割ったとき以来だ。

高価なものだったらどうしよう。頭の上でヒヨコが回る。

「見たぞ。あーあ、壊しおったな」

後ろから、笑い声が聞こえた。嫌味っ気の混じった、子供の声。

談子を後ろから脅かした声だ。

冷静に考えれば、あれさえなければ談子はこの鬼たちを壊すこともなかった。元はといえば、その声の主が悪い。

そう結論を導き出し、文句を言ってやろうと不機嫌に振り返った。

背後に立っていた人物の姿を見て、談子の頭は思考が停止した。怒鳴ることすら、忘れてしまうほどに。

目の前には、小さな童女がいた。見た目は、小学校低学年といったところ。

だが、腰までまっすぐ伸びた、長い艶やかな黒髪や、身に纏った紅白の巫女装束は、どう考えても今現代に生きる子供の普段着とは思えない。

「ま、まさか、鬼に食われた子供の幽霊？」

そんな噂もあったかと、由喜との会話を思い出す。

一気に血の気が引いた。まさか、こんなところで、そんなものに遭遇するとは、鬼を見つけるより、リアルに怖い。それ以前に、自分に幽霊が見えるほど靈感があったのだと、密かに感動もした。

「何を言っておる。わらわは生身の人間じゃ。足も付いておろう」

ずいぶん古風な口調で喋り、童女は袴の裾を持ち上げて見せた。小さな、かわいらしい足に、白い足袋と赤い鼻緒の下駄がくっついている。

おお、と談子は納得して、少し安心した。でも結構、がっかりもした。

「なんだ、生きてるのか。でも、どうして、あなたみたいな子供が、こんなところにいるの？ ここは高校だよ、勝手に忍び込んだの？ それとも、道に迷ったの？ 先生の子供とかかな？」

談子の疑問には耳もくれず、童女の視線は常に談子の足元にあった。気になって、談子も下を向いてみる。

そして後悔。

さっき粉々にした、鬼の残骸を再び視界に入れてしまった。

見るんじゃなかった、このまま存在を忘れて部屋を立ち去ることができたなら、どれだけ楽だったか。

大きい、憂鬱な息が出る。しかし、目の前の童女が、はっきりとその一部始終を見ている。どちらにしても目撃者がいる限り、罪逃れはできないだろうと、トズラは諦めた。

腹を括って、しぶしぶ鬼の破片を拾い集める。ご飯粒でもくっつけておけば元に戻るだろうか、と一瞬考えたが、あまりに原形を留めていないため、これを復元するのは談子には不可能だと考え直した。

大きな破片は全て拾い、元の場所に戻しておいた。

「……のう、それを壊したこと、内緒にしてやってもよいぞ」

背を丸めて暗い影を落とす談子に少し同情したのか、間を置いて童女が話しかけてきた。こんな子供に情けをかけられるとは、談子も落ちぶれたものだ。

「いいよ、別に。適当に似たような置物、百均で買ってきて置いとくし」

それくらい、安っぽくてもバレない程度のものだと思ったのだ。類似品がなければ、紙粘土で作って置いておいても、意外と気付かれなさそうだ。

そもそも、この教室自体、人の出入りがなさそうなのだから、そんな手の込んだ裏工作をしなくても、よさそうな気がする。

「その鬼は高いぞ、こんな場所にあるのがおかしいくらい、貴重な国宝級品じゃ。小遣いも乏しい小娘には、一生かかっても弁償しきれんじやろう」

「こくほっ……、お願い、黙ってて」

童女の言葉に、談子の思考が一八〇度逆転する。万が一、バレた時のことを考えると、気が気でない。

両手を頭上で拝むように併せ、童女に頭を下げる。弱気になった談子を見て、童女は、にたりと笑った。立場が完全に逆転し、腰に手を当て、ふんぞり返って威張っていた。

「よいぞ、ただし条件がある。わらわは今、非常に暇を持て余しておる、これからお主は、わらわの馬となり、校内を駆け回るのじゃ」

そう言った時には、童女は既に談子の後ろへ回り、背中へよじ登っていた。

「さあ、行くのじゃ馬よ！」

「馬って何よ、馬って。でもまあいいか。下校時間までね」

やむなく、童女の足を肘で挟み、落ちないように固定し、談子は童女の指差す方へ歩き出した。すると何か思い出したように童女が談子の髪の毛を数本、ピンピンと引っ張る。

「その前に、名前を聞いておらなんだな。お主の名は？」

「あたし？ 談子でいいよ。月見談子」

「談子か。わらわは ほんじょう きらひめ 本条 綺羅姫。この学校の生徒会長じゃ」

「……は？」

思わず聞き返す。何やら、想像だにしなかった意外性MAXな言葉が聞こえてきて、談子は素早く、お得意の現実逃避に入る準備を始めた。

「生徒会長じゃ」

綺羅姫は再度、繰り返すが、もう談子の耳には入ってこない。

「ごめーん。お姉さん耳が遠いみたいで、何にも聞こえなーい」

談子は有無を言わず走り出した。相手にしてもらえず、綺羅姫は背中の上で不機嫌そうに怒鳴る。

「信じておらんのじゃろ！ 嘘ではないぞ、本当に、わらわはこの学校で一番偉いのじゃ！」

「聞こえなーい、聞こえなーい」

相変わらず無視し、談子は教室を後にした。

「わらわの話をちゃんと聞けー！」

綺羅姫の怒鳴り声だけが、無人の廊下に響き渡っていた。

三. 幼女と一緒に校内爆走

いくら背中にいるのが、小さく体重も軽い子供とはいえ、結局のところはキャンプ用具を担いでダッシュ登山するのと同じくらい、体力を消費しているようなものだった。

階段を一気に駆け上る談子の足は、必要以上に酷使され、それほど気温も高くないのに顔中に汗が滲んで粒を作っている。

「ね、ねえ。もう、満足、した？」

息も切れ切れに、談子は背中に向かって話しかける。いつもより高くなった視界から辺りを見回して、はしゃいでいた綺羅姫だったが、その情けない声を聞くと、談子の首を掴んで、つまらなさそうに息を吐いた。

「根性のない馬じゃのう。わらわは、まだ散歩を堪能しておる途中じゃ、もっと走れ」

「休憩しようよー、疲れたー」

「わらわは、疲れておらぬ」

「そりゃ、そうだろうけどさ」

背中に乗っているだけで疲れた、なんてぬかした時には、最後の力を振り絞って背面ジャイアントスイングを発動する準備も整えていた。腰に負担がかかりそうなので、発動せずに済んで助かったが。

廊下を横切る度に、何度か生徒とすれ違った。皆、奇妙なものを見る目で、綺羅姫を背負った談子に視線を浴びせてくる。恥ずかしくて熱くなった顔を伏せて、全速力で駆け抜けることしかできなかった。必要以上に疲労している原因はそこにもあるだろう。

体育館側の廊下を通っていると、バレ一部の体験入部をしていた由喜にはち合った。背中にいるこの謎の童女に、やはり普通人的な反応を返してきた。

「何？ どうしたの談子ちゃん。てゆーか、その子誰？ いったい何してんの」

「いや、まあ、いろいろあって……。あっ、そうそう、学校についてきちゃった、ある先生の子供を預かってるの！ そういうこと」

とっさに出た、信憑性の強そうな嘘をつく。

ごめん、由喜ちゃん。でも、あんた本当のこと言ったって、信じるような人間じゃないでしょう。

談子にだって、未だに彼女の正体が分からないのだから、説明しようがない。

「何を言っておる、わらわは……」

「うるさい、今だけは黙ってなさい！」

口を挟もうとした綺羅姫を怒鳴りつけ、黙らせる。その行動に対して綺羅姫は拗ね、由喜は更に不審そうな顔をした。

「……本当にその子、先生の子供？ どっかから拾ってきたんじゃないでしょうね」

「それはないっす！ 本当に、時間がきたら、ちゃんとお返しするし。じゃあ、今は忙しいんで、また月曜ね！ あはは」

談子の言い分をまだ疑っていきそうな由喜の微妙な視線をかわし、談子は乾いた笑いを出しな

がら、ダッシュでその場を立ち去った。最大の危機を切り抜けたものの、その反動も相俟って、かなり心身的疲労は濃くなる一方だった。

「こんなフラフラの状態ですり回ってたら、誰かにぶつかっちゃうよ」

案の定、おぼつかない足取りで、よろけながら前進していたため、曲がり角で誰かに盛大にぶつかって、しりもちをついた。綺羅姫はとっさに談子の背中から飛び降り、平然と腰に手を当てている。なんて反射神経だ。

「いったーい……」

腰をさすりながら、ゆっくりと起き上がろうとする。

目の前に手が差し伸べられた。

「ごめんなさい、大丈夫？」

柔らかな雰囲気、やさしい女性の声。聞き覚えのあるその声に、もしや、と思って顔を上げる。

やはり。担任の、瀬見時雨であった。

「あっ、先生、すいません。前方不注意で」

その手を取り、立ち上がる。自分と同じくらいの身長の時雨と目を合わせ、謝った。時雨は微笑んで、少し首を傾げて見せた。

「廊下は走っちゃダメよ。そんなに急いで、どこへ行くの？」

「どこって、場所は決まってるんですけど、ちょっと校内散歩を。そうだ、先生、この子誰の子か知ってますか？ 迷子みたいなんですけど」

尋ねてみた。もし教師の子供なら、何か知っているかもしれない。

時雨は綺羅姫を見下ろした。そして大きく目を見開く。やがて表情が曇り、眉を顰めて、静かに呟いた。

「……夢じゃ、なかったのね」

「……あの、先生？」

談子と綺羅姫は、首を傾げる。時雨はハッと、我に返って顔を上げた。

「えっと、この子、確か生徒会長さんじゃなかったかしら？ 会うのは初めてなんだけれど、先生方が、そんな話をしているのを聞いたから」

「ええっ？ 先生たちまで、この子を生徒会長と呼ぶの？」

もう驚くしかない。絶対嘘だと思っていたのに。やっぱり綺羅姫は生徒会長なのか。

まだ疑われていたのだと知り、綺羅姫は訝しげに談子を見上げてきたが、無視した。

「じゃあ先生、会議があるからこれで。廊下は気をつけてね」

「あ、はい、さようなら」

時雨は去っていった。気のせいだろうが、その後ろ姿が妙に逃げ腰だったような気がして、少し気になった。同じく時雨の背中を見つめている綺羅姫を見下ろし、軽く息を吐く。

「本当に、生徒会長だったんだねー。ってことは、役員の人に言えば引き取ってくれるかな。生徒会室に行ってみる？」

「あそこは、行ってはならん！ 世にも恐ろしい、魔界のようなところじゃ」

「魔界って……。でもさ、あたしもいつまでもあなたの面倒見てられないんだよね。色々忙しいし」

半分忘れかけていたが、談子は重要な探し物の途中だ。早く見つけ出さなければ、噂話自体が風化してしまう。

「とにかく、あそこは嫌なのじゃ。どうしてもと言うなら、あの置物を割ったことをチクる！」

「うぐっ！ ……分かったよ。じゃあ、どこ行きたいの？」

諦め、しぶしぶと綺羅姫を背中に乗せた。それでよい、と綺羅姫は満足していたが、こちらは不満タラタラだ。すっかり弱みを握られて、いいようにこき使われている。

「どこでもよいぞ。生徒会室周辺以外なら」

「うーん。じゃーね、図書室でも行こうか。まだ行ったことないんだよね」

少し休憩もしたいし、書物から、この辺りの歴史や伝説を知るのも一つの調査だ。読み物があれば、綺羅姫もしばらくは大人しくしていてくれるだろうし。そう考え、談子は廊下を走り出した。

四. 昔話の鬼はどうして悪者なのか

昇降口の真上に設置された、少し校舎から飛び出た位置にある図書室。放課後だからか、意外と利用者が多い。窓側の一角に腰掛け、談子はしばしの休憩を取った。

「ああ、疲れた。ったく、いつまで走り回らなきゃいけないんだか」

息を付きながら、周囲を見渡す。あまり読書好きな友人がいないため、このような場所を訪れる生徒たちに、見知った顔はいない。談子だって、普段読むのはマンガくらいだし、こういった文字ばかりの本しか置いていない場所には、好んで立ち入らない。まだ教養のマンガ本が置いてあった小学校の図書室で、既に卒業済みだ。

視界は、たくさんの人が行き交ったり、机に向かって本を読んでいたりと、とても賑やかなのに、耳にはほとんど、音が入り込んでこない。話し声も聞こえないし、せいぜい本を捲る紙擦れの音が小さく響くくらいだ。昼寝をするには丁度いい場所だなと、談子なりに図書室の活用法を模索していた。

「のう談子よ、これを読んでたもれ」

どこか、奥のほうの本棚を探りに行っていた綺羅姫が、帰ってきた。手には、分厚い本がしっかり握られている。

表紙には「日本昔話」とタイトルが振られている。なるほど、高校の図書館で子供が読んで理解できそうな本といえば、この辺りのものしかないだろう。受け取って中を軽く見ても、特に難しい書き方もされていないし、充分、談子でも読めそうだった。

「綺羅姫は、字が読めないの？」

「読める」

「じゃあ、自分で読めば？」

「オニの置物」

「……ちっ。分かったよ」

舌打ちし、了承する。綺羅姫も頷いて、談子の膝の上によじ登ってきた。

「よっし、じゃあ、どれにしようかな？」

目次を見ながら、何を読むか考える。まずは誰でも知っている昔話がいいだろう。

桃太郎を読んだ。説明するまでもなく、桃から生まれた桃人間が、アニマル軍団を率いて鬼を血祭りにあげに行く話だ。次に金太郎、一寸法師。他にマイナーだが、茨木童子なども面白そうだったので読んで聞かせた。

周囲の目がやたら突き刺さって、徐々に小声になっていったが、綺羅姫には充分聞こえる声なので問題ない。

ある程度読み終えた辺りで、何やら綺羅姫がつまらなさそうな顔をしているのに気づき、本から目を離して話しかけた。

「つままない？ 別の話がいい？」

「……なぜ、昔話に出てくる鬼というのは、いつもやられてしまうのかのう」

素朴な疑問だ。でも確かに、偶然にも今読んだ話は、どれも正義の味方が鬼を退治したり、鬼

が村人によって迫害されているといった内容のものばかりだった。そういう疑問が出てきてもおかしくはない。答になっているかは分からないが、今日の古典授業で習った鬼の定義を、少し教えてあげた。

「鬼って言うのはさ、もともと外国から流れ着いた体の大きな異人とか、今まで接触のなかった先住民を喩えたものなんだって。昔の人は、そういう初めて見る、変わった人たちが怖かったの。それこそ、恐ろしい鬼みたいに見えたんだと思う。それをやっつける話を聞くと、やっぱりすっきるするんじゃないの？ それが今も語り継がれてるってだけで、深い意味はないよ」

「……じゃが、その鬼のような連中が同じ人間であることは、もう分っているはずじゃ。なのになぜ、今も人は鬼を嫌うのじゃろう」

綺羅姫は、悲しそうな顔をする。鬼はいつも、苛められて一人ぼっちだ。それを可哀想だと思える子供は、その同類である場合が多い。ひよっとすると綺羅姫は、いつも孤独の中に身を置いていて、鬼に自分自身を重ねているのだろうか。

何とか元気付けようと、談子は笑った。

「じゃあ、あたしが作ってあげるよ。鬼が出てくるけど、鬼が退治されるオチのない話。あたしは、嫌いじゃないもん。鬼」

綺羅姫が顔を上げる。その瞳は大きく開かれ、潤って輝いていた。談子は、自信たっぷりに頷く。

「本当に、そんな話を作ってくれるのか？」

「いいよ。約束ね」

指きり。

綺羅姫が、少しだけ笑った。だから談子も、笑い返した。

五. 生徒会役員、出動

校舎の外れにある、質素な教室。表のプレートには、汚い手書きで「生徒会室」とあった。いつ書かれたのかも分からないほど黄ばんで埃にまみれ、傾いて今にも落ちてきそうである。

教室の中は、期待を裏切らず質素だ。中央に、小学校の給食時間のように寄せ集められた机の塊が配置されていた。他の机や椅子は全て端に寄せられて、高く積まれている。中央の机をとり囲み、四人の生徒が椅子に腰掛けていた。学年は様々。男子と女子が、それぞれ二人ずつ。

机の上には、大きなボードが敷かれていた。ボードには小さくコマ分けされた道が迷路のようにびっしり描かれ、隅には手で回せる、一から十までの数字が書かれたルーレットが貼り付けられている。

その上に四つ、チェスで使用するものに似た駒が置かれ、バラバラの場所に配置されていた。駒にはそれぞれ名前が書いてある。

メカマスター。

冬眠男。

呪詛女。

キョンシー使い。

長い髪を後ろで束ねた、大人しそうな男子生徒が、ルーレットを回した。出た目の数だけ、冬眠男の駒を動かす。止まったマスは給料日だった。

「お金と言え、今月期の生徒会予算の件なんだけれど……」

「^{だら}蛇羅さん、今はそんな話、やめましょうよー。楽しく遊んでるんじゃないっすか」

冬眠男の話を遮り、茶髪のやる気なさそうな女子生徒が札束を数え、給料を渡す。有り得ないくらいカラフルな、しかしリアルな偽紙幣だ。続いてルーレットを回す。メカマスターと書かれた駒を移動させた。

「ちえー。一回休みか。まあいいけどね。銀行役と並行って疲れるし。次、暁くんね」

メカマスターは、隣に座る男子生徒を急かした。目つきの悪い、ついでに顔色も悪い、とっつきにくそうな新入生だ。

「うるせーな。だいたい、何でこんなところに集まって、人生ゲームやってんだよ」

愚痴を吐きつつも、真面目にルーレットは回す。そしてキョンシー使いの駒を移動させた。

「何でって、やっぱり生徒会役員たるもの、団結は大事だと思うのよ。こうやって親睦深めて、いざって時に協力し合える関係を築いておかないとね。あ、そこ、デンジャーゾーン」

キョンシー使いの駒が、真っ赤な危険マスに止まった。『突然スナイパーに狙われる。三〇〇のダメージ』と書かれている。

「またかよ、おい！」

キョンシー使いは立ち上がった。嫌な汗をかきながら周囲を警戒する。教室の後ろに配置された掃除用具ロッカーの天井で、何かが黒く光る。マシンガンだ。

発見するのと、それが火を噴くのは同時だった。

チュドドドドン！

黒く光るマシンガンの引き金が自動的に引かれる。キョンシー使いめがけて連射。おもちゃの小さな弾丸だが、当たると痛そうだ。

それを全て、キョンシー使いは紙一重で躲す。しかし最後は避けきれず、数発が額を直撃した。

「いって一な、ちくしょー！ 何でお前らだけガードしてるんだよ、卑怯だろうが！」

額を押さえながら周囲を見渡してみれば、全員大きな下敷きを盾に、弾雨から身を守っていた。彼がこんな不本意な攻撃を受けるのは、本日これで三度目だ。表立っては見えないが、腕や脛などにも斑点の青痣ができています。

「だって、あたしたち、カンケーないすいー」

「何で俺ばかり、こんな攻撃的なマスに止まるんだよ」

「このリアル人生ゲーム、新入生歓迎装置ついているから。まあ、通過儀礼ってやつよ。暁くんにはバシバシやられてもらうわよー。おほほ」

「どんな装置だ！ それ以前に、こんな歓迎のやり方があるか、暴走族かお前らは」

このボードは、メカマスターの作った発明品であった。あのマシンガンも同様である。

「まあまあ、とにかく続けようよ。次、イナホちゃんの番ね」

キョンシー使いを無視して話を振る。最後の一人がルーレットを回した。艶やかな短い黒髪の、美しい女子生徒だ。呪詛女のコマを手に取り、出た数字だけ動かす。

今のところ、彼女が一番勝っていた。顔には出していないが、ゴール目前まできているということで、かなり気持ちも高ぶっているようだ。

コマがゴール一歩手前で止まる。そのマスには「ふりだしに戻る」と書かれていた。

「……………」

全員が身体の動きを止め、息を呑む。呪詛女は無言で、足元に置いていた鞆からノートを取り出し、さらさらと何かを書き始めた。

「お父様お母様、私はリアル人生ゲームなるくだらない遊戯に弄ばされ、一番頂点に居たのにも拘らず、どん底へ突き落とされてしまいました。所詮、私など四角いメロンのように見せかけだけで何の意味も持たない人間なのです。自信をなくしました、この失意の念を背負って、お祖父様の元へ旅立とうと思います。せっかくなので、ここにその名前を記しておきましょう。そう、夏みかん、という、私を死へ追いやった愚かな人間のその名前を！」

「ええーっ!? ちょ、ちょいまち、アタシのせいっすか？ 早まらないで、ゲームだから、これゲームだからね、許して！」

遺書を書き始めた呪詛女を必至で宥めるメカマスター。その時、壁に貼り付けられた非常用のベルがけたたましく鳴り響いた。これも彼女の発明品だ。

「非常事態発生！ 生徒会長逃走、逃走！」

ベルが用件を伝える。同時に、四人の目の色が変わった。

「ちっ、こんな時に。しょうがない、行こうか。即捕獲！」

舌打ちしたメカマスターが立ち上がり、ベルの側に立てかけてあった虫取り網を手を取った。それを合図に残り三人も席を立ち、足早に教室を出て行く。

遠ざかる足音。生徒会室には、静寂が取り残された。

六. 捕縛と警告

図書室を出て、側の廊下を走っていると、遠くでベルの鳴る音がした。災害時に使う、非常用のやつだ。火事でも起こったのかと、談子は立ち止まって振り返った。

「何かあったのかな？」

「むっ、いかん、気付かれた！」

背中におぶさっている綺羅姫が、敏感に反応する。談子の髪をピンピン引っ張って急かした。

「逃げ談子、逃げるのじゃ！」

「えっ、逃げるって何で？ どこに？」

「どこでもいい、早く走れ。奴らが来る！」

まごついているうちに、前方の曲がり角から人影が現れた。

「綺羅姫、みーつけたー！」

女子生徒だった。長い茶髪をなびかせ、手にはなぜか、虫取り網を握っている。その楽しそうな顔を、談子は見た記憶があった。

たしか生徒会副会長の、夏みかん。

まだ二年生なのに重役に就いていることに感心したため、よく覚えていた。

「まずい、こっちへ逃げるぞ！」

綺羅姫が髪のを強く引っ張る。痛さによろけながらも、指示された方向へ駆け出した。

「待ちなさい、逃げてでも無駄なんだから！」

みかんは、しつこく追いかけてくる。なぜ追ってくるのだろう。もしや鬼の置物を壊したことがばれたのか。談子は思い当たる節を思い出し、表情を歪めた。

きっとそうだ、そうでなければ、あそこまで血眼になって追いかけてくるなんて、あり得ない。

「や、やっぱり、ちゃんと謝ったほうがいいよ、綺羅姫」

「ならぬ！ 捕まれば、きつーいお仕置きが待っている」

談子の脳内を、自分が妄想できる限りの、きつーいお仕置き図が過ぎった。なんて恐ろしい。

それを回避するべく、湧き出した気合いをエネルギーに、走る速度が飛躍的に上昇する。だんだん距離が開き、なんとか、みかんを撒けた。

と、思った矢先に、目の前からまた人影が飛び出してくる。

「新学期早々、手古摺らせるんじゃねえよ！」

「げっ、暁!？」

慌ててブレーキをかける。飛び出してきたのは、口やかましいクラスメイト、春眠暁だった。

なぜ、彼までもが談子たちを追いかけてくるのか。さっぱり分らない。

「ナイス、暁くん。それでこそ生徒会役員だ！」

談子たちの背後にもう一つの影が。長髪を後ろで纏めた、大人しそうな男子生徒。彼も確か生徒会役員。

会計の、すけとう だら助冬 蛇羅だ。彼が言うに、暁も生徒会役員らしいが、そうになると談子たちは、生徒会

役員に総動員で追われていることになる。

あの置物を壊したことは、そんなにもいけなかったのか。そりゃ、国宝級と言われれば、誰でも目の色は変わるだろうが、まさかここまで本気モードで追われる羽目になるとは、思ってもみなかった。

挟み撃ちを食らい、逃げ場がない。二人の生徒会役員を交互に見ながら、談子は焦る。じりじりと距離をつめてくる役員たち。お縄につくしか、道はないのか。

「うっ！」

「ぐあっ！」

急に、蛇羅が倒れた。少し間を置いて、暁も倒れて動かなくなる。気を失っているようだ。

彼らの首筋には、細くて長い、針のようなものが刺さっていた。

「な、何ごと？」

突然の事態に、談子は慌てる。その背中で、綺羅姫が低い笑いをこぼす。

「わらわたちを捕えようなど、百年早いわ。愚か者共め！」

ご満悦、といった感じで、綺羅姫は笑う。首を回してその様子を横目に見ると、綺羅姫の手に、何やら細い竹筒らしきものが握られていた。

「吹き矢!？」

麻酔でも塗ってあるのか。それとも人間のツボを見極めているのか、狙いは完璧だった。

とにかく、もう何でもありの逃走劇だ。再び竹筒を構え、綺羅姫は談子に向かって叫ぶ。

「いつまでも逃げているのは性に合わん。今度は、こちらが攻める番じゃ！」

確かに、綺羅姫は逃げるよりも追いかける側のほうが向いていそうな性格だなと思った。鬼ごっこなら、進んで鬼をやりたがりそうな、珍しいタイプだ。吹き矢は談子の首筋でさえも、すぐに突き刺せそうな位置に構えてあった。逆らえば、談子もそこに倒れている連中の二の舞になりかねない。とりあえず指示に従って、走ることにした。

駆け出して数歩も行かないうちに、突然、足元を掬われる。脛に太い紐が引っかかって、バランスを崩したのだ。盛大にすっころび、顔を床にぶつけてスライディングする。数十センチ滑って静止した。

上体を起こして、顔をさする。額が熱く、鼻と頬骨が痛い。

「ええい馬鹿者、何もなくてで躓くな！」

「そんなこと言たって、急に足に……」

何も知らずに、同じく背中で寝そべっている綺羅姫は、談子を怒鳴りつける。その背後から目を光らせた刺客が迫って来ているとも気付かずに。

刺客は、素早く綺羅姫の身体をロープで縛った。談子が躓いたものと同じものだ。それで初めて、背後の人物に気付き、綺羅姫はもがく。

「何をやる、離すのじゃ！ 児童虐待じゃぞ、PTAに訴えてやるわ！ こんなことして、ただで済むと思うな！」

「お黙りなさい。あなたが大人しくしていれば、誰もこんな手の込んだことしないわ。また勝手に部屋を抜け出して、いつになれば学習するのかしら？」

綺羅姫を捕まえたのは、艶やかな黒い短髪を靡^{ほひ}かせた、美しい女子生徒。大和撫子という言葉が、とてもしっくりくる、清楚な雰囲気^{あきのた}を醸し出している。

生徒会書記の、秋田 イナホだ。

「ナイス、イナホちゃん！ 今日も中々、手こずったわね」

向こうから、みかんが駆けてくる。合流し、捕まえた綺羅姫に説教していた。イナホに針を抜いてもらい、蛇羅と暁も、ゆっくりと目を覚ます。話を聞いている限りでは、例の置物を壊したから怒っているわけではなさそうだった。彼女たちも、談子をとより、綺羅姫を追いかけていたみたいだし。

ひよっとすると、ビビッて逃げ回っていたのは、ただの徒労だったのだろうか？

「ところで、あなたはどなたー？」

ずいっと、みかんがしゃがんで談子に顔を近付ける。まだ心の準備もできていなかった談子は、驚いて、反射的に土下座した。

「ごっ、ごめんなさい、置物壊しちゃって」

「置物ー？」

「えっと、何か国宝級とかいう鬼の置物を」

「ああ、あの教室にあったやつかー。ははあ、綺羅姫に騙されたんだね。あれは生徒の誰かが美術で作った、ただの陶器だよ。壊したって平気平気」

あははーと笑い飛ばされ、談子は啞然とする。次第に自分が無駄足を踏んでいたのだと理解し始め、綺羅姫を睨みつける。

綺羅姫は一瞬、怯えて身体を震わせるも、すぐに開き直った様子で唇を尖らせて、顔を逸らした。

「何か、巻き込んだみたいで、ごめんねー。うちの生徒会長が、ご迷惑かけました。ちびっ子だからさ、一人でうろうろすると道に迷うって、いつも言ってるんだけどねー。あたしたちも、これから気をつけるから。あと、ごめんついでなんだけど、今日あったことは、忘れてくれないかな？」

みかんは手を合わせて、お願いしてくる。談子は訳が分からず、首を傾げる。

「今日って、綺羅姫のことですか？」

「そう、この子のことも、この子を追いかけていた、アタシ達のことも。忘れたほうが身のためよ。とにかく、他言無用ね」

みかんは少し怖そうに表情を歪めて、談子に顔面を近付けた。

「もし誰かにチクったりしたら、鬼に食い殺されちゃうかもしれないよー」

談子は口を開けて、啞然としたままだった。それを怯えて声も出なくなると勘違いしたのか、みかんは満足気な表情を見せる。そして立ち上がり、他の役員を誘導。そのままこの場を去っていく。

騒ぎ立てる綺羅姫と、睨むような眼差しの暁がしばらくこちらを見ていたが、やがて姿も見えないくらい、遠くへ去っていった。

「……………」

その間、談子は無言で、その場に座り込んでいた。頭の中を整理するのに、かなり時間がかかった。

そして、やっと考えが纏まると同時に、無意識にガッツポーズをとっていた。

今の言いよう。やっぱり、この学校には鬼がいるんだ！

あの秘密主義的な生徒会は、きっと何かを隠しているに違いない。

何だか燃えてきた。これはもう、探るところまで探るしかないだろう。

意気込んで、談子は立ちあがる。拍子に、ポケットから何かが転げ落ちた。白い紙が、小さく丸めて固められていた。開いてみると、それは手紙だった。

『明後日の日曜、校門にて待つ。 追伸、購買は休みじゃ、おやつを持って参れ。 本条綺羅姫』

いつの間に、こんなものを書いて入れたのだろうか。それはともかく、これは綺羅姫からの招待状だ。日曜日なら生徒会の面々に捕まる心配もないから、好きなだけ遊べる、という魂胆なのだろう。

普段なら、面倒くさいから却下するところだが、今回ばかりは乗ってやろうじゃないか。

邪魔が入らない休日の内に、必ず、鬼を見つけてやる！

意気込んで、鼻息も荒く、談子は帰宅の途についた。

七. キョンシー使いの危惧

日も傾きかけた夕刻。人気のない、使われていない古い教室に、五つの人影がやって来た。その内の、飛びぬけて小さな影が、てくてくと教室内に入る。

小さな赤い下駄、白い足袋。紅白の巫女装束を身に纏った、長い黒髪の童女――綺羅姫は、立ち止まって振り向いた。

その顔は、何か文句を言いたそうな表情で溢れているが、口にはしなかった。

「それじゃあ、あたしたちも帰るね。もう誰かを巻き込んだり、迷惑かけちゃダメだよ」

手を振る副会長。返事はしなかった。代わりに、ふいとそっぽを向いた。それを見て、書記が冷たい眼差しをぶつけてくる。

「分かっているでしょう？ あなたに関わった人間は、みんな不幸になるの。あなたの正体を知られて、辛い思いをするのはあなたなんだから、いい加減大人しくなりなさい」

「まあまあ、今日はその辺にして」

追い詰めるような書記の説教を、会計が宥めて終わらせる。その側で、新入生が険しい顔をしていた。副会長が、その顔を覗き込む。

「どうしたー？ ケンカ番長」

「誰がケンカ番長だ。勝手に変な役職を作るな」

「だって、他に役職ないし。覚^さ先輩は、魅惑のプリンスとか名乗ってたよ。それでも引き継ぐ？」

「絶対に嫌だ。何考えてんだ、あのバカ兄貴は」

ケンカ番長は機嫌悪そうに副会長に愚痴った。

「それより、あんな脅しで今時の高校生が大人しく従うとでも思ってるのか？ 後でシメて言い聞かせた方がいいぞ」

「そんなことしたら、余計に事が荒立つじゃんよ。大丈夫だよ、そんな口の軽そうな娘には見えなかったし。心配要らないって」

「どうだかな」

「何よ、あたしのやり方に文句でも？」

「そうじゃないが。ただ、あいつにあの捨て台詞は、逆効果じゃないかと……」

ケンカ番長は憶測する。前々から鬼だ鬼だと騒いでいた、あのおかしな女子生徒には、常識が通じないであろうと。まして、あの台詞では、鬼探し頑張れよ、と応援しているのと変わらないのではないかと思えるくらいだと。

その意図を簡潔に説明すると、副会長は少し考え込むような素振りを見せるも、やっぱり特に何も考えていないように振舞って、軽く返答した。

「とにかく、暫くは彼女から目を離さないように。暁くん、同じクラスなんでしょ、頼むわよ」

「言われなくても、前からやってる。あいつは危険人物だ」

「あー、そんなこと言って、あの娘にホの字だったりしてー。キャハハ！」

「ふざけんな、ぶっ飛ばすぞ」

「わー怖ーい」

ギャーギャー喚く、賑やかな声は次第に立ち去り、そこには静寂が訪れる。

教室の中で一人立ち尽くす少女が、拳を強く握りしめる。わずかに頬が綻び、口が釣り上がった。

八. 休日の校内

日曜。

そもそも、休日というものは、その名のとおり休むために用意されているもので、そんな日に早起きするなんて行為は、日頃のだらけた習慣に染まった身体が許してくれない。

結局、談子がガラガラと支度を整え、学校へやって来たのは、太陽が頭の真上を通過しようとする時間となった。

「遅い！ 遅すぎるぞ談子よ、何時間待たせれば気が済むのじゃ？」

鉄製の校門の上に器用にも腰を据え、綺羅姫はイライラと貧乏ゆすりをしていた。談子の姿が目視できるようになった途端に、怒鳴りだす。いつから待っていたのかは知らないが、あの怒りようからすると、きっと朝からここにいたのだろう。

「ごめんごめん。ちょっと寝坊して。お菓子あげるから、機嫌直して」

とりあえず簡単に謝り、目の前に着地した綺羅姫に、小さな紙袋を差し出す。先日、広島へ里帰りした隣人の帰宅土産にもらったもみじまんじゅうが、たまたま家にあっただけで黙って持ってきたのだ。談子の父は、まんじゅうが好きだが、おそらく貰ったことにすら気付いていないだろうから、ないものがなくなっていたって、怒って瓦割りチョップを食らわされることは、恐らくない。

綺羅姫は紙袋を奪い取り、中を漁る。まだ包装されたままの箱をバリバリ破いて、中身のまんじゅうに手をつけた。

「ほう、もみじまんじゅうか。食うのは何年ぶりかのう。……うむ、なかなかいける」

そしてもぐもぐと食い始める。そりゃそうだ、もし不味いなんて言った日には、校庭の桜の木に縛り付けて、目の前でまんじゅうを、さも美味しそうに食い漁ってやろうかと考えていたが、その必要はなくなったようだ。

もみじまんじゅうの中身は、あんこに留まらず、チョコやらカスタードやら、いろいろな味があってなかなか面白い。談子はチーズが好きだが、綺羅姫は抹茶が気に入ったらしい。

「立ち食いもなんじゃ、わらわがよい場所を知っておる。そこでゆっくりまんじゅうを食おうぞ」

口の周りに緑色の粒をつけたまま、綺羅姫は談子の背中に飛び乗った。一昨日と同じ要領で出発しようとしたが、力を入れた途端に腰と腹と足に痛みが走り、動きが止まる。

「……どうした？ 談子よ」

固まってしまった談子に疑問を覚え、綺羅姫が談子の頭を軽く叩く。

さっきまではなんともなかったのに。朝から軽い痛みはあったものの、これほどの激痛には至らなかった。やはり筋肉の使いどころが普段と違うからか。運動不足者の厳しい現実を改めて実感した瞬間だった。

「くっ、筋肉痛は二日後にやって来る……」

「どこの年寄りじゃ、お主は」

辛うじて出せた台詞がそれかと、綺羅姫は呆れていた。しかし、痛いものは痛い。だからとい

って、ここでこうしていても仕方がないので、まるで錆び付いたからくり人形のように、ぎこちない足取りで、ゆっくりゆっくり校内に入っていった。

▲ ▲ ▲

同刻。人気のない購買部に、一人の女子生徒が足を踏み入れた。片手で本を開き、歩きながら読んでいる。本のタイトルは「般若心経」。

休日のため売店は営業していないが、自動販売機は時を問わずに延々と商売を続けている。彼女は本を閉じ、鞆の中にしまいこんだ。

紙パックの飲料水が横一列に並ぶ、直方体の機械に向かって歩みを進めながら、ポケットから百円硬貨を取り出す。

今、女子の間で人気の飲み物は、いちごみるくシェーキとかいうジュースだ。

この生徒の目的も、このいちごみるくシェーキだった。人気という割に、今まで一度も飲んだことがないため、その未知の味に少し期待を抱きながら、販売機の目前にまでやって来たのだった。

「あー、イナホちゃんだ。おはよー。珍しいね、ジュース買いに来るなんて」

そこには先客がいた。長い茶髪を後ろに流した、明るく元気のよい、しかしやる気なさそうな女子生徒。

同じ生徒会役員の二年生、名前を、夏みかんと言う。三年生の先輩にタメ口をきいちゃっても平気なのは、彼女のほうが役職が上だからである。

「おはよう、みかん。今朝は時間がなくて、食事ができなかったのよ」

生徒会書記の役職を持つ、艶のある短い黒髪の子供生徒――秋田イナホは、同胞に向かって挨拶と笑みを返す。ふと、みかんの手元を見ると、イナホが求めていた飲み物が握られていた。早くもストローを刺し込み、中身を口の中に吸い込んでいる。

「ちょうど良かった、一緒に生徒会室まで行こうよ」

「ええ、いいわよ」

みかんを待たせ、イナホは自動販売機の前に立った。硬貨を投入、所望の紙パックが飾られている場所に取り付けられたボタンを押す。しかし、何の反応もない。もう一度押すが、やはり結果は同じ。故障しているのか。そう思って強く押してみた。やはり品物は出てこない。連打してみたが、突き指しかけたので止めた。

なぜだ、なぜ出てこない。この販売機は買い手を選ぶのだろうか。こんな、いまどきの飲み物が似合わなさそうな顔をした人間に、いちごみるくシェーキは売らないと、そう言うのか。

少し苛立ってボタンを睨み付けた。そこに書かれた赤い文字が目に入る。

売り切れ。

「……………」

暫く考えて、イナホはゆらりと後ろを振り返った。「ん？」と首を傾げる、みかんと目が合う。そして素早く手に持っていた鞆からノートを取り出し、最新のページを開いて床に這いつく

ばり、さらさらと何かを書き始めた。

「何してるの、イナホちゃん？」

その奇妙な行動に、いささか不審感と興味を覚え、みかんは上からノートを覗き込む。

「お父様お母様、私はいちごみるくシェーキを飲むという、ささやかでかつ壮大な夢を、いとも簡単に諦めなければならない境遇に陥らされてしまいました。所詮、私の夢などタコの入っていないたこ焼きのように質素でくだらなく有り得ないものなのです。自信をなくしました、この失意の念を背負って、お祖母様の元へ旅立とうと思います。せっかくなので、ここにその名前を記しておきましょう。そう、夏みかんという、私を死へ追いやった愚かな人間のその名前を！」

「ええーっ!? ちょ、ちょい待ち、アタシのせいっすか？ 早まらないで！ こ、これあげるから、あんまり残ってないけど、あげるから許して！」

みかんは慌てて、罪人のレッテルを回避しようと、必死でイナホを宥め始めた。

▲ ▲ ▲

遺書に気に入らない人間の名前を書こうとするのは、イナホの嫌がらせ的に悪い癖だ。

普段は真面目で人望も厚い、万能な人間なのに、ストレスがたまると、こうなるから困る。

みかんは、半分以下に減ったいちごみるくシェーキを、ゆっくり味わって飲んでいるイナホを横目に、深い息をついた。

この学校は、一風変わった制度をとっていて、別に二年や三年にならないと生徒会役職につけない、ということはない。逆に誰でもなれるというわけでもなく、選ばれた人間だけが生徒会側のスカウトで、毎年卒業生などの穴埋めに招かれるという形を取ってきたので、選挙などを行ったことは一度もなかった。現に今も、入学したての一年生が一人、今年卒業していった元生徒会役員の推薦によって上層部に所属している。

一年前、みかんが入学直後に生徒会役員になって、初めてイナホと出会った時から、その癖は健在だった。

イナホだって、本気で言っているわけではないだろう。と、信じたい。三年生の他の役員に聞いてみれば、「入学当時はこんなことはなかった、あの時から、彼女は変わってしまったのだ」と口を揃える。

——例の人が、死んでから。

澄ましていても、可哀想な人なのだ。まだ入学する前の出来事だから、みかんはこの次第を、又聞きにしか知らない。だから、その時、彼女がどんな様子だったのか分からないから、うまく励ます方法も思いつかない。

願わくば、あと一年、平穩に過ごさせてあげられるのが一番だなと思う。

そのために、休日にも拘らず学校に生徒会を招集させて今後の方針を検討する全体会議でも行ってみようかと思ったのだが、どうにも集まりが悪くて困る。そりゃあ、休みにまで学校に来たいと思うような人間が生徒会に居るわけもない。みかんだって本当は、家でごろ寝しながら、ドラマの再放送を見たかった。

しかし平日だと、最近やけに活発に動き出した綺羅姫に、妨害される恐れがある。他に適切な方法がなかったのだ。

ポーっと、明後日の方向を見て途方に暮れていると、並んで歩いていたイナホが横目に声を挟んだ。

「あなたが副会長として、一生懸命やってくれていることは感謝するわ。でも、酷いかもしれないけれど、どうにもならない現実ってあるのよね」

「えっ、何の話ー？」

驚いて、みかんが聞き返すと、少し間を置いて、イナホは切り出した。

「……また、彼女は、馬となる人間を見つけたようだよ」

「ああ。あの娘が、綺羅姫にどんな影響をもたらすかなんて、まだ分からないけどね」

「分かってからじゃ、もう手遅れよ」

彼女によって、馬に見初められた者は、少なからず命を落とすという謂われが、昔からある。それは綺羅姫という童女の存在そのものが関係しているが、それは極秘事項となっているため詳しくは表立って語られない。でも実際、彼が死んだのは、綺羅姫の馬をしていたからだ。

「でも、あの娘は普通の女子生徒って感じだったし、しばらく様子を見てもいいんじゃないの？」

「そうね。……いけない。図書室に用事があるのを忘れていたわ。先に行ってくれる？」

「ああ、うん。いいよ。それじゃ、後でね」

そして二人は、道を別った。

九. 鬼の名は暴かれ――

校舎の裏庭を、談子と綺羅姫は歩いていた。

綺羅姫が知るといふ、ゆっくりと休憩できる場所に向かっているところだ。

談子の筋肉痛が著しく悪化したため、仕方なく綺羅姫も、自分の足で歩いているのだった。歩を進めながら、談子はふと、一昨日の出来事が気になって、尋ねてみた。

「そうだ、一昨日は結局、どうなったの？ やっぱり怒られた？」

「こってり絞られたわい。まあ気にするな、いつものことじゃ。あやつらは、わらわが校内を彷徨くと、決まって叱りに来る。もう、うんざりじゃ」

ほとほと疲れた、と言いたげに、綺羅姫は大きな息を吐く。

「生徒会長なのに、何で歩き回るといけないんだろうね？」

「それは、この外見のせいもあるじゃろう。わらわはずっと前から、この姿のまま成長が止まってしまっているのじゃ。子供の姿でその辺を彷徨かれるのは迷惑なのじゃ」

何かの病気だろうか。精神的な病を患うと、成長が止まってしまう場合もあると、以前テレビでやっていたのを思い出す。もしそうならば、だからこそ自由にさせてあげるべきではないかと談子は考える。

かと言って、その意見を現実のものにするには、色々と厄介な壁が立ち塞がりすぎているが。

「色々、大変なんだね。けど、また外に出たかったら言ってよ。あたしが一緒に散歩してあげるから」

所詮は一生徒にしか過ぎない談子にできる気遣いといえ、それくらいのものだ。綺羅姫は顔を上げ、談子を見つめた。しかし、その瞳は、とても寂しげに見える。

「その言葉だけ、貰っておこう。わらわも、わらわなりに考えた。外を出歩くのは、今日限りにしようと思う。来てくれたことには、感謝しよう。しかし、これ以上わらわの側にいると、お主にもよからぬことが起きるやも知れん」

病気が感染する、という意味だろうか。でも談子は滅多に風邪なんか引かないし、心の病気だって、感染してしまうほど軟な神経はしていない。

「そんなに心配しないでよ、あたしなら大丈夫だからさ！」

綺羅姫の背中を軽く叩く。しかし中々、元気な顔に戻ってくれない。これには談子も、少々困った。

「一昨日も、言われたじゃろう。あまり余計なことに首を突っ込むと、鬼に食い殺されるぞ」

「そうそれ、あたしは、それを探しているの」

一昨日、みかんが言っていた脅し文句だ。今日学校へやってきたのは、綺羅姫と遊ぶことももちろんだが、鬼について調べ倒すという目的もあった。

「本当に、鬼っているのかな？ 綺羅姫、何か知らない？」

「鬼……？ 何を言っておる、そんなもの、迷信に決まっておろう」

冷たく突き放されてしまった。それも、新種の生き物でも見るかのような目で。ちょっとショックを受けたが、負けじと談子は自分の熱意を伝えようと奮闘する。

「そりゃ、みんな鬼なんていないって、物語の中だけの化け物だって言うけどさ。あたしは、絶対いると思うんだよ。だから絶対、この学校にいる鬼を見つけ出してやるんだ」

「仮に、見つけてどうするのじゃ？」

「うーん。どうってことはしないけど、話がしてみたいな。言葉は通じないかもしれないけど、きっと鬼って悪い奴じゃないと思うし、手話でもパントマイムでも何でもいいから、意志の疎通を図ってみたい。なんてね」

馬鹿馬鹿しい話だと笑ってみせる。綺羅姫も首を縦に振った。

「まったくじゃな。……しかし、それが叶うとしたら、実に面白そうじゃ。その時はわらわも混ぜてたもれ」

「オッケーオッケー。一緒に友達になっちゃおう」

そこそこ話に乗ってきてくれた。それが嬉しくて、自然と談子もハイテンションになる。綺羅姫も少し笑ったが、すぐにまた寂しそうな表情を浮かべた。

「……前にも、似たような話をして、わらわを喜ばせてくれようとした者がおった。なつまつりはなひと 夏祭 花人
という、当時の生徒会副会長じゃった」

「へえ、そんな人いたんだ」

物好きな人だ。もしくは、その人も談子と同じく、何か弱みを握られて無理やり綺羅姫の馬という地位に成り下がってしまったクチだろうか。

でも、きっと好意を持って接していたのだろう。綺羅姫も良く懐いていたみたいだ。彼女の少し嬉しそうになった表情が、それを物語っている。

「その人、今はどうしてるの？ もう卒業しちゃったか」

「いや、死んだ」

「死んだって……」

「事故ではない。わらわが、殺した」

静かな、単調なその物言いに、談子は言葉を失い、足を止めた。合わせるように、綺羅姫も立ち止まる。そして控えめに、それでも冷静な声音を保って言った。

「そやつだけではない。以前にも、わらわのせいで、多くの犠牲が出た。わらわが生徒会長などという役職に就かされているのも、生徒会の連中が、わらわを監視しやすくするための建前なのじゃ。連中は、わらわと他の生徒との接触を快く思っていない。だから、わらわが新しい馬を見つけてくるたびに、ああやって怒るのじゃ。……どうじゃ、もうわらわに関わりたくなくなつたじゃろう？」

自嘲するような言い草をぶつけてくる。

そうは言っても、人が死ぬきっかけなんて、いくらでもある。その要因の一つとして綺羅姫を挙げるには、どう考えても証拠が足りなさすぎるだろう。まして、故意的に死に陥らせたなんて、絶対にはないはずだ。やはり事故や、偶然ではないだろうか。

綺羅姫だって、その人を気に入っていたに違いない。今まで背中に背負われて走り回ってもらい、遊び相手になってもらっていたのだから、死んだことに何の衝撃も受けていないわけは、ないはず。

なのに、落ち着いて物事を客観的に見据えようとする意志の冷静さは、とても子供とは思えない。というか、そうであってはならないと思う。

でも、こういう自分の感情を押し殺した子供というのは、危険なのだ。

「綺羅姫が嫌ならやめるけど、そうじゃないなら、自分の意思でやめようとは思わないよ。別にその人が死んじゃったのだって、綺羅姫のせいなのか分からないし」

ここで談子が怖いからやめるなんて言えば、きっと綺羅姫は無駄な罪悪感をすべて受け入れて、一生苦しんで過ごさなければならぬかもしれない。大袈裟だが、そう思った。

鎖は、どこかで断ち切ってやらなければならない。自分にそれができるなら、喜んでしようと談子は考えていた。

それは意外な返答だったみたいだ。綺羅姫は、鳩が豆鉄砲を食らったような表情で、目を丸くしてきょとんとしていた。聞き間違えではないかと示唆しているようにも伺える。

それほどまでに、談子は彼女に信用されていなかったのだろうか。だったら、その考えを少し変えてもらいたい。

「どう？ あたしと一緒に嫌？」

笑いかけた。綺羅姫は、自分の耳がおかしくなったわけではないと確信したのか、顔を赤くして、そっぽを向いた。

「す、好きにすればいいじゃろう。わらわは、別に構わん」

照れているのだろうか。貶し言葉への応答は慣れていても、こういった率直な好意見への反論は苦手ようだ。その仕草が何だか可愛く感じ、談子は歯を出して笑った。



『この世はいつも貪欲だらけ

富を欲する餓鬼どもが、誉れを求めて女鬼を喰らう、乱れた^{うつつ}現

それはやがて御仏の怒りを引き起こし、哀れ女鬼が暴れ狂う

喰われし者に安息なく、月神のみ知る衰弱の^{しらべ}調は虚しく隠れる

鬼は人の欲の塊なのだ

鬼がいるとは、すなわちおろかな人間があふれているに等しき事象

もし、自分が善人であることを示したいと願ふならば

その名を一度、叫んでみると良い。

その名は、その鬼の名は――』

見上げると、銅像が天に向かって伸びている姿が、真下から確認できる。この銅像は「双子の創始者」と呼ばれる、この学校を創立した二人の男を記念して作ったものらしい。双子といっても、本当に血が繋がっているわけではなく、ただ単に顔や背格好が似ているから、そういわれているに過ぎない。

でも、この銅像を作った職人は、きっと二人が本当の一卵性双生児だと思い込んで作り上げた

に違いない。それくらい、並んだ顔はよく似ていた。

胸から上までの銅像は、大きな石の台の上に取り付けられていた。その台に背をもたれかけ、談子と綺羅姫は、ひと時の休息を楽しむことにした。綺羅姫が良い場所だと推すだけあって、静寂が漂い、鳥のさえずりが心を和ませる。

おまけに日中はほとんど日が当たらないので、程よく湿り気があり、涼しく居心地がいい。美術の時間に、ここで一人写生でもできたら、すごく気分がよさそうだ。

しかし談子の頭の上からは、双子の創始者がひたすら何かを話し続けている。無視しようとするればできるが、その内容がどうにもこうにも談子の好きそうな、と言うか求めていた話題そのものだったため、耳が離せない。

「わらわは良く、ここにこっそり散歩に来るのじゃ。この銅像は気に食わんが、湿っぽさが結構好きでな」

「夏とか、気持ち良さそうだよね」

銅像の声は、喫茶店のバックミュージックのようにさり気なく耳に入れているので、別に綺羅姫に話しかけられても普通に対応できる。既に抹茶は品切れ、次に綺羅姫は白餡の入ったもみじまんじゅうを食い漁ろうと、手を伸ばしている。

「……信じてもらえるか分からないけどさ、あたし、モノの声が聞こえるんだよね」

自然と、談子の口から本音が漏れる。不審な目で見られるかもしれないという恐怖もあったけれど、綺羅姫なら何だか聞いてくれそうな気がした。ついでに言えば、やっぱり誰かに聞いて欲しかったのかもしれない。由喜は昔から信用してくれないし、暁に聞かれでもしたら、絶対バカにされて大乱闘に陥りかねない。談子の顔をちらりと見て、綺羅姫は頷いた。

「別に疑いはせん。人間、誰にでも個性というものがあるからな」

意外と落ち着いた、期待に近い返事。談子の心の中に引っかかっていた何かが取れたような気がした。嬉しくなって、話を続ける。

「うん。でね、さっきからこの銅像が、何か喋ってるんだ。ちょっと昔話っぽい話」

「ほう、面白そうじゃ、話してみよ」

談子は頷き、銅像の話丸暗記し、そのまま聞かせた。綺羅姫も楽しそうに耳を傾ける。

「もし自分が善人であることを示したいと願うならば

その名を一度、叫んでみると良い。

その名は、その鬼の名は、たまぐらいのおにひめのみこと魂喰鬼姫尊

人は、そう呼び恐れおののき……どうしたの？ 綺羅姫」

話も終盤に差し掛かったころ、急に綺羅姫が震えだした。

「そ、それは駄目じゃ、その物語は、その名前は……」

頭を抱えて、苦しそうに声を上げる。

いったい、どうしたというのか。病気が再発したのだろうか、それとも、さっきのもみじまんじゅうにあたったのか。

原因が分からない。保健室か職員室に連れて行こうと思いつき、綺羅姫を抱き上げようと手を差し出す。

だが、その腕が静止した。

綺羅姫に触れられない。

なんだか、とてつもなく――。

異形なものが、目の前に現れた。

その長い、恐いほど黒かった髪は根元から徐々に色素を失い、不気味な白髪へと変貌を遂げた。さらに、その髪の間隙から短い、赤色の角のようなものが二本、飛び出している。

荒い息を周囲に振りまきながら、舞台上踊る歌舞伎役者のように、頭を振り乱して綺羅姫は暴れる。

談子は、無意識に後ずさっていた。

長く垂れ込んだ前髪の間隙から除いた綺羅姫の顔には、あの愛らしく小生意気な童女の面影は、これっぽっちも見当たらない。

喩えるなら、その顔は般若の面。膨れて垂れた目蓋、青白く削げ落ちた頬、頬骨辺りまで横一直線に裂かれた赤い口は、いびつな三日月形を描いている。

その形相を見た全ての者が、一番にこれを思い浮かべるだろう。

――鬼。

「う、うそ、綺羅姫……？」

指の長さと同じくらい伸びた鋭い爪を腕と共に垂らし、鬼が立ち上がった。談子の本能が、逃げろと信号を送ってくる。しかし、震えの止まらない全身がそれを妨げ、思うように身体を動かすことができない。

「何やってるの、早く逃げなさい！」

突然、背後からの怒鳴り声。

聞き覚えのある声によって我を取り戻すと、金縛りが解けた。

必死で逃げようと、談子は足を動かす。振り返ると、校舎の窓から血相を変えたイナホが、身を乗り出していた。

「振り返っては駄目よ、真っ直ぐ走るの！」

言われた通り、がむしゃらに走る。しかし、背後からひしひしと感じる邪悪な気が、どんどん談子に吸い付いてくる。あまりの恐怖と、怖いもの見たさが混ざって、思わず後ろを振り返ってしまった。

目の前には、微かな光を遮るように覆い被さろうと、飛び掛ってくる鬼の姿が。長い爪の先端が、白く鋭く光る。談子の瞳は大きく開き、その異形の姿を眼球にくっきりと焼き付ける。

イナホが息を呑む音が、耳を通り抜けた。それと同時に、腕を思いきり引っ張られ、窓の棧から校舎内へ引き込まれる。言うまでもなくイナホの仕業だ。

棧を乗り越え、校内の冷たい廊下に這い蹲るようになって落ちる。痛がる間もないうちに、イナホによって強引に身体を起こされた。

「立って、急いで逃げるのよ」

「でっ、でも、綺羅姫が……」

「あれは鬼よ、綺羅姫じゃないわ。死にたくなかったら、さっさと走りなさい！」

怒鳴られ、強引に腕を引かれ、談子は頭の整理も付かないまま、一心不乱に廊下を駆け抜けた

。

遠ざかっていく、化け物の咆哮。

混乱と恐怖と、そして絶望が頭の中で寄り固まって気を失いそうだ。談子の瞳から、何度も何度も涙の粒が飛び散っていたことに、きっとイナホは気付いていない。

立ち止まった時には、既に乾いてしまっていたから。

十. 鬼の正体

階段を駆け登り、人気のない教室に飛び込んで息を潜める。二年生の使っている教室だ。

沈黙の中で耳を澄ませると、遠くから、この世のものとは思えない咆哮が聞こえてくる。いくつも壁や床を隔てているにも拘らず、その威圧感が嫌というほど伝わってきた。

やがて、それも聞こえなくなり、談子とイナホは静かに安堵の息を漏らした。

落ち着いたところで、神妙な面持ちでイナホが切り出す。

「あなた、知っていたの？」

「え？」

問い掛けの意味が分からず、談子は首を傾げる。

「鬼の名前を^{あば}発いたのでしょうか？ 何をしたの、話しなさい」

イナホの睨み付けてくる、焦りの含まれた瞳を見つめ返し、談子は先程起こった出来事を、細かく説明して聞かせた。思い出すまでもなく、あの時の光景は、今でもしっかり頭に焼き付いている。

それを黙って聞いたイナホの表情が、徐々に曇る。そして談子が話し終えるのと入れ替わりに、口を開いた。

「この学校の、鬼の伝説は知っている？ 今となっては、単なる迷信となっているけれど」

談子は頷く。

「鬼はね、綺羅姫の身体の中に封印されているのよ。そして鬼の名前を発いてしまうと、封印が解けて鬼が暴れだす。鬼の名前なんて、もう文献にも残っていない希少な情報だけれど、稀にどこからか、その名前を探し出してしまっている人がいるの。そういった人たちから鬼の封印を守ることが、生徒会の仕事だったのだけれど――詰めが甘かったわね」

イナホは俯き、苦悩を露に身体を震わせる。

まだ、頭の中は混乱しているが、談子がしてしまったことが、とんでもない過ちだったのだと、それだけは理解できた。

頭を上げ、イナホは再び、口を開いた。

「あなたは、『物語りの智慧』の持ち主なのね……。昔から、何百年に一度かの周期で、この地の住人に宿るとされる、極めて稀な能力。生物以外の無機物な生命との会話を可能とし、知られざる世界との繋ぎとなれる、鬼の封印を簡単に解いてしまう可能性を秘めた、ここでは最も恐れられた力。自分の持つ力のことを、理解していたの？」

「……よく、分かりません。他の人とは違う力だとは、前から思っていましたけど」

「そうね、専門的な文献や資料は、もうここの図書室にしか残されていないし、知っているはずがないわね。だとすると、今回の出来事は、偶然が重なった結果。そう考えていいわね？」

「それって、あたしを疑ってるってことですか？ わざと、鬼の封印を解いたと？」

この能力の意味するところを理解した上で、綺羅姫に近付いたのではないのか。イナホは、そう言いたいのだろうか。未だに現状が理解できない談子は、勝手に誤った方向に話を進められ、少し不機嫌に彼女を睨みつけた。

しかし、イナホは首を横に振った。

「逆よ。あなたのことを疑いたくないの。『物語りの智慧』は、鬼を現世に蘇らせてしまう危ない力だけれど、逆に鬼を再度封印することのできる、最も確実な手段を得られる能力でもあるらしいから。ぜひ、あなたの力を借りたいわ。覚醒してしまった鬼を、何とかするために」

敵意のない、イナホの言葉を、談子は信じようと思った。

鬼に関しての知識は、確実にイナホのほうが豊富に持っている。談子に鬼を何とかできる可能性があるのならば、イナホの指示に従って動くのが、一番確実だ。

談子が頷くと、イナホは鬼についての説明を始めた。

▲□▲□▲

学校のあるこの場所は、かつては大規模な研究所として使われていた。

鬼の研究をするためのものだ。鬼は、人々を幸福に導く奇跡の力を持つと信じられていたため、それを人間の手で自在に操れないかと、彼らは考えたそうだ。

山奥から捕まえてきた鬼を幽閉し、拷問や人体実験を繰り返した。鬼は当然のごとく暴れた。その力は圧倒的で、その手に触れたもの、目があった者たちは次々に魂を抜かれ、死んでいった。あまりの被害の甚大さに、操ることは諦めて鬼を処分しようと試みたが、結局どのような文明の利器を用いても、鬼を退治できなかった。

ある日、この地に『物語りの智慧』と呼ばれる不思議な力をもった人間が現れた。その者は山奥の、鬼について良く知る古木の声を聞き、鬼を封じる方法を教えてもらった。そして見事、鬼を封印することに成功したのだという。

研究所の責任者たちは、この地に結界を張り、鬼が外に出られないようにした。そして、『物語りの智慧』を持つ者が死んだ後、また来るべき時に生まれ変わったその者がここへ戻ってくるようにと、この地を人が集う場、すなわち学校に作り変えた。

その者たちは、今も銅像となって、この地を監視し続けているという。

▲□▲□▲

「あなたは、その物語りの智慧を持つ者の生まれ変わりなの。あなたがここに現れ、鬼が覚醒した。これは、きっと運命だったのかもしれないわね。これから先、何が起こるか分からないけれど、あなたは無事に生き延びて、勝機を作り出してくれると信じているわ。……私の説明、分かった？」

不安そうに聞き返して、確認してくる。未だに談子は、訳が分からず眉を顰めていた。

「まあ、分かったような、分からないような……。でも何で、綺羅姫の中に鬼が封印されていたんですか？」

「鬼を封じる方法――。それは、穢れのない幼子の中に鬼を取り込ませ、その内部にて出口を閉ざしてしまうこと、だったらしいわ。その幼子に選ばれたのが、綺羅姫なのね。存外、信じられ

ないような話かもしれないけれど、綺羅姫はもう何百年も、あの姿で生き続け、この学校に留まっているの。鬼のもたらす力の影響でね」

「つまり、生贄みたいなもんですか？」

「酷い言い方をすると、そうなるのかしら」

「あたし、綺羅姫を助けたいです。どうすればいいですか？」

昔の人の、勝手な実験だか何だかの犠牲になって、綺羅姫は今なお苦しんでいる。そんなの、あまりに可哀想だ。自分がその原因の一つになってしまったのなら、それを解消するきっかけの一つにもなりたい。それくらいしなければ、次に会った時、綺羅姫に顔向けできない。

「あなた一人の力では難しいわ。鬼は、目が合ったり、自分から身体を触れに行った人間の魂を吸い取ってしまうの。あなたが一人で立ち向かって行っても、やられるのがオチよ」

鬼は恐ろしい生き物。それだけは確実だ。談子の敵う相手では、決してない。

「綺羅姫を助けたいと願うなら、このまま逃げ延びて日没を待つといいわ。鬼は月の魔力に弱いから、夜になると自然と封印の中へ戻っていくの。そうすれば、本来の綺羅姫の姿を取り戻すわ」

「日没っていっても、今はまだお昼だし、逃げ切れるかどうかも……。それに、魂を吸い取られるってことは、死ぬって意味でしょう？ だったら、悠長なことを言っている場合じゃ……」

「それに関しては、特殊な事例があつて……」

イナホが解説しようとした刹那。

すぐ側で、おぞましい悲鳴が上がった。

鬼の声。

とても近くから聞こえる。すぐ、側まで迫って来ている？

「……真下にいるのかしら。鬼は人間の魂の匂いを感じ取って、どこまでも追いかけてくるの。ここも危ないわ、場所を変えないと」

イナホは携帯電話を取り出し、通話を始めた。口調や会話の内容からして、相手は生徒会副会長の夏みかんだらう。彼女も学校に来ているらしい。

こんな祝日に集まって、生徒会役員は何をしていたのだろうか。

「月見さん、時間がないから、急いで生徒会室へ向かって頂戴。みかんが待っているから、詳しい話はそこで聞いて、彼女の指示を仰いで」

「え、イナホ先輩は、どこ行くんですか？」

通話を終え、談子を残して教室を出ていこうとするイナホを、慌てて呼び止める。

「ちょっと図書室にね。私も、できる限りのことは調べるわ。——お願いよ、絶対、生き残ってね」

イナホは少し寂しげに微笑み、教室を出て行った。

取り残された談子も、とりあえず教室から出て、辺りを見渡してみる。

休日なのだから当然だが、校舎はとてつもなく静まり返っていた。さっきまで耳を劈くほど聞こえていた鬼の咆哮も、まるで夢だったのかと思えるほど、何も聞こえない。

でも、夢じゃないのだ。目の前で、綺羅姫は変貌を遂げた。そのリアルな光景は、今も目を閉

じれば、目蓋の裏で繰り返し、ホラー映画のように上映される。

その誰も望まざる異形の姿に、談子は自分のすべき決意を、握り拳に固める。

「絶対、助けてあげるからね……」

約束は、破りたくない。嘘も裏切りも、大嫌いだから。

その為には、まず何をすべきだろう？ 自分で思いつけることは考えてみようとするが、全く浮かんでこない。

日没を待つ以外に、今すぐ鬼を封印するには、どうすればいいのか。イナホの説明では、根本的なところが分からなかった。

やはり言われたとおり、生徒会室へ行って、みかんから話を聞き、指示を仰ぐのが、最も確実に最短な方法だろう。

待ってて、必ず行くから。

談子は走り出した。

十一．キョンシー使い参戦

下の階には、鬼が徘徊している。

それは分かっているのだから、とにかく距離をとろうと、談子は上へ上へと階段を登っていった。考えなく登っていくと、屋上へ通じる扉に突き当たってしまった。こんな場所へ来るのは初めてだ。

扉のノブを回してみるが、鍵がかかっている。まあ休日だし、当然と言えば当然だが。

それに、屋上に出たところで、逃げ場なんてない。素早く降りて、別のルートから生徒会室へ行かなくては。というか、生徒会室はどこにあるのだろうか。

場所すら知らないのも、また情けない。

迷子になってしまい、頭の中がパニックだ。知恵熱で溶けかかった脳みそを、更に混乱させるように、鬼の鳴き声が響く。

一瞬、驚いて身体を震わせる。かなり逃げたつもりなのに、さっきよりも近くなっている気が。

だんだん上へ上がってきている？ 身体が金縛り状態で動けなくなる。

「お願いだから、こっち来ないでよー。本当にヤバいって……」

頭を抱えて、慌てる。下のほうから、階段を登ってくる足音が聞こえる。布を擦るような、静かな摩擦音も。かなり速いペースで近付いてくる。

今、階段を下りて逃げようとするれば、鬼と鉢合わせになる危険がある。下手には動けない。

談子は、屋上への扉のすぐ側に積まれた、机の下に潜り込んだ。身体を丸めて、できるだけ気配を消すように心懸ける。気付かれずに、やり過ごせるだろうか。

足音が大きくなる。比例して、心臓の音も、もう爆発寸前だ。

頭にどンドン血液が送られて、気が遠くなる。脳みそが破裂してしまいそうだ。

ダカダカダカ。すぐその階段を登る、素早い足音。少し、鬼のものとは違う気がした。

だとしたら、誰？

歯を鳴らしながら、ゆっくりと頭を上げてみる。足音が止まった。階段を登ってきたのは、人間の影だった。

しかも、よく見馴れた――。

「あ、あかつ……」

声が震える。目尻から、涙が滲み出た。それは安心感から来るものだったのだろう。目の前に立つ男子生徒――春眠暁が、まるで正義のヒーローのように感じた。

「――月見!? お前、何でこんなところに」

そのか細い声に、気付いてくれた。暁はこちらを見て、目を丸くする。顔は汗だくで、かなりの距離を、かなりの速度で走ってきたのだと見て取れる。

「ぐうぐう！」

階段から、別の声が出た。幼い子供の声のように聞こえたが、はっきりとは分らない。

暁は、声のした方角をちらりと見て、叫んだ。

「そのまま突っ込め、安眠！」

そして、こちらへ飛び、談子を庇うように机の下に滑り込む。突然の事に驚いて声を上げようとしたが、その口を暁の手に塞がれる。

屋上へ向かう扉の前に、誰かが駆けて来た。

小さな女の子だ。背丈は綺羅姫と同じくらい、黒い長い髪を細い三つ編みにして、頭に逆台形の円柱のような形をした帽子を被っている。

袖が大きく広がった中国風の服を着た、可愛らしい女の子だった。

眠そうな顔をしていて、活発に動いているのに、その目は寝ているように、トロンと閉じている。その肌の色は青白く、血が通っていないのかと思うくらいに、冷たそうに感じた。

女の子は扉の目の前で立ち止まり、軽々と地面を蹴った。すさまじい跳躍力で天井に張り付き、身を潜める。

直後。

「ガアアアア！」

鬼の音が、すぐ側で響いた。階段を駆け登ってきた鬼が、そのまま真っ直ぐ突進。扉に激突したのだ。

破壊音を立てて、扉が変形する。まるでダンボールのように易々とへしゃげて、吹っ飛んだ。扉を追いかけるように、鬼も屋上へ飛び出していった。

その後、鬼の咆哮は遠くなり、激しい金属音と共に、聞こえなくなった。

あっという間の出来事だった。既に、暁の手は談子の口から離れていたが、呆然としすぎて、声すら出てこなかった。

「よくやった、安眠」

「ぐうっ」

暁は立ち上がり、天井に張り付いている女の子に声をかける。安眠と呼ばれた女の子は、身軽に地上へと降り立ち、胸の前で手を合わせ、お辞儀した。そして、すぐ目の前で座り込んでいる談子の姿に気付き、恥かしそうに暁の後ろへ隠れる。暁は視線を談子に移し、声を掛けた。

「怪我はないか？ 立てるか」

「うん、たぶん、大丈夫……」

談子は何とか起き上がろうと、身体に力を入れる。しかし震えは止まらないし、腰が抜けたようでは立てない。暁は呆れた息を吐き、談子の手を引いて起き上がらせた。まだ足がガクガクするが、何とかバランスを保って直立できるようになった。

「鬼が気になる、屋上に出るぞ。歩けるか？」

頷いて、一歩前に踏み出した。震えは抜けないものの、何とか歩ける。初めてスケートリンクに立った時のことを思い出した。あの感覚とよく似ている。

危なかつしくて見ていられなくなったのか、安眠が徐々に近付いてきて、恐る恐る談子の手を握った。

冷たい手。でも柔らかくて優しく、かなり嬉しかった。

「ありがとう」

にっこり笑いかけてみた。まだ筋肉が強張って、ぎこちない笑いになってしまったが、気持ちは伝わったらしい。安眠も笑い返してくれた。

暁を先頭に、ゆっくり外に出る。屋上は静かだった。風だけが、下界で起こっている騒動など知りもしない、といった様子で、穏やかに吹き抜けていく。

雲ひとつ見当たらない、晴天。その爽やかさに圧倒され、空を見上げる余裕さえなかったのだと、初めて実感した。

目の前には、無残な姿になった鉄の扉が横たわっていた。その向こうのフェンスが突き破られ、大穴が開いている。

「鬼は落ちたらしいな。ここは暫く安全だ」

周囲を観察しながら、暁が無事を確認する。軽く扉を蹴り飛ばし、こちらに視線を向けた。

「で、お前は何で、こんなところにいるんだ？」

「安眠って呼ばれてたよね。アンちゃんって呼んでもいい？」

「ぐうぐう」

「おいコラ、人の話を聞け」

安眠は、ぐうぐうしか言わないので、何を言っているのか分らない。それでも、なんとかそれなりに会話っぽくなってきたなと思ったのだが、眼を飛ばす暁に遮られる。

ばつが悪そうに、談子は顔を上げた。

「何でって訊かれてもねえ。何から話せばいいのか。暁こそ、こんなところで何やってんの？ この子誰、暁の妹？」

「違う。こいつは俺が使役するキョンシーだ。休日登校命令が出たんで、ついでに連れて来たんだが、幸か不幸か、鬼が暴れていたところに出くわしたんだよ。文句あるか」

偉そうに腰に手を当て、簡略的な説明をする。談子は安眠と暁を交互に見て、眉を顰めた。

「キョンシー？ キョンシーって、あれでしょ？ 中国の、なんか、おでこにお札貼ってあって、ピョンピョン跳ねるやつ」

「アバウトな前提知識だが、まあそういうことだ。……何だ、その疑り深そうな目は」

「だってさー、キョンシーなんて、いまどきいると思う？」

「いまどきいない鬼だって、ここにいただろうが。鬼は信じるくせにキョンシーは信じないのか、この偏屈我儘女め」

「そこまでいうかな。まあ、当たってるから否定はしないけど、あんたに言われると腹立つよね」

相変わらず口の減らない奴だ。談子が呆れ返って肩を竦めていると、左下の足元で、安眠が何か、ぐうぐう言っていた。

何かと思って下を見れば、安眠の左肩の部分が妙に萎んで、服の裾がヒラヒラと風に揺れている。さっきからずっと手を繋いでいたはずだ。今も手を握っている感覚がある。

ふと自分の手を見て、叫ばずにはいられなかった。

「えっ、手っ？ ギャー―――!!」

談子が手に握っていたのは、肩から下が取れた、細い人間の腕だったのだ。この細さといい、土のような血の気のない色といい、明らかに安眠のものだ。

「ぐうっ、ぐう！」

慌てて安眠は腕を取り返し、袖の中に通した。しばらく固定していると、くっついたらしく、腕は元通りの位置につき、自分の意志で動かせるようになっていた。

その間、談子は陸に打ち上げられた金魚みたいに、口をパクパクするしかできなかった。その姿を見た暁が、見下すように笑う。

「信じる気になったか」

「あわわ、ううう……」

信じる気になった。と言うか、そうしなければ、更にとんでもないものを見せられそうな気がしたので、とにかく無心で頷いた。

「とりあえず、俺たちのことは話した。で、お前はこんなところで何をしてる？ 暫らくは鬼に追われる心配もない。一からでいいから、説明してみろ」

逃げ道も見つからず、談子はしぶしぶと頷いた。

十二. ゾンビに追われて生徒会室

屋上のだ真ん中に三角形を描いて座り、談子はとりあえず、今日学校に来てからの経緯を話して聞かせた。

話せば話すほどに、暁の顔が歪んでいくのが分かる。その身体から迸るオーラは、明らかに怒りを含んでいる。

それを敏感に察知し、安眠が何度も何度も宥めるが、ついに暁のこめかみが痙攣を始めた。

「――ってなわけで、イナホ先輩と別れて、屋上前の行き止まりで迷子になっていたら、二人が来た」と

「すると何だ、鬼の封印を解きやがったのは、お前か」

「そうなりますね、はい」

「はい、じゃないだろ！ だから俺は何度も言ったんだよ、鬼なんていないって。お前みたいにな、好奇心で何にでも首突っ込みたがる奴が、一番危ないんだ。何度も何度も、鬼の話はするなって忠告したのに、人の話も聞かずに余計なことばかりして、人の仕事増やしやがって！」

間髪入れずに怒鳴り散らしてくる。暁がここまでキレたのを見るのは初めてだ。いつも談子が鬼の話をする度に割り込んできて、頭ごなしに否定を続けていたのには、こういう理由があったのだと、今更ながらに納得する。でも、暁が生徒会役員だなんて知らなかったし、生徒会が鬼の秘密について、こんなにも深く関わっているなんて知る由もなかったのだから、仕方がなかったとしか、言い訳の仕様もない。

今は、それすらも言える空気ではないが。

「……ごめん。本っ当に、ごめんなさい！」

頭を下げる。もともとから正座をしていたから、既に体勢は土下座そのものだ。でも今回ばかりは本気で反省しているのだ、これくらいしなくては、その意思是伝わらない。

「悪いことしたって、ちゃんと理解してるの。みんなにも、綺羅姫にもすっごく迷惑かけたって。ここで謝ったってどうしようもないけど、今はこれ以外にできることがないから、とにかく、ごめんなさい」

沈黙。静けさがこんなに胸に突き刺さるとは、思わなかった。コンクリートの地面を見つめる目が、潤んでくる。

お願いだから、何か言って。小言でも説教でも、何でもいい。殴ってくれてもいいから、とにかくこの静寂だけはどうかして欲しい。心の底から、そう思った。

「ぐうぐう、ぐうぐう」

安眠の声がする。暁に向かって、何か訴えているようだった。

「……言われなくても、分ってるさ。頭上げろよ。別にお前だけのせいじゃないんだ、責任は生徒会にもある。お前をさっさと止められなかった、俺にもな」

後頭部に手が乗せられた。談子の頭を包み込めそうな、大きくて、そして暖かい手。数回軽く頭を叩いて、それは離れていった。

顔を上げると、暁と安眠は既に立ち上がり、遠くを見ていた。

「とりあえず、秋田の指示とおり、夏と合流する。状況を把握できない今の状態じゃ、鬼とまともに戦えそうにない」

「う、うん」

談子も立ち上がった。目尻から流れようとする熱い雫を制服の袖で拭い、漬水をすする。こんなところで、折れてなんかいられない。

「ぐっ、ぐうう！」

何かを感じ取ったように、安眠が叫んだ。そして遠く、屋上の向こう側を指差している。何かとフェンスに駆け寄って、穴を覗き込む。

そこから見える景色は、学校の広い校庭。その中央部に、白っぽい塊が歩いていた。

鬼だ。鬼が、校門へ向かって歩いていく。外へ出ようとしているのか。

あんな恐ろしいものが学校から出て行ったりしたら、麓の町は大パニックになる。

もちろん、町の中には談子や父親が住んでいるアパートもあるし、友人知人も大勢住んでいる

。

止めなければ、大変な事態になる。

だが、屋上から一瞬で地上に降りるなんて芸当、無傷でできるはずもない。止めようと思っても、ここからでは手も足も出せない。

鬼の足が校門を潜ろうとする。その境界に触れたとたん、空間が発光して、眩い光線が飛び散った。光線は、稲光みたいに不規則な動きで広がり、鬼を弾き返す。鬼は驚いて奇声をあげ、砂の上に仰向けに倒れた。

「何、今の？」

「鬼捕獲用の、結界が張られたんだ。この学校を包み込むように、空間分離の術が施されている。この結界の中からは、たとえ誰であろうと外へ出ることはできない」

つまり、この結界が張ってある以上は、鬼が外に出て人を襲う心配はないわけだ。

だが、素直に安心ばかりもしてられない。

「誰であろうとって、あたしたちも、閉じ込められたの？」

「そうだ。でも、今更どうしようもない」

「……そう、だね」

もう決めたのだから、綺羅姫を助けると。外に逃げ出す気なんて毛頭ない。

談子は強く頷く。今は、みかんと合流して対策を練るのが最重要だ。唾を飲み込み、自分に喝を入れた。

「じゃあ、いこう。生徒会室！」

▲□▲□▲

とはいったものの、生徒会室の場所を知っているなら、とっくに行っているわけで。道が分からない事実には変わりはない。暁に道案内を頼んで、談子はしんがりを、ひたすら従って行っただけだった。

生徒会室は、今いる職員室や学年ごとの教室のある東棟ではなく、隣の文化系の部室や演習科目などで使う専門教室のある、西棟の端にあるらしい。四階に設置された、二つの校舎を繋ぐ渡り廊下を歩いて向かおうとしたのだが、行けども行けども渡り廊下への出入り口が見つからない。

それどころか、困惑して首を傾げてしまう。

「あれ、この階に、保健室なんてあった？」

白い、清潔そうな扉を横切った。上部に取り付けられたプラスチックのプレートには、『保健室』とはっきり書かれ、戸口に『不在』と書かれた手書きのボードが掛けられている。

しかし、ここは二年生の使用する教室の集まった階だ。こんなところに保健室があるはずがない。

振り返り、反対隣の教室を見て、更に狐に抓まれた気分になる。

「ええっ、音楽室？」

そんな馬鹿な。音楽室は、離れの選択授業教室の集まった西棟にあるはずだ。絶対に有り得ない。

こんなところに、あっていいはずがない。

「どうなってんの――？ 心なしか、廊下も長くなったような」

一つの階に、七つまで並ぶ教室。それが今、数えてみると、十以上もある。錯覚だろうか。

だが、どの教室もちゃんと開くし、中にも入れる。目に見えても本当は存在しないものが錯覚なのだから、つまり、これは現実ということだ。

しかしなぜ？ 理由も原因も分からない。

「あれー。ねえ、本当にどうなってるの？」

「ぐうー」

同じところをぐるぐる回って、混乱する。安眠も同様に回転し、身体をふらつかせていた。

教室と教室を繋ぐ空間がねじれ曲がって、違う場所とくっついたような、そんな感じだった。

完全に迷路だ。いったい、何をどうすればこうなるのか。

「様子がおかしいな。夏が、何かしやがったのか」

訝しげに、周囲の歪曲してしまった教室群を見渡し、暁は目を細める。

「鬼の仕業って、ことはないよね？」

「空間を歪める力を鬼が持っているなんて、聞いたこともない」

自然と、こんなおかしな現象が起こるはずもないし。暁は、みかんの仕業だと疑っているが、彼女にそんな芸当ができるとは、想像もできない。

しかしながら、人は見かけによらないのかもしれない。そう思い知ったのは、暁の携帯の着信が廊下に響いてからだった。

「夏からだ」

ボタンを押し、通話を始める。通話音量設定のせい、ただ単にみかんの声が大きいだけかは分からないが、側にいるだけで受話器の向こうの声ははっきり聞こえてきた。

『うーす。暁君、学校来てる？ 来てるよね』

「ああ、今迷ってるところだ。この変な教室の配列は、お前の仕業か？」

『あー、ごめーん。鬼制御用の結界を張ったついでに、鬼錯乱用の空間湾曲装置を起動させたの。そしたら初期レベル設定を間違えちゃって、校内が物凄い迷路になっちゃった。無闇に動こうとすると、迷うだけでなく、外にも出られなくなるかもです！ 気をつけてね☆』

「ね☆ じゃねえよ！ 動けねえんじゃ、どうしようもないだろうが！」

みかんの能天気な台詞に、暁は怒鳴り声を返す。どうにも話の進み具合が悪い。やっとみかんと連絡が取れたのに。焦りだけが談子を覆っていく。じれったくなって、暁から携帯をぶんどった。

「あっ、あの、みかん先輩！」

『んん？ 誰か一緒にいるのー？』

「あたし、一年の月見談子です。一昨日、綺羅姫と一緒にいた……」

『……ああー！ 分かった分かった、イナホちゃんから話聞ってるよー！ そっか、あれからイナホちゃんと連絡取れなくなっちゃったし、心配してたんだよ。でも、暁くんと一緒なら安心だね』

さっきイナホがかけていた電話だろう。だが、イナホと音信不通とは、どういうことだろう。まさか、図書室へ行く途中で鬼に襲われたとか……？

心配だが、とりあえず、自分にできることはないか、みかんに指示を仰ぐ。

「イナホ先輩に、生徒会室へ行って、みかん先輩に指示を仰ぐように言われました。これからどうすればいいのでしょうか？」

『うん。このまま電話で指示ってなると面倒だからね、できれば生徒会室まで来て欲しい。待ってね、今、通話の電波状況から、二人の居場所を特定するから。……よし、分かった。えっと、迎えを送ったから、そこでしばらく待ってて。あとは、任せておけば勝手に行き着くところまで行けるから。じゃあ、後でね。健闘を祈ります！』

即座に通話が切れた。慌てて何度か名前を呼びかけたが、返ってくるのはワンテンポな切断音だけ。暁に電話を返し、辺りを見回す。傍で会話内容を聞いていた暁は、顔を顰める。

「迎えて、誰が来るんだ？ さっき、やたらに動いたら迷うって言ってたばかりなのに」

「さあ。とりあえず、待ってようよ」

しばらくその場に立ち尽くしていると、急に談子の鼓膜が震えた。遠くから、ドドドドド、と何か振動する音が響いてくる。太鼓を叩く音みたいにも聞こえるが、少し違う。

足音だ、それも大量の。

「誰かが、こっちに来る？」

そう呟いたときには、廊下の向こう側から、何かこちらへ迫ってきていた。人影みたいだ。

しかも、一つではない。十数体の黒い影が、ぞろぞろとこちらへ向かって押し寄せてきたのだ。

。

「……あれ、何？」

指をさす。暁と安眠が振り返った頃には、はっきりと目視できるくらいに、そいつらは接近してきていた。

かなりのスピードで走ってくる。ボロボロの服を纏った、おそらく人間一。

体中の皮が溶けて、顎や腕から重そうに垂れている。「あ、あ、あ……」と潰れた咽から発せられた苦しそうな声が、先駆けてこちらへ流れてくる。それに対抗するように、談子も悲鳴を上げた。

「ギャー！ あれっ、ゾゾゾンビー!？」

見るからに、そんな感じだった。よく映画やゲームで見たりする、大量のおぞましいゾンビ。それがなぜか、こちらへ向かって猛突進してくる。身体が腐って垂れているわりには、腐臭もしないしハエもたかっているのが不自然だが、そこまで考える余裕はなかった。

「こっち来る。暁、やっつけてよ！」

「馬鹿言え、あんな大勢、相手にしてられるか！ とりあえず、逃げるぞ」

言った側から、暁と安眠は走り出す。有無を言う間もなく、談子も素早く地面を蹴った。筋肉痛なんて、言っている場合ではない。ゾンビに捕まるくらいなら、アキレス腱が切れたほうがマシだ。いや、どっちも嫌だが。

精一杯走っているのにもかかわらず、ゾンビたちはしつこく追いかけてくる。必死で逃げている途中に、幾度か進めそうな分かれ道を見つけたが、その道からもゾンビが駆けてきた。脇道に逸れられない。

かと思いきや、前方からゾンビが向かってきて、やむなく横道に逸れるしかなかったり。その進路は、自分で考えた上で走っている道順のはずなのに、ゾンビによって選ばされているかのようにも感じられた。

「何で、どうしてゾンビが学校にいるの？ 絶対おかしいし！ しかも、何であたしたちが追いかけてるの、訳わかんない！ やだー、気持ち悪いー」

全力を持って廊下を駆け抜ける談子。目が涙で滲んでよく前が見えない。前を走る暁の姿だけを頼りに、何とか転倒せずに走り抜いているが、筋肉痛の痛みも付与されて、いつまで保つか分かったもんじゃない。

衰えていく走行速度に反比例して、悲鳴ばかりが活発になっていく談子に苛立ちを覚えたのか、暁が怒鳴りつけてくる。

「叫んでる暇があったら、早く走れ！ ゾンビもキョンシーも、たいして変わらないだろうが。怖いと思うから怖いんだ、気にするな」

「全然違うし！ ゾンビとキョンシーなんて、納豆と燻製くらい差があるって！」

「食いものに例えるのはやめろ、明日から納豆食べなくなるだろうが……」

「ぐう……」

気持ち悪そうに、暁は口を押さえる。想像すると、何とも生々しい。燻製に喩えられた安眠も、少し複雑そうに、眉を顰めている。

そんないざござはお構いなしに、後ろのゾンビは付かず離れず、淡々と追いかけてくる。呻きながらも、何か言葉を発していた。

「迷わないでー」

「迷わないでー」

「なっ、何か言ってる！　ねえ、ゾンビが何か言ってるよ」

「はぁ？　何も聞こえねえよ、無駄口叩いてないで走れ！」

暁は一瞬、後ろを振り向いたが、談子を怒鳴ってすぐに前に向き直った。

「ホントだってばー！　「迷わないでー」って言ってるもん！」

全く相手にしてもらえず、談子は唇を尖らせる。気のせいかもしれないが、やはり背後から、しつこく同じ台詞が聞こえてくる。

「迷わないでー」

「迷わないでー」

「飯食ったかー」

「何か、一匹違うこと言ってる!？」

衝撃を受けながらも走り続けるうちに、だんだん声が遠ざかっていった。不思議に思って、再三後ろを振り返ると、さっきまで嫌がらせの如く追いかけてきていたゾンビたちの姿が、忽然といなくなっていた。

「す、ストップ、ゾンビいなくなった！」

談子の合図に、暁と安眠は急ブレーキをかけて静止する。同じく振り返って、ゾンビの姿がないことを確認し、息を切らせて地面に座り込む。

「ったく、何だったんだよ……」

深い息を吐いて、暁は脱力する。

「ここ、どこだろ？　余計に迷っちゃった気がする……」

散々追い回され、疲れただけならまだしも、どこをどう走ってきたのか、さっぱり覚えていない。もと来た道へは引き返せないだろう。まだゾンビがいるかもしれないし。

通り過ぎてきた、すぐ背後の教室の標識を見ても、明らかに違和感がある。すぐ目の前で並んでいる、視聴覚室と物理準備室。

こんな教室が、隣り合っているわけがない。相変わらず学校は、おかしなままだった。

「ぐう？　……ぐうぐう！」

安眠が何かに気付いて声を上げ、上を指差した。何事かと、指さす場所に目を向ける。

目の前の、教室の開き戸。その上に取り付けられた、黄ばんで風化した、今にも落ちてきそうに傾いたプレート。

そこにはぼんやりと、こう書いてある。

「……生徒会室だって」

「マジかよ……」

偶然なのか、何らかの策略によるものなのか。何にしても物凄く脱力感を覚え、談子と暁は勢いよく廊下に倒れ伏した。

直後に、生徒会室の入り口が開き、中から人の姿が。

「何か、さっき、ゾンビの足音がしたような……？　うわっ！　あんたら、何やってんの!?　そんなところで寝てたら、鬼に見つかったときにイチコロでやられちゃうっつーの！」

力尽きて倒れこんでいた談子たちは、驚いたみかんによって教室内へと運び込まれた。

十三. まず一人

イナホからの連絡があり、さらに学校全体に鬼逃走防止用の結界が自動的に張られたのは、今から三十分前。

今頃になって、夏みかんは大きな失態を犯していると気付いた。

今日は日曜、みかんの大好きな、ドラマの再放送がある。簡単な話し合いだけの予定だったから、すぐに帰れると思って油断したのが運の尽きだ。

録画して来ればよかった。こういう時は、自分の面倒臭がりな癖を呪ってしまう。

「あーあ、もう、ついてないな。瀬戸黄門見れないじゃん。今日は梅平ケンケンが出るってのにー。今朝も早く家出たから、アンデル戦隊メルヘンジャー見損ねたし。昨日録画した劇場版ホラえもん見たかったのに、ぶー」

お気に入りのテレビ番組名を羅列し、頬を膨らませて拗ねる。生粋のテレビっ子みかんにとって、週末はお好み番組の宝庫だ。時間もたっぷりあるから、一週間撮り溜めたビデオも見放題である。いくら自分から言い出したとはいえ、やっぱり休日に学校なんて来るべきではなかった。

それにしたって、予想外にも程がある。まさか自分が在学中に、鬼が復活してしまうとは。

数百年もの昔から、この学校に鬼は密かに存在し続けてきた。そして何らかの拍子に封印が解け、幾度か最悪の事態を招いてきたのだ。不安定なものだから、封印が破れてしまうのは仕方がないことだが、その平均周期を割り出してみても、鬼が復活するのは、だいたい五年から十年の感覚であると把握していた。

前回、鬼の封印が解けたのは二年前。みかんが入学する、ちょうど一年前だ。だからして、自分の代では絶対に鬼は出てこないと、断定していたのだが。

その油断が、致命的なミスとなってしまった。また反省。

生徒会室として使われている多目的教室。今は机を全て端に寄せ、高く積み上げているから、すっきりして広く感じる。代わりに中央には、みかんが運び込んだ対鬼用の仕掛けを作動するための装置が、いくつか置かれている。どうせ自分以外には使いこなせないのだからとフルオート制御にしてしまったため、作動はできるが初期入力以降の操作ができないのが欠点だ。

外で倒れこんでいた二人の一年生を中に運び込み、扉を閉めた。一番地理的に複雑で、到達が困難な位置にこの教室が来るように学内を改装したのだから、そう簡単に、鬼はここまでやってこれないはずだ。

今、校舎内の教室の配列は当初の予想以上にめちゃくちゃなはずだ。それは、みかんが発明した空間移転装置によって変形されているからだ。

みかんは、自作の発明品を用いて、鬼にとって不利な状況を作り出せる、云わば補佐役として、入学と同時に生徒会にスカウトされた。いちおう、期待はされていたようなので、何もしないわけにはいかないだろうと、冗談半分でコツコツ作ってきた装置だが、役に立ったのは中々に嬉しい。この装置の影響で、鬼も簡単には動けなくなったはずだ。

ただ、欠点もあった。鬼も迷うが、生徒も迷ってしまう。そんな時のために、目的地誘導型の

ゾンビロボットもセットで作った。なぜゾンビかといえば、ただ単にスプラッタ好きな、みかんの趣味だが、どうせ走るならスリルがあったほうが良いという勝手な持論に基づく発明品と相成った。それを使って、三人をここまで連れて来たわけだ。

「ううう、筋肉痛だったのに、また走らされて。もう最悪……」

一年生のうち、一人が起き上がった。彼女とは一度お目にかかったことがあるし、さっきも電話越しに会話をした。

名前は、月見談子。経緯は分らないが、綺羅姫に目を付けられ、一昨日辺りはずっと綺羅姫をおんぶして校内を走りまわっていたようである。あれでダメージが筋肉痛だけに留まっているのだから、見かけによらず底知れぬ体力を秘めた新入生だ。

そしてイナホが言うに、彼女が鬼の封印を解いた、重要参考人――。聞くところによれば、あの『物語りの智慧』の持ち主だというではないか。

こういった、鬼の封印を脅かす存在、もとい、鬼対策に活用できそうな力を持った人間を素早く見定め、生徒会に引き入れて行動を制限する。それが副会長としての役目の一つだったのだが、今回ばかりは完全な監視漏れだ。もっと早くからこの少女の異質さに気づき、目を光らせておけば、こんな事態は免れたかもしれないのに。再三反省。

と、後悔しても、今更遅い。過ぎた失態を逐一考え直したって、いい案は浮かんでこないし、何より面倒臭い。今は鬼を封印する方法を考えるのが最重要だ。それこそ、いかなる手を使ってでも。

「談子ちゃん、だったよね？ 鬼の封印を解いた」

「えっ、いや、その……すいません」

談子は表情を痛く歪め、素早く項垂れた。ちょっと嫌がらせを含んで話しかけてみたのだが、思ったより素直な反応に、みかんは満足する。自分のしでかした罪をしっかりと把握して、落ち度を認めているし、自らの失態が、どれほど甚大な事態を引き起こしているかも理解している。

見た目よりも賢そうな娘だ。第一印象は、悪くなかった。

「ごめん、ごめーん。別に、説教しようってワケじゃないから、そんなにかしこまらないでよ。イナホちゃんから詳しい話、聞いてるんだよね？」

「あ、はい。なんとなくは……。でも、途中で鬼に邪魔されて、全部を聞くことはできませんでした」

自信がなさそうな返事。不安に溢れた瞳が、しっかりとそれを語っている。

ならば、続きはみかんが説明しなければならぬ。みかんはゆっくりと、必要な説明を順を追って始めた。

「昔から、この土地には鬼がいてね。綺羅姫の身体に封印して、ずっと監視してたんだって」

「それは、イナホ先輩から聞きました」

「うん。そして、万が一その封印が解けた時に、被害を最小限に留めるために、学校全体を覆う結界が作られたの。これは鬼の封印が破られると同時に自動的に発動して、内部にいる全ての生命を外界から遮断するためのものなんだ。これを使うことで、鬼は学校の外に出られなくなるの。同時に、結界の中にいる人も、出られないんだけどね。だから、結界の中に閉じ込められた

人は、鬼に襲われる格好の標的になってしまう」

「鬼に、人を襲わせないようにするって選択肢はなかったんですか？」

「残念だけど、鬼は強いから。倒せるんなら、最初からそうしてただろうし」

この結界だけは、はるか昔からこの地に伝えられてきたもので、みかんの発明品ではない。ちょっといじって構造を研究してみたが、さっぱり分からなかった。

それだけあって、実に良くできた装置だ。しかし、それだけの技術を持ってしても、鬼を倒す術は創り出せなかった。これが精一杯の、苦肉の策だったわけだ。

そして今も、先人たちの作り上げた技術以上の改善案は見つかっていない。進歩のなさが、情けない限りだ。

「でも、その代わりに、生徒会があるんだよ。結界の中に閉じ込めた鬼を、再び封印できそうな力を持つ人材を集めた組織、それが生徒会なの」

昔からのジングスで、鬼のいる場所には、自然と鬼を相手に闘える力を秘めた人間が集まってくるという。それが証明されたかどうかは明らかではないが、現に今、この学校には、ある程度の人材は集まっている。

それらを結集させて作ったこの学校の生徒会ならば、団結して戦えば鬼を退治、もしくは迅速に再封印できるかもしれない。

しかし、まとまりがないのが欠点だ。みんな好き勝手な行動を取る連中ばかりだから、全員が集まる時なんて、年に数回あればいいほうだ。

「いちおう、他の役員たちにもメール送っといたんだけど、みんな来てくれるとは限らないしねー。ホントに自己中な奴らばかりだから」

「でも、呼び出してもみんな、校内に入って来れないんじゃないですか？ 結界のせいで」

「ああ、それは大丈夫。内側からは出られないけれど、外側からなら、いくらでも入れるから」

「うなぎを取る罠みたいなもんですか」

「そうそう、そんな感じ。うまく使えば、全滅防止に使えるんだけど、今日は日曜だから無理そうだねー」

平日の、それも午前であれば、いくらでも生徒が登校してくるから、全滅の恐れを招く確率が格段に低くなる。その分犠牲者や目撃者が増すとデメリットがあるが。

「そうだ、イナホ先輩に聞きそびれたことが。日没になって、鬼が再封印される時まで生き残れば大丈夫だって言われたんですけど、どういう意味ですか？ 一度魂を抜き取られたら、その人たちは死んじゃうのに、平気なわけがないじゃないですか」

「それはねえ、これを読むと少し分かるかな」

みかんは、教卓の引き出しに突っ込んであった用紙を一枚取り出し、談子に手渡した。受け取った談子は、無言でそれに目を通してている。

今までに鬼と対峙してきたOBたちの残した情報を編集して作り上げた、「仁明高校鬼ごっこマニュアル 初心者篇」だ。主に今までに確認できた鬼の出現方法や、再封印方法を簡単にまとめてある。特に重要なのが、真ん中辺りに書いている事象だ。

・一人以上の人間の魂が抜かれてしまった状態で鬼の封印が完了すると、ペナルティとして、そのうち誰か一人の魂がランダムで選ばれ、鬼の封印の中に道連れにされます [重要!]。

これが何を意味するのか。やや説明不足かと思ったが、必要以上に細かく書くと余計ややこしくなると思ったので、そのままだ。案の定、談子もそれを読んで首を傾げていた。みかんは教壇に立ち、黒板にチョークを突き立てた。絵がうまいわけではないので、簡略的な図形を描いて、できる限り分かりやすく説明を試みる。

黒板の左端に小学生の落書きのような鬼の絵と、それに魂を食われた人間の絵を描く。

「つまりね、鬼と目が合ったり、身体に触れられると、普通の人間は魂を抜き取られてしまうわけよ。それは、魂を食べられるという行為に繋がるのだけれど、その間に何段階かのステップがあるみたいなのね」

右隣に縦長の長方形を描く。それを横線で三つに区切り、それぞれに名前をつけた。

一番上が現世、真ん中が冥土、そして一番下が地獄。

「鬼は、地獄に封印されてるの。そこから現世に出てきて、人間を襲う。でもその場で魂を食べるんじゃなくて、そのまま吸い取って、いったん冥土に保管するの。保管された魂は、鬼が全ての魂を取り付くし、満足して再封印されて地獄へ戻る際に、全部道連れにして持って行かれる仕組みなのね。でも鬼が満足しないうち、つまりまだ現世に魂が残っている状態で日没が来て再封印されると、魂の捕獲状態が不完全になり、ほとんどの魂は自動的に解放されて、自分の身体に戻れるみたいなの。つまり、結界内に一人でも人間が生き残っていれば、タイムオーバーと同時に、一度死んだ人間も生き返れるということ。特殊な事例なんだけれど、昔から、この法則を利用した封印方法がメインになっているみたい」

「へえ、何か複雑だけど、とにかく全滅さえしなければ、みんな助かるってことですね」

話に納得がいったようで、談子は胸を撫で下ろして息を吐いていた。しかし、それで安心するのはちょっと甘い。みかんはでも、と話を続けた。

「それにも、ペナルティってのがあってね。タイムオーバーで再封印される鬼にも、意地ってもんがあるわけよ。最終的に、自分が捕まえた魂のうち、誰か一人のものを、地獄に道連れにしてしまうの。それは鬼の気まぐれ、つまりランダムに決まるから、誰が連れて行かれるかは分らないけれど、それ相応の犠牲は伴ってしまうというわけよ」

談子の表情が、みるみるうちに歪む。当然と言えば当然の反応だが、感情の変化が激しい娘だなと思った。それだけ、素直だということなのだろうけれど。

「じゃあ、もし一人でも、魂を取られてしまえば……」

「制限時間、つまり日没までに何らかの方法で鬼を封印してしまわない限りは、必ず誰か一人は死んでしまう、ってこと。でもね、タイムオーバー以外の封印方法は、実は未だに発見されていないの。全滅じゃないって前向きに考えるのが、今のところは精一杯かな。もちろん、一人も犠牲者を出さずに日没まで持ちこたえられれば一番ベストなんだけれど……」

それは無理に決まっている。恐らく学校には自分たち以外にも、一般の生徒や教師たちが少なからず閉じ込められているだろう。いちおう、職員室に密室を作り、そこにいる限りは鬼に見つ

かることのないように配慮した空間歪曲を行ったが、運よく全員が職員室にいるなんてことはあり得ないし、もうすでに、誰かがやられてしまっている可能性のほうが大きい。

談子も、その辺りは少なからず理解したらしく、俯いて何やら考え込んでいた。でも、いくら物語りの智慧を持っていたとしても、これだけの情報から新しい封印方法を導き出すのは不可能だろう。

やっぱり、逃げ延びるのが最善の方法だ。たとえ、誰かが犠牲になったとしても。

「そのこと、綺羅姫は知ってるんですか？」

「え？」

突然の言葉に、呆気にとられて思わず聞き返す。談子の視線が突き刺さる。とても真っ直ぐで鋭い視線だ。一瞬怯んでしまったほどに。

「鬼の封印が解ける度に、誰かが犠牲になっている事実を、綺羅姫は理解していますか？」

「さあ、直に聞いたことはないけれど、やっぱり知ってるだろうね。意識が戻ってみれば、誰かの姿が消えている。って感じなんだろうし」

それを聞いた談子の表情が曇る。さも悲しそうに眉を顰め、必至で訴えかけてきた。

「きっと綺羅姫は、今まで死んで逝った人たちに気付く度に、自分のせいだって思って、すごく責任を感じて傷ついてきたと思います。今日だって、もし誰かが犠牲になってしまえば、また苦しむことになるでしょう？ あたしはこれ以上、綺羅姫が悲しむところを見たくありません。だから、絶対に鬼を止めてみせます」

強い眼光。その口から出た言葉に偽りがなく、本気なのだと一目瞭然だった。だが、言うのは簡単なのだ。それができれば、きっと誰かが既にやっているだろうだろうし。

その旨を伝えようと口を開きかけると、もう一人の一年生が立ち上がった。生徒会所属のケンカ番長、キョンシー使いの春眠暁だ。側には彼の使役するキョンシー、安眠も起立している。

「あのガキの気持ちがどうこう、なんてのはどうでもいいが、さっさと鬼を封印してしまいたいという意見には、同感だ。日没を待つなんて、ちまちました行動をしていられないし、俺たちは鬼と戦うために、この学校に来たんだ、廻り合わせたからには、それなりに成果を挙げないとな」

暁は短気だ。ここ数週間、行動を観察していただけても、よく分かる。確かに、彼に持久戦なんて不可能だろう。かといって、短時間でけりをつけられるほど強いかといえ、少し説得力に欠ける。

イナホや蛇羅から聞いた、過去の鬼退治の現状から推測しても、暁と安眠だけでは、鬼の注意を引くことすら困難かもしれない。

でも、ひょっとしたら、ということもある。みかんは二年前に実践された方法を教えてみようと思いついた。

「蛇羅さんに聞いたんだけど、二年前に鬼が復活した時、鬼を一時戦闘不能にすることに成功したらしいのね。その時のキョンシー使い、つまり暁くんのお兄さん――覚先輩のことだけど。彼が囷になって鬼の気を引いている隙に、蛇羅さんが持ってる瞬間冬眠能力で鬼を眠らせて、行動不能にしたんだって」

蛇羅の掌には、特殊な力が込められていて、彼の左手に触れると、急速に体温を奪い取られ、動物が冬眠するのと同じ状態に陥らされる。そうすると体温が戻るか、反対の力を持つ右手で触れるまで、決して目覚めない。

いざ、説明してみたものの、談子は何が何やらといった感じで、頭に疑問符を大量に浮かべているし、暁は兄を嫌っているらしく、彼の名前が出ただけで、不機嫌な顔をしてこちらを睨みつけてくる。真面目に話を聞く気があるのか、こいつらは。

言うんじゃないかな、と少し後悔するものの、言ってしまったからには最後まで話を進めるべきだろうと、再び口を開いた。

「連絡はしたから、すぐ蛇羅さんが来てくれるはずだよ。どう、二人で同じように鬼を眠らせてみる？ 成功する確率は正直高くはないけど、ただ追われて逃げ回ってるよりも、鬼の動きを抑えといたほうが、鬼を封印するいい案も、落ち着いて考えられそうじゃないかな？」

「確かに。だが二年前は結局失敗したんだろ？ そう聞いたことがある」

痛いところを突いてくる。

確かに、その時は失敗した。鬼を眠らせて安堵し、気を抜いた蛇羅が鬼の側で躓いて、右手で触れてしまったのが敗因だったようだ。

だが、そのミスさえなくせば、今度は半永久的に眠らせておくことも可能だろう。眠らせてすぐに蛇羅を鬼から隔離すればいいわけだし。まだ犠牲者が出ていなければ、それでハッピーエンドだし、そうでなくても、何かいい知恵を絞れる時間の余裕はできる。

「ぐうぐう、ぐうぐう！」

安眠がこちらへ向けて、何やら訴えていた。しかし言語の疎通がままならず、結局何を言っているのかさっぱり分からない。

「暁、アンちゃんが何か言ってるよ」

「とりあえず、何でもやってみることに意義があるのではないかとっている」

「キョンシーのほうが、よく分かってるじゃないの。まあ、まだ日没まではかなり時間があるし、この入り組んだ校舎じゃ、鬼もそう簡単に、ここまではやってこれないだろうから、じっくりと作戦を練ろう」

提案して間もなかった。生徒会室の扉が勢い良く開け放たれたのは。

中にいた全員が顔を上げ、瞳孔を見開く。

もう鬼がここまで？ いくらなんでも早すぎる、しかし相手は鬼だ、何が起こってもおかしくない。全員が身体を強張らせて構える中、外からやって来たのは、うだつの上がらなそうな、一人の男子生徒であった。

「やあ、遅くなって申し訳ない。ちょっと病院へ行っていてね。……どうかしたかい？」

しまりのない笑顔を浮かべ、中へ入って扉を閉める生徒会会計、助冬蛇羅。その姿を見た全員が、安堵の息をつき、身体のを抜いた。

「脅かさないでよー、蛇羅さん。鬼かと思ったじゃん」

「いやあ、すまないすまない。君からの連絡を受けて、これでも慌てて駆けつけてきたんだよ。道にも迷ったけれどね」

爽やかに笑ってみせる。間が悪く、肝心な時にはさっぱり役に立たないことで評判の蛇羅だが、こう見えても生徒会役員。いざって時には活躍してくれるはずだ。

「ちょうどいいや、蛇羅さん。さっきから話してたんだけど、二年前に鬼を眠らせたって方法、今から再現してくれないかな？ 幸い、鬼の注意を引けるキョンシー使いもいる訳だし、今度こそは絶対いけると思うんだけど」

みかんが提案を伝える。蛇羅は思い出したように、ああ、と頷いていたが、いざとなると眉を顰めた。

「だが、あれは本当に命懸けだよ。鬼だって学習しているだろうし、いくらキョンシー使いが特異体質とは言え、同じ手が通用するかどうか……」

「俺と兄貴を一緒にするな。あいつがどうやって鬼の注意を引いたかは知らないが、俺はそれ以上に完璧にやってのける。それだけの自信は、あるつもりだ」

暁が言い切った。兄と比べられるのが嫌いなのは分かるが、それは少し自分を奢りすぎではないかとも思う。談子も、側でそのような考えをした表情を浮かべていた。

「覚くんは両手を広げて、「僕の胸へ飛び込んでおいでセニョール」とか言いながら、鬼に向かって突っ込んで行ったよ。あれには流石の鬼も物凄く引いてたね。君にそんな芸当ができるかい？」

「……あのバカ男が」

暁は怒りと羞恥に顔を赤くして、こめかみを痙攣させた。みかんと談子はその様子を想像して笑いをこらえている。覚の顔や性格をそれなりに知っているみかんは、なおのこと、想像に磨きがかかって、苦しさが半端ない。

確かに、稀代の変人と名高かった春眠覚ならば、それくらいは決行しそうだ。そして、その信じられない行動をやってのけるからこそ、大物であるといえる。

「ほっ、他にも方法はある。力づくでも鬼を押さえ込むから！」

「しかし、覚くんはキョンシー二体を駆使して、やっと鬼の動きを制することができたんだよ。見たところ、今ここにキョンシーは一体しかいないようだし、君では明らかに力不足ではないかい？ 悪いことは言わない、死に急ぐ真似はよすんだ」

蛇羅の説得に応じたわけでないだろうが、力不足という点では思い当たる点がいくつもあったのだろう。暁は拳を握り締めて、悔しげに顔を歪める。側では、安眠が落ち込んで俯いていた。

「そうそう、それからだね――」

タイミングを見計らい、蛇羅は自分の両手を顔の前に上げて見せた。それを見た、全員の表情が啞然となる。

蛇羅の手は、白いギプスによってグルグル巻きにされ、親指以外は大福の中のおんこみたいに、しっかり包まれてしまっていた。

「実はここへ来る途中で、こんな状態になってしまってね。たとえ暁くんの準備が万全でも、その作戦は不可能なんだよ」

それを理解した途端、みかんは冷めた表情で蛇羅を睨みつける。暁も同じように表情を歪めていた。

あれだけ期待させておいて、このオチは何だ。蛇羅がいれば何とかかなと思ったのに、当の本人は、この有様。ふざけるのも大概にして欲しい。

「で、何で先輩は、怪我したんですか？」

特に怒りはないらしく、談子が普通に尋ねた。まあ、こちらで勝手に話を盛り上げすぎたのも落胆の大きさの原因だ。事情くらいは聞いてもいいと思った。内容によっては、水に流してもいいだろうし。みかんも彼の言い訳に耳を傾けた。

「じつはね、学校へ来る途中で、子供がトラックに撥ねられそうになっていたんだよ。僕が何とか飛び込んで、子供を突き飛ばして助けたんだ」

「へえ、すごいじゃん、先輩かっくいー！」

「ぐうー！」

談子と安眠は、尊敬の眼差しで蛇羅を見つめる。蛇羅は照れていたが、その話には続きがあった。

「でね、子供を助けたのはいいものの、今度は僕が轢かれそうになってね。慌ててバック転をして逃げたんだ。そうしたら、なかなか勢いがついてしまってね、調子に乗って五回転をしたら最後にポキッと。両手首をやられてしまってね、この有様さ」

「そのまま、轢かれとけばよかったのに」

「本当に、うだつが上がらないやつだな」

みかんは舌打ちする。暁も頷いた。

「先輩、かっこわるー」

「ぐうー」

「そ、そんなに責めなくても、いいじゃないか」

前言撤回だ。そんな、どうでもいい出来事で学校を危機に晒す奴なんて、生徒会役員失格だ。しかも、わざわざ手負いで学校に来られても、足手まといなだけだし。

「だったら別に来なくてもよかったのに」

「そう言わないでくれよ。僕にも何かできないかと思って、こうやって道に迷いながらやってきたわけなんだから」

「何もできないでしょ。左手の使えない蛇羅さんなんて、あんこの入ってないアンパン並みに不必要じゃん、特撮ヒーローの仮面の中身くらい、期待を裏切る存在でしょうが」

言うだけ言われても、返す言葉が見つからなかったらしく、蛇羅は押し黙る。普段は戦国大名のように凛々しく、頼りがいがないこともないが、こういう大事なときになると、落ち武者並みに、どうしようもなく役立たずになる。うだつが上がらないなんてのは、本当に彼のために作られたような言葉だ。

「頼みの綱は断ち切られたか……。ならやっぱり、物語りの智慧、ってのに賭けてみるしかないかなー」

そう呟くと、談子が思いっきり、驚愕的な反応を示した。自分の持つ能力の話が出て、いささか動揺したらしい。

「イナホちゃんからも聞いてない？ 昔、綺羅姫の身体に鬼を封印したのは、物語りの智慧を持

った人間だったって。ひょっとしたら、その人が、この学内のどこかに、封印方法とかを残している可能性もあるわけよ。今までは全然、それらしいものは見つからなかったけれど、談子ちゃんになら見つけれられるかもしれない。あるいは、何かのきっかけで、全く新しい封印方法を得られるってことも考えられるし」

「あ、あたしが……？」

「そう、それが見つければ、綺羅姫だって、みんなだって助かるんだよ？ 責任押し付けちゃう形になるけれど、あたしたちも協力するから、探してみようよ」

必死で推してみる。しばらく俯いていた談子だったが、決心が固まったらしい。強気に頷いてくれた。みかんも、その返答に満足気に大きく頷いて見せた。そうこなくては。

なら今度は、その方法を見つけるまでの鬼対策を、一から練り直さなくてはならない。まあ、どうせ鬼は中々ここまで来れないだろうし、考える時間は、まだ残っているだろうから、あまり焦る必要はないが。

そう思ったのだが、詰めが甘かったようだ。

ドクン。

みかんの心臓が高鳴り、身体が大きく痙攣した。瞳孔が開いていくのが分かる。金縛りにあったように、手も足も、何もかもが言うことをきいてくれない。

「……みかん先輩？」

そんなみかんの態度に気づき、談子は首を傾げる。

みんなに、伝えなくちゃ。

震える口を何とか開き、彼女たちに呼びかけた。

「みんな、今すぐ教室から出て。あたしの後ろの扉から」

「何で急に……？」

「いいから、何も言わずに教室から出て」

そして、みかんは歩き出す。蛇羅が入ってきた側の扉へ向かって。

ガラスの向こう側で、鬼が辺りを見回している。

予定よりも来るのが早すぎる。ひょっとすると蛇羅の後をつけてきたのかもしれない。

想像以上に賢い生き物のようだ、鬼というのは。

まだ向こうは、こちらの存在に気付いていない。逃げるなら今だ。みかんは扉に張り付いて、内側から鬼の姿が見えないように、ガラスを体で塞いだ。

「蛇羅さん、二人のこと、頼んだよ」

蛇羅は気付いたらしい。その発言の意図するところを。

慌てて、向こう側のドアに向かって歩き出した。

「みんな、早くこっちへ」

誘導する声が聞こえる。何が何だか分からずとも、談子と暁、安眠は黙って従っている。蛇羅が頷いたのが見えた。それを合図に、みかんは扉を勢い良く開く。ガラスが割れそうなくらいに激しい開扉音。廊下に響き渡るその音に、側にいた鬼が気付かないはずがない。

「ほらほら、こっちよ、あたしの魂が欲しかったら、捕まえてみな！」

みかんは教室の中に後退りする。鬼は咆哮をあげながら、うまくついてきた。そこで初めて鬼の存在に気付いたらしく、入れ違いに外へ出ようとした談子と暁、安眠が立ち止まり、振り返るのが見えた。

「みかん先輩！」

「大丈夫、振り返らないで。早く逃げて！」

「大丈夫なわけあるかよ、お前も逃げろ！」

後輩たちの声。普段は何も感じないまでも、今となってはとても心強い。

鬼が教室へ入ると同時に、蛇羅に誘導されて、みかん以外の全員が外に出た。駆ける足音が遠くなっていく。それを確認し、みかんは少しでも鬼を食い止めようと、視線を合わせないように俯きがちに構えた。しかし、何の準備もなしだ、みかんに対抗する術など、ないに等しい。

「あーあ、あたしも死ぬのか。運がよければ生き返れるんだけどな。どうだろう」

全て、あの子たちにかかっている。今はその希望を、切に願って託すしかできないのだ。いま自分にできることは、鬼の足止めだけ。ならばそれを精一杯するしかないじゃないか。

うっすらと、視界が滲むのを感じた。

何泣いてんるんだよ、次に涙を流すのは、メルヘンジャーの最終回って決めてたのに。

「死にたくないなー！ あーもう、最悪！」

開き直り、みかんは鬼に向かって飛び掛った。その顔を、鬼の大きな手が、しっかりと覆う。顔が、死の仮面に包まれた。

重い。身体の力が抜ける、意識がだんだん薄れていく。

これが、死ぬということなのだろうか。

なんだろう、この感覚。

それどころか、何も感じやしない。

十四. さらに二人目

足を止め、振り返ってみると、どこだか分からない廊下の真っ只中にいた。弾む息を整えていると、後ろから暁と安眠、そして蛇羅が走ってくる。

「みんな、無事だったんだ。……みかん先輩は？」

「……残念だけれど、彼女は僕たちを逃がすために、一人残った」

追いついてきた蛇羅がそう告げる。談子のこめかみを、汗が伝った。談子たちを庇う、みかんの後ろ姿が、鮮明に脳裏へ蘇ってくる。

「や、やられちゃったって、ことですか？」

誰だって、こんなことに答えたくなんてないだろう。でも、尋ねずにはいられなかった。

「……おそらく、魂を抜き取られてしまっただろう。しかし、あの不意打ちから逃れるには、誰かの犠牲が不可欠だった。月見くん、君が気に病むことはない」

確かに、あの突然の鬼の襲撃から全員が逃げようとすれば、確実に捕まって全滅していたかもしれない。だからといって、みかんがやられて良かったということにはならない。自分のせいではないと言われても、談子の表情は、みるみる曇っていく。それを宥めようと、蛇羅は優しい言葉をかけてくるが、彼自身もショックが大きいはずだ。

「つーか、お前が囷になればよかったんじゃないか。正直、生き残っても役に立たんだろう」

「うう、酷い言われようだな。確かにその通りだが」

痛いところを的確に突いてくる暁に、蛇羅はたじろぐ。

「だが、僕がこうしてここにいる以上は、できる限りのことをやらせてもらうつもりだよ。この両手が使えなくてもね」

そう言ってギプスに包まれた手を構えて意気込む。蛇羅だって蛇羅なりに事態を良くして行こうと努力しているのだ。その意気込みは伝わったのか、暁は小さく鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

「足手まといになるようなことしたら、すりおろして蒲鉾にするからな」

「ははは、肝に銘じておくよ」

そうだ、いつまでも落ち込んでいたって意味がない。今は自分ができることから始めていかないと。談子も落ち着きを取り戻し、顔を上げた。

「みかん先輩の犠牲を、無駄にしちゃいけないもの、あたしたちが何とかしなきゃ」

頷いて、蛇羅は腕時計を見た。そして頭の中で何かを計算し始める。

「現在の時刻は、午後一時十四分。この季節だと、日没は長く見積もっても、六時から七時の間くらいだ。残り約五時間、逃げ延びながら鬼を封印する方法を見つけなくてはいけないな」

「そうですね。もし、今の状態で日没を迎えても、みかん先輩は……」

仮に今の段階で鬼にやられた人間が、みかんだけだとすれば、そのまま日没を迎えた時点で、みかんは死んでしまうことになる。蛇羅もそのことは理解しているようだが、前向きに考えを変えるようにと首を振ってきた。

物語りの智慧を持つとはいえ、鬼を封印する方法なんて、本当に見つけれられるのだろうか。談

子をプレッシャーが襲う。みんなの命を背負っているのだ、責任はとても大きい。

「あまり、自分を追い詰めてはいけないよ。何にしても、逃げ切ることが大前提だ。万が一、全滅してしまえば、全員の魂が持っていかれてしまうのだからね。そうなれば、ここで犠牲になってくれた夏くんに、示しが見つからない」

「何か、心当たりはないのか？ 鬼に関すること、色々調べまわってたんだろ？」

「急に、そんなこと言われても……」

頭の整理がつかない。そんなつもりで鬼の封印を探していた訳じゃなし、もし見つけていたとしても、今の談子には、それを的確に思い出せるほどの冷静さがなかった。

「ごめん、分からない」

「まあ、世の中には、思い通りにならないことのほうが多いからね。なんせ目が合っただけで魂を抜き取られてしまうんだ、全員が逃げ延びるなんて至難の業なんだよ」

蛇羅は諦め気味だが、そんな考えのままでは何も始められないことも、談子は分かっているのだ。対極の感情に板挟みにされ、でもどうにもできずに苛立ちが募るのを、何とか押さえつける。俯く談子の頭を起き上がらせるように、暁の強めの声が渴を入れた。

「ようは、鬼を倒せば済むんだ。二年前に決行した方法が使えなくなつて、他にも退治する方法なんて、いくらでもある。俺と安眠で鬼の体力を削っていくから、お前らはとにかく逃げろ。それで運よく日没までに封印できれば、儲けもんだろ？」

キョンシー使いは、結界内に魂を持たないので、鬼と目を合わせようが触れられようが、決して死ぬことはないらしい。

みかんに見せてもらった、鬼ごっこマニュアルの下のほうに、そう書いてあったのを思い出す。

みかんから聞いた話によると、キョンシー使いの一族は、魂を身体から分離させた状態を維持できる特異体質なのだという。暁の魂は、現在自分の家に保管してあり、そこから遠隔操作しているそうだ。だから、どれだけ鬼と真っ向から戦っても、その魂を持っていかれることはない。キョンシーの安眠だって、既に肉体が死んでいるため完全な魂を有しておらず、それを鬼が食らうことはできないという。

鬼と戦う際には、とても力強い戦力だ。ただし、暁たち以外の全ての人間が鬼にやられてしまえば、全滅したことと、変わりなくなってしまうらしいが。

つまり結界内では、暁と安眠は魂を持った人間として、鬼にカウントされないわけだ。暁たちが鬼の注意を引き、かつ退治できれば、それが一番いいのかもしれないが、暁の物言いは、どこか投げやりで、苛立ちを感じさせた。

何かを焦っている風な態度と、とにかく何でも一人で解決してしまおうとする姿勢が、談子は気に入らない。

「何言ってるのよ、さっきだって、逃げるのに精一杯って感じだったじゃない。無理して大怪我でも負ったら、鬼とか関係なく本当に死んじゃうかもしれないんだよ？ そんなことになったら身も蓋もないでしょうが」

気付けば、文句を言い返していた。でも事実だ。いくら魂が食われないとはいえ、ちゃんと生

きているのだから。鬼と戦って負傷すれば、ただでは済まない。

「さっきは、不意を突かれて万全の体勢で挑めなかつただけだ。こちらから先制攻撃を仕掛ければ、きっと倒せる」

「どこからそんな自信が出てくるの？ あんたのお兄さんだって倒せなかつたんでしょ？ キョンシーだって、すぐに腕がもげるくらい脆いんだもの、あの鬼には敵わないよ」

「あんな奴と、一緒にするな！ お前がキョンシー使いの何を知ってるって言うんだ」

「まあまあ。双方、落ち着いたまえ」

まだまだ続きそうな口論を抑えるように、蛇羅のギプスが割り込んで制裁に入る。

「鬼退治に関して、どうすることが一番いいのか、なんて誰にも分からない。ここで揉めていても、答なんて出ないよ」

ただ現状を淡々と述べるだけの蛇羅に苛立ちを覚えたのか、暁の怒りの矛先が移る。

「お前、二年前も鬼にやられたんだろ？ 悔しくないのか、今度こそ倒してやる、みたいな、決意とか意気込みってもんはないのか？」

「リベンジ精神ってやつかい。そうだな。そう言ったことを考えられるほど、僕は強くはないよ。一度、魂を抜き取られて分かったよ。僕は攻めるよりも、守りに入るほうが向いている人間だとね。鬼に仕返しをしたいとは思わないし、また死にたいとも思わないよ」

「死ぬって、どんな感じなんですか？」

談子の問いに、蛇羅は「何も」と応えた。それは何の感想もない、という意味ではなく、本当に何も感じなかったのだという。

「何もないんだ。魂を抜かれた瞬間、何だか自分が宙を漂っているような感覚になるんだけど、身体がないから空気に触れられない。それが気持ちいいものなのか、気持ち悪いものなのかも分からないし、上も下も右も左も分からない。温度も重力も、全ての感触がないんだ、それだけが理解できる。何が何だか分からなくなって、だんだん存在が消えていく、そんな気がしたのだけは、覚えている」

遠い目をして、蛇羅は廊下の向こうを見据える。心なしか、腕が震えている気がした。

「本当に怖かったのは、魂が自分の身体に戻ってきた時だ。空気、音、質量、ありとあらゆるものが、どっと押し寄せて、僕を覆い潰してしまおうとするんだ。今まで当り前だった感覚が、とても恐ろしく思えた。息をすることが、あれほど苦しいとは、想像もしなかった。あの感覚だけは、嫌でも忘れられないな。体験していない君たちが想像するのは、難しいだろうけどね」

確かに、思い浮かべても具体的なイメージは浮かんでこない。でも、それを直に体験した蛇羅は、とても恐ろしい思いをしたのだろう。みかんも今頃、そんな感覚に襲われているに違いない。それを考えると、少し怖くなった。

それが、「死ぬ」とうことなのか。

「過程はどうあれ、あんな思いは、誰にもして欲しくないね。もちろん春眠君、君にも」

真剣な蛇羅の表情。暁も押し黙った。鬼は倒したいが、死にたくはない。その気持ちだけが、唯一共通する本音であるのだから、その意志を邪険に扱うことはできないはずだ。

空気が落ち着いたのを見計らい、蛇羅は自分の提案を切り出した。

「とにかく、今、学校にどれだけの人間が閉じ込められているのか、そしてやられてしまった人間が夏くん以外にも存在するか、全体図を把握してみるのが一番効率がいいんじゃないかな。もし生き残って隠れている人がいるなら、合流する方法を考えてみるのもいい。その辺りから手を打っていったらどうだい？ まだ時間はあるんだ、できることから行動に移しながら作戦を練っていても、遅くはないと思うんだが」

「でも、校内に何人の人間がいて、どれだけの奴がやられているかなんて、いちいち確認してたら日が暮れるぞ」

ただでさえ、校内はみかんの発明のせいで、ややこしい状態になっている。構造を把握するだけで、一日が終わってしまう。

文句を垂れる暁に、蛇羅は心配ないと腕を振って見せた。本当は指を振りたかったのだろうが、そのギプスでは無理な話だ。

「僕に抜かりはないよ。安眠くん、僕のポケットから、ホイッスルを出しておくれ」

「ぐう？」

一番側にいた安眠に指示する。言われたとおり、安眠は蛇羅の制服のポケットから、銀色のホイッスルを取り出した。

「よし、それを思いっきり吹いてくれ。僕は手が使えないのでね」

「ぐう！」

頷き、安眠は大きく息を吸い込んだ。そのままホイッスルを咥え、一気に息を吹き込む。

ピピイイイイイイイイイ!!

「うわっ、耳が潰れる！」

「安眠、もっと、そっと吹け！」

あまりにけたたましい音に、談子と暁は聴覚の危険を覚えて、耳を塞ぐ。蛇羅も慌てて耳を塞ごうとしていたが、ギプスが邪魔してほとんど音は遮断できず、失神寸前で何とか意識を保っていた。安眠の一番側にいたのだから、ダメージが一番大きいはずだ。

「ぐぐう？」

吹いた本人は、さほど気にはかけていない。キョンシーはほとんどの感覚器が機能していないので、痛覚が働かないのだ。

「ごっ、ご苦労様……。ホイッスルを、僕の、ポケットに、また、しまっとして、くれたまえ……」

今にも倒れそうな青い顔をして、蛇羅が言う。指示通りに、安眠はポケットにホイッスルを収めた。安眠は、蛇羅とは反対に、思いっきり笛が吹けて満悦した表情をしている。

「……で？ 今の行動に、何の意味が？」

暁が訊ねると同時に、天井の板が外れ、上から人が落ちてきた。音もなく床に着地し、片足の膝を床につけ、もう反対側の膝を立てた体勢で、しゃがみこんでいる。その首は、まっすぐ蛇羅を向いていた。

「お呼びでござりまするか、^{との}殿！」

目を輝かせ、声を張り上げる、謎の男。着ている制服から、本校の生徒だろうと予想はつくも

の、その登場方法は普通とは言いがたい。というより、非常識だ。談子たちの不審な視線をもともせず、慣れた様子で、蛇羅はその男にねぎらいの声をかけた。

「うむ、よく来てくれたね。ご苦労様」

「誰だよ、こいつ」

暁は警戒心を込めて男を睨みつける。

「ああ、君たち一年生は、会ったことがないだろうから紹介しよう。彼は、^{ふくちきがい}福内鬼外くん。常に天井裏に身を潜め、人前には滅多に出てこないの、暁君も会ったことがないはずだが、彼も生徒会役員なんだよ。二年で美化委員長。趣味は密偵、特技は闇討ち。友達少ないから、まあ仲良くしてあげておくれ」

闇討ちを十八番にするような人間と、どう仲良くなれというのか。やっぱり流行の遊びは闇討ちごっこか。

顔を引きつらせ、談子は動揺して視線を泳がせる。ふと、隣の暁と目が合う。その複雑そうな表情から察するに、きっと考えていることも酷似しているに違いない。

「よろしくお頼み申す。主らのことは、拙者が全ての力を駆使して鬼の手から守って差し上げよう」

周囲の考えとは裏腹に、嬉しそうに合掌して頭を下げる鬼外。色々と奇怪な趣味特技を持っているらしいが、読心術は身につけていないようだ。その点は安心した。

「彼はね、遠く戦国時代からタイムスリップしてやって来た、本物の忍者なんだよ」

「先輩の頭がタイムスリップしてるんじゃないですか？ 嘘つくなら、もっと面白い嘘ついてください」

談子は、しれっとした目で蛇羅と鬼外を視線で嘗め回した。暁もそんな様子で、とにかく全く信用していない。

「嘘じゃ、ないんだよ？ 中々、信じてくれる人はいないけれど、彼は忍装束姿で学校の裏山で倒れていたところを、僕が助けて連れてきたんだ。それ以来、僕を命の恩人として忠誠を誓ってくれているのさ」

「忍者村のインストラクターのアルバイトが遭難したんだろ、ようはエセ忍だ」

「いやいや、そんなことは決して……」

「とにかくにも、その頭で忍者と言われても、説得力がありません」

腕を組んで、隙を見せずに直立する鬼外の頭を見れば、おそらく誰もが談子と同じ考えに行き着くはずだ。

鬼外の頭は、忍者としてどうなのかと思えるほど見事な、ドレッドヘア。細かく編まれた三つ編みが、幾重にも絡み合って蛇のように頭から噴火している。ギリシャ神話で有名な化け物、メデューサを思い出した。

「失敬な。これも修行のうちである。忍とは、隠密行動が人生のほとんどを占める。したがって、寝床もなく風呂にも入れず、とにかく過酷な生活を強いられるのである。それに慣れるため、我らは常に身体や髪を襲う隔靴搔痒に耐える訓練をせねばならぬ。しかしこの平和な時代では風呂に入るのは日課であるからして、何ヶ月も湯浴みをせぬと不潔扱いされてしまう。それで蛇羅

殿のご助言をいただき、頭を洗わなくても嫌がられない髪型を創案したのでござるよ」

前に読んだ雑誌に、ドレッドヘアの人は頭が洗えないので香水などをつけて臭いをごまかしていると書いてあった。だからと言って風呂に入らない理由にはならないと談子は思ったが。

「まあ、頭は百歩譲るとしても、身体はちゃんと洗ったほうがいいですよ」

「むむ、女子にそう言われると、何やら説得力がありけり。しかしご安心せよ、拙者として、若い娘にもてたいゆえ、湯浴みはちゃんと行っておる。熱湯に耐えるのも修行のうち。見よ、この洗練された拙者の身体を！」

そしてバツと素早く制服のシャツの胸元を開いて見せた。割れた腹が露になる。自分が清潔だとアピールしているらしいが、夜の公園で同じことをしたら露出狂と間違われること請け合いだ。

「さて、自己紹介も済んだところで、本題に入ろう。実は学校に着いた時に、彼を呼んで学校の現状調査を頼んだんだ。彼は天井と床の間を自在に移動するから、鬼に見つかることなく情報収集できるのさ。で、福内くん。頼んでおいた校内の人物集計は完了しているかな？」

「完璧でありますぞ、殿！」

鬼外が取り出して広げたのは、巻物のように丸められた、長細い半紙。筆と墨で描かれた学校の見取り図が現れる。みかんの発明により、今やその配置は理解できないほどにメチャクチャだが、ここに書かれているのは、普段の正常な校舎配置だった。所々に赤い×印や青い○印などが、小さく記入されている。

「本日、この校内には我々を含めて、計十三人の対象者がおります。青い印は、今も鬼の脅威から逃れるために身を隠している者たち。赤い印は、残念ながら……」

悔しそうに、鬼外は肩を落とす。皆まで言わずも、それが示す意味は、よく伝わってきた。

「やはり、犠牲者なくして鬼との戦いは不可能なのだね」

「とにかく、この青い印の場所へ行ってみませんか？ 生き残っている人と合流できれば、それなりに心にゆとりがもてるだろうし、何かいい案が浮かぶかもしれないし」

「でも、ここまでどうやっていくんだ。教室の配置はめチャクチャだぞ、適当に動き回っていても体力を消耗するだけだ」

「けど、ここでじっとしていても……」

言い返そうと口を開いた談子だが、その後出てきたのは、途切れ途切れの喘ぎだけだった。一瞬、息をするのも忘れてしまう。鬼外もその気配に気付いたのか、目を鋭く細め、身体をピクリと震わせた。

「あ、あれ、あれ……」

談子は真っ直ぐ指をさす。その先は、ついさっき走ってきた廊下だ。

何事かと、全員が向き直る。そして表情を一変させた。鬼がこちらを見ている。まだかなり距離があるが、それを詰めるように、こちらへ歩いてくる。

「さっきのホイッスルで、居場所が割れたのかもしれない。みんな、早く逃げるんだ！」

蛇羅の声を合図に、みんないっせいに駆け出す。

「殿！ どうされた、早くこちらへ！」

鬼外の声で、談子は立ち止まって振り返った。迫り来る鬼を目前に、壁のように廊下に立ちはだかっている蛇羅の姿が見えた。

「蛇羅先輩！ 何やってるんですか！」

「ここは僕が食い止める！ 君たちは、必ず生き残るんだ！」

談子たちに見せた蛇羅の横顔は、強気に笑っていた。だが、筋肉の引き攣りは隠しきれない。恐怖を押し殺したのか、それとも開き直りか。蛇羅は二度目の死に向かって飛び込んでいったのだ。

死ぬ苦しみを知っているはずなのに、あんなに震えていたのに。

「蛇羅せんば……」

蛇羅のもとへ駆け寄ろうと、助けようと、談子の足は後退していた。しかし、その身体を鬼外に抑えられ、手で目を塞がれた。鬼と目を合わせない為の配慮だろうか。それとも、彼が「終わる、姿を見せないためだったのか。」

どちらにしても、結局何も確認することもできず、引きずられるように談子は廊下を前進していった。

▲□▲□▲

鬼外が談子を連れて、駆け出す。獲物を逃がすまいと、鬼は速度を上げて突進してきた。

蛇羅は廊下のだ真ん中に仁王立ちして、鬼を待ち構える。

こめかみを汗が流れる。まるで丸太に括り付けられ、公開処刑の執行を待つ罪人にでもなったような気分だ。とても心地が悪い。

「俺達が食い止める。お前はさっさと逃げろ」

覚悟を固めたその時、蛇羅を庇うように前方に飛び出してきたのは、暁と安眠だった。こんな役立たずな男を助けるために、わざわざ残ってくれたらしい。

蛇羅は笑って、暁の肩をギプスで軽く叩いた。

「さっきは、足手まといが囷になればいいと、言っていたじゃないか」

「だからって、無駄死にする必要はないだろう。足手まといにも、できることがあるんじゃないのか？」

「僕にできる最善の道は、ここで足でまといを終わらせることだよ。君はまだ戦える、月見くんを守ってあげなきゃ。さあ、早く行くんだ！」

強い眼光を、暁に突き刺した。

その意志を、暁は理解してくれたらしい。少し渋っていたが、頷いて納得の意を表してくれた。

「……行くぞ、安眠！」

安眠に合図を送り、並んで後退する。先に逃げた二人を追いかけて、その場を去っていった。

それを見計らって、蛇羅は左手のギプスに噛み付き、歯の力で無理やり外した。硬いギプスが床に転がる音が、廊下中に響く。

向かってくる鬼。

相打ちで構わない。

この命が食われる前に、この手が少しでも奴に触れられれば、鬼は永い眠りにつく。

今度は、あの時のようなヘマは決してしない。

蛇羅なりに、けじめをつけようとしていた。二年前の失態は、大きな犠牲は、自分が引き起こしたものだから。

「今こそ、償いますよ。だから見ていてくださいね、夏祭先輩」

蛇羅の表情に浮かぶのは、笑み。

鬼が目の前に迫る。風に触れただけで痛みの走る左手を、思いっきり鬼に向かって突き出した

。

その手から、痛みが消える。

一矢、報いることはできたのだろうか。いや、無理だっただろう。手応えがなかった。

また、あの感覚が襲ってくる。

何もない、しかし他にたとえようのない、この感覚が。

空気が恋しい。でも、怖い。

触れるのは、御免被りたいな。

十五. 裏技発動

「……くそ、ここもか！」

暁が、舌打ちをした。

談子たちが立っているのは、体育館の入り口。

静まり返った体育館の中では、バスケット部と見られる数人の生徒とバスケットボールが床に散乱していた。

さっき、昇降口でカップルらしき二人の男女が覆い被さるように倒れているのを発見したばかりだ。鬼外の調査した通りの場所で、調査したとおりの人数の生徒たちが、魂を抜き取られていた。

ここまで正確とあっては、逐一見て回っても、気が萎えるだけだ。

そんな光景を目の当たりにし、談子はずっと俯いていた。外傷は特になく、ただ眠っているだけのように見える死体たちを見ているうちに、だんだん気分が悪くなってきた。

みかん、そして蛇羅の尊い犠牲。その上に立ち、今も何もできず、ただ生きているだけの自分に、とても重い何かのしかかってくるのを、ひしひしと感じていた。

もし、このまま全滅でもしてしまったら。

そこまでいかなくとも、タイムオーバーで誰か犠牲者が出てしまったら。

そう考える度に、落ち込み方が激しくなってくる。

「ぐうう……」

そんな談子を見て、安眠が心配そうに側に寄って来て、励ましてくれる。何とか作り笑顔で応待するが、頬がぎこちなく吊り上がる感触から、絶対うまく笑えていないことは明らかだ。

余計に安眠に、心配をかけてしまっている。

「顔色悪いぞ。少し、休憩していくか」

そんな談子を見て、暁までもが気を使ってくる。今の状態で鬼に向かって単独突進していく気はなくなったらしく、すっかり態度も思考も落ち着いていた。

みんな、いろんな形で鬼対策を考えようと努力しているのだ、これ以上、変に場の空気を悪くするわけにもいかない。談子は首を否定的に振って、先へ進むことを優先しようとした。

「また、鬼が来るかもしれないし、ここに留まっているのは危険だよ。生き残ってる人たちは、みんな職員室にいるんでしょう？　そこへ行こうよ」

「つっても、地形が変わっちまって、職員室がどこにあるのか、分からないだろうが」

蛇羅がやられてから、談子たちは必死で走り、偶然にも昇降口に出られた。外から校舎を見ると、中の空間の広がりや歪みとは裏腹に、校舎外に設置された施設などの位置は変わっていないことに気付き、一番目立つ体育館へやって来たのだった。

鬼外の作った見取り図から、青い印が集中して集まっているのは職員室であることが分かった。

まずはそこへ向かってみようと考えたのだが、いかんせん場所が分からない現状に変わりはなく、途方に暮れていた。

「今から中に入って職員室を探すとすると、至難の業だぞ。……くそ、やっぱり、不眠^ミを連れてくりゃ良かった」

やりきれず、暁が愚痴を吐き始めた。知らない名前の出現に、談子は首を傾げる。

「不眠って誰？」

「安眠と同じ、キョンシーだ。俺たちキョンシー使いは、一度に二体までのキョンシーの保持を許可されている。不眠の基本戦闘能力値は、安眠を遥かに上回っているんだ。あいつさえいれば、鬼と戦っても勝てたかもしれないのに」

拳を握り、暁は悔しそうに歯を噛み締める。血の気が多く短気で、しかも負けず嫌いな彼の言い分も分かるが、それよりも、側でしょんぼりと項垂れる安眠の姿のほうが目にとまって、談子は何だかいたたまれなくなった。

「そんな言い方したら、アンちゃんが可哀想でしょう。アンちゃんだって、一生懸命やってるんだよ、それを役立たずみたいに」

「別に、そんなつもりはない。俺はただ、正論を述べただけだ。安眠だって弱くはないが、鬼を倒せるほどパワーを上げると、制御が難しいんだ」

「それは、あんたの力不足でしょうが。自分の未熟さを、人に押し付けるんじゃないわよ」

その言葉には流石に暁もカチンと来たらしく、談子を思いきり睨みつけて怒鳴った。

「他人に、俺のことをどうこう言われる筋合いはないね。安眠も不眠も、俺の所有するキョンシーだ、どう扱おうが、俺の自由なんだよ」

「何、その手前勝手な考え方！ キョンシーだって人格があるのよ、それを物みたいに扱って……！」

「ぐうぐう、ぐうぐう……」

更にエスカレートしそうな二人の口論を、安眠が間に入って仲裁する。特に、談子に向かって必死で言い聞かせようと、頑張っていた。何を言っているのかは、相変わらず分からなかったが、自分は平気だから喧嘩するなど、おそらくそう言いたいのだろう。暁よりも談子のほうが融通が利くはずと、安眠なりに考えて、談子への説得を強めてきたのだ。

こんなに、ご主人様である暁のことを一生懸命考えているのに、どうしてそんな風にしか見てあげられないのだろう。同情心が浮かんでくる。安眠にではなく、暁に対して。

「……ケッ、うんざりだ。いつまでお前みたいな偽善者と一緒に、鬼ごっこなんてやってなきゃならねえんだ」

白けたらしく、暁は悪態をついて、そっぽを向いた。

この緊迫した時間と空間、自分の力ではどうにもならない、焦燥感ともどかしさ。それらがプレッシャーとなって暁を苛立たせているのだと、何となく理解できる。だからって、言っていることと悪いことがあることくらい、考えてほしいものだ。

更に言い返そうとした談子を、安眠が制止する。

「ぐうぐう、ぐうぐう！」

そして暁に何やら話し始めた。それに耳を傾けた暁の表情が、良い方向へ変化する。

「何？ 家に電話して、不眠に学校に来るように言えばいい？ そうか、その手があったか！」

でかしたぞ安眠」

目を輝かせ、嬉しそうにズボンのポケットから携帯を取り出す。と言うより、今まで気付かなかったほうが不思議だ。間抜けなやつめ。

誉められても、どこか寂しげな笑顔を浮かべている安眠を見ていると、不眠とやらがやって来て、事態が良くなっても、談子の怒りは治まりそうになかった。

メモリから家の番号を選択し、暁は携帯に耳を当てる。しかし、待てど暮らせど、通話が始まる気配がない。回線を切り、リダイヤルする。それを数回繰り返したが、やはり結果は同じだった。

「……くっそー、あいつ、電話が鳴ったら、ちゃんと出ろって言ってあるのに」

「どっか、出掛けてるんじゃないの？」

「あいつは引きこもりだから、よほどのことがない限り、外には出ない」

「ぐぐ……、ぐうう！」

何か思い出したように、安眠が声を上げた。

「どうした、安眠」

「ぐうぐう、ぐぐぐう、ぐうぐ！」

「何？ 不眠は反抗期の天の邪鬼だから、言われたことと正反対のことしかしない？ だから電話に出ろと言われたから、絶対出ないと思う？ ……あのナマクラ娘……！」

こめかみを引きつらせ、明後日の方角を睨みつける暁。そっちの方向に家があるのだろうか。

何にしても、結局助太刀は望めず、元の木阿弥に戻ってしまった。

「やあ、済まん済まん。待たせてしまったな」

振り出しに戻って溜息をついていると、体育館のステージの奥から鬼外が現れて、こっちへやって来た。

「あれ、鬼外先輩、どっか行ってたの？」

「別に待ってないが。いなかったことにすら、気付いてなかったし」

談子や暁にとっては鬼外がいようがいなかろうが、別に大した問題ではなかった。安眠はいないことに気付いていたようだが、必要以上に気に懸けてはいなかったみたいだし。

「くっ、最近の新参者どもは、態度が悪くて適わん。せっかく、対・鬼兵器をかき集めてきたというのに」

そう愚痴る鬼外の背中には、丸く膨らんだ唐草模様の風呂敷が背負われていた。

談子たちの側まで来て、それを床に降ろして広げる。中からは、ガラクタとしか形容しがたい奇妙なものが、たくさん湧き出てきた。

「みかん殿に頂いた、素晴らしい忍具や暗器の数々でござる。これだけあれば、向かうところ敵なし。鬼であろうとも、太刀打ちできんだろう！」

「そうか？ どれもこれも、子供の玩具みたいにしか見えないが」

「……みかん先輩に、おちょくられてるんじゃないですか？」

憐れな目を向けられ、鬼外は少し自信をなくして怯んだ。しかし、その程度でめげていては、エセとはいえ忍者は務まらないようである。気を取り直して、ガラクタを漁り始めた。

「たとえば、この自動火打石！ これによって拙者の苦手な火遁の技が、難なく使えるのである！ それ、火遁、火遁！」

カチカチと、自動火打石のスイッチを押す。シュポッと、穴から勢いのいい火が吹き出した。「つかそれ、ただのライターだしね……」

呆れた顔を見せる談子を見て鬼外は焦り、今度は二丁拳銃を取り出した。

「この鉄砲から出る水で、拙者お得意の水遁の技が、簡単に使えるのである！ それ、水遁、水遁！」

ピューピューと、銃口から水が飛び出して辺りを塗らす。もう談子は言葉も出なかった。完全に遊ばれているな。みかんのやりそうなことだ。

「はっはっ、今度ばかりは、恐れ入ったであろう。感動しすぎて言葉も出ないと見た！ これほどまでに万能な文明の利器が揃っておれば、殿の尊い犠牲も無駄にはならんだろう」

それを逆手に取り、優越感に浸る勘違い男、鬼外。もう好きにしると、談子は完全に無視した。

「気楽な奴だな。玩具使って楽しく遊ぶのは勝手だが、あくまで俺たちは鬼に追われてるんだ、邪魔だけはしてくれるなよ」

暁が、つまらなさそうに溜息をつく。それを見た鬼外が、挑発するように笑いを飛ばした。

「何だ貴様、随分と余裕のない言葉を吐きよる。楽しいとは思わんのか？ 鬼と戦うなど、この先、経験できるかどうか分からんのだぞ」

「別に、興味ないな。鬼を相手にして、楽しいなんて思ったことはない」

「フン、臆病風に吹かれおって。キョンシー使いの一族とは、その程度のものか」

「何だと!？」

「ちょっと、こんなところで、喧嘩は止めようよ」

「ぐうぐう」

鼻で笑う鬼外の挑発に乗り、暁は怒りを露にする。待ってましたと言わんばかりに、鬼外は楽しそうに対応している。

突然のことに、外野でオロオロする談子と安眠のことなんて、お構いなしだ。

「キョンシー使いは、代々この地に人材を送り込み、鬼の封印を守るべく助力してきた、由緒ある一族だ。エセ忍の分際で、俺たちを貶して、ただで済むと思うなよ」

「何が由緒だ。誇りなんぞで飯は食えん。我が福内一族が仕えていた武家も、その代々伝わる何とやらを重んじるあまり、織田軍の奇抜で斬新な戦法によって滅ぼされた。それを目の当たりにした拙者は知ったのだ。いつの世の戦にも、必要なのは書き古された戦略図ではない、これからいくらでも書き込み自由な白紙なのだ。それが分からん頭の固い奴には、どうあがいても鬼を倒すことなど不可能！ そちらの女子や幼子のほうが、よほど勇敢に見えるわ。誇りが守りたければ、彼女らの後ろで指を咥えて、拙者の勇姿を見物している」

「……この野郎、言わせておけば！」

暁の拳が飛ぶ。怒りにまみれたその顔は、頭に血が上りきって真っ赤だ。勢い任せに飛ばした右ストレートが鬼外の顔面を直撃した。と思ったときには、その場所に鬼外の姿はない。談子と

安眠も呆気にとられて周囲を見回すが、どこにも見当たらない。

「そうそう、武闘家ならば、意見は身体を張って主張せねばな」

その声は、上からした。驚いて見上げると、体育館の高い天井に足の裏をつけ、逆さまに立っている鬼外が。あの姿は少し忍者っぽいと、談子は思った。

「拙者は、鬼と戦うことを楽しく思っている！ これほどにないほど胸が高鳴り、身体が暴れたくてうずうずしておるのだ。お主に戦う意思がないのであれば、鬼の始末は拙者に任せてもらおう！」

笑いながら、鬼外は言い放つ。

頭も冷えてきて、いささか落ち着いた暁は、冷たい視線を頭上に向けた。

「死に急ぐなら、勝手にすればいい。俺は俺のやり方で、鬼の始末をつける」

「……いい目だ。それこそ戦いに身を投じる野生の^{まなこ}眼！ それを見ているとお前の兄を思い出す。奴とは良い修行仲間だった」

「変人同士、波長が合っただけだろう。俺とあいつを、一緒にするな」

昔を懐かしんで、顔を綻ばせる鬼外に、暁は悪態をつく。暁は、根底から嫌って存在を否定しているようだが、暁の兄とは、意外と人望の厚い人だったのではないかと思う。

実力だって、暁以上に持っているのだろうし。

なんて口走ったら暁に殴られそうなので、談子はその意見を心の中にしまっておいた。

「ぐうぐう」

ふと横を見ると、安眠が鬼外のガラクタを漁っていた。なにやら、四角いトランシーバーのようなものを手にして振り回している。

「何だろね。ちょっと見せて、アンちゃん」

何だか妙に興味を引かれ、安眠からそれを見せてもらった。

黒い箱のようだが、中を開くと携帯ゲームのように小さな画面が出てきて、手元にいくつかボタンがついている。

電源らしき赤いボタンを押すと、画面が明るくなり、メニュー画面のようなものが表示された。

インターネットの検索画面のようなものが出てきて、何かを入力できるようになっている。パソコンとは違うものの、かなり精密な機械のようだ。

『ハイ！ お気軽ナビ、使ってくれてありがとう！ これが必要になったってことは、鬼ごっこに行き詰まってきたのかな？』

突然、機械が喋り始めた。驚いて辺りを見渡すが、側にいた安眠に、この声が聞こえた形跡がないことを確認し、確信する。

この声は、物語りの智慧を持つ談子にしか、聞こえていないのだ。

息を飲み、身構えて再び声に集中する。

『ここだけの裏技、このマシーンをちょこっといじれば、学校を囲むように設置されたバリアーを湾曲させて、十分間だけ穴を開けることができるんだ！ もしもの時には、下の黄色いボタンを押してくれ！』

「すごい！ ねえ、すごいもの見つけたよ！」

あまりの感動に、談子は大声を上げる。大発見だ、これもみかんが作ったものだろうが、談子の能力がなかったら、全く活用できていなかったかもしれない。

談子の声に反応した連中が、何ぞやと集まってきた。談子は、さっき機械が言っていた内容を、再度説明して聞かせる。暁の表情も、感動に染まった。

「それってつまり、外に出られるってことじゃねえのか!? よっしゃ、それを使えば、直^{じか}に不眠を引っ張ってこれる！」

「うむ、助っ人を呼んでくるなら、まだ校内に生き残りがおる、今しかなかろう。膳は急げ、使ってみるのだ」

「うん。たしか、黄色いボタン……」

ポチ。何のためらいもなく、ボタンを押した。画面に校内全土を映した縮小マップが表示される。その端の方に、黄色い光が点滅し始めた。

「……ここに開いたってことかな？ プールサイド」

「めっちゃめっちゃ遠いじゃねえかよ！ 十分で行けるのか？」

「行くしかないでしょ！ 膳は急げ、グラウンドを突っ切れば、きっと間に合うよ」

時間が惜しい。談子たちは一目散に駆け出した。

十六. 鬼VS忍者

体育館から外に出て、石でできた階段を駆け下りると、広いグラウンドに出られる。プールが設置されている場所は、ここから校舎を挟んで、ちょうど向こう側にあるのだ。

「見て、あそこ！」

一番にグラウンドの砂を踏んだ談子が立ち止まり、遠くを指差す。ここからだとなフェンスしか見えないプールだが、その側に、なにやら蜃気楼のような奇妙な揺らぎを見て取ることができた。

それは大きな球形をしていて、側に液晶画面のような横長の長方形が、一緒に浮かんでいる。その画面の表示は、デジタルカウンター。カンマ区切りの数字が勢いよく減っていく。きっと、あの揺らぎが消えるまでの時間を表示しているのだと悟った。

残り時間は、八分二十四秒。

「急げ！ 間に合わなくなるぞ」

談子を追い越し、陸上走りでグラウンドを分断するように駆け抜けていくのは暁だ。

その後ろを、身軽な安眠が続いて行く。どちらも、信じられない速さだ。

「ちょ、ちょっと、待ってよ……」

数瞬遅れて、談子も走り出す。しかし短距離が苦手な談子には、この直線は、かなりきつい。しかも筋肉痛ときたもんだ。まだ半分も走っていないのに、談子は既にバテ始める。

「無理をしてはいかん。これで鬼との戦いが終わるとは限らんのだ、体力はある程度、残しておかんと」

後ろから、鬼外が忍者走りでやってきた。男子なのだし、体力はありそうだ。行こうと思えば暁と同じくらいのスピードで走れそうなのに、彼は最後尾に気を配りながら、ゆっくり進んでいた。

談子の隣に並び、平然とした表情をしている。ドレッドヘアが風に靡いて、天日干しワカメのようだ。

「き、鬼外先輩、先行ってください。間に合わなくなったら大変……」

息を切らしながら、談子は言う。鬼外は歯を出して笑った。

「別に拙者は、外界へ出たいわけではない。それに女子をひとり、こんなところへ残して行くわけにもいかんだろう」

「な、なかなか、かっちょいいこと、言うじゃないですか」

少し鬼外を見直した。しかし顔が赤いのは決して惚れ直したからでも照れているからでもない。

「はっはっ。これぞ忍びの極意！ できれば水浴び場までお連れしたかったところだが、ここは遠くからでも目立ちやすい。身を隠すものが何もない開けた場所であるからして、もし拙者が刺客ならば、迷わず狙うであろうな」

プールの入り口まで、あと少しに迫った。前方では暁と安眠が立ち往生している。きっと扉が開いていないため、どこから入り込むか迷っているのだ。とにかく談子は、追いつけて安堵する

。それとは正反対に、鬼外の眼光が細く鋭くなる。

突然、上空で凄まじい破壊音が響き渡る。心臓が跳び出るかと思った。驚いて見上げると、何かが降って来る。

――光の雨。

そう見えるほどに眩しい小さなものが、バラバラと落ちてきた。

それが太陽の光を浴びて輝いた窓ガラスの破片だと気付いた時には、目の前が真っ暗になった。

「目に入ると危険でござる、下を向いておれ」

談子の視界を塞いだのは、鬼外の制服の上着だった。訳が分からず上着を取ろうともがいていると、ドザーと大雨のように、細かい粒が地面に大量に降り注ぐ音と、頭に何かが大量にぶつかる感触が襲ってきた。

霰に降られた時のことを思い出す。その感覚に、よく似ている。

音も感触も止み、頭から上着をどける。

あたりの景色が、数分前とは一変していた。大量のガラスの破片に埋め尽くされ、半透明に輝く校庭。見上げれば、グラウンドに隣接する校舎三階の窓ガラスがほとんど割れ、淵しか残っていなかった。

そして目の前では、風呂敷を頭からかぶって硬い雨を凌いでいた鬼外の姿が。

道具を収納していたものを使ったため、周囲の地面にはガラスの粒と混ざり合って、大量のガラクタが散乱していた。

「だ、大丈夫ですか先輩。これはいったい……」

「む、来るぞ！」

談子のか細い声を遮り、喝を入れるように鬼外が怒鳴る。直後。

バン！ 先ほどと同じ規模の破壊音。今度は同じ階の別の窓が勢いよく割れ、地面に降り注ぐ。談子たちのいる位置からかなり離れていたため、被害を受けることはなかった。

しかし、この時降ってきたのものは、ガラスだけではない。砕けた破片を身に纏い、勢いよく落ちてくる大きな塊。

鬼だ。

「そっ、そんな！」

有り得ない、あんなところから追いかけてくるか、普通。

驚く談子、しかし鬼外の言う通り、このような目立つ場所をトロトロ走っていて、鬼の目に止まらないはずがなかったのだ。

鬼は魂を持つ人間たちを目ざとく見つけ出し、執拗に追い詰める。

その魂を食らい尽すまで。この地から、人間がいなくなるまで。

「ようやく、おでましか！ ここは拙者が引き止める、お主は早く、出口へ向かうのだ」

鬼外は勇ましく吠え、固まってしまっている談子を抱き上げた。

「えっ？ あのっ!？」

「そらっ、行くがいい！」

そして両手で一気に投げ飛ばした。狙いは正確、談子は鍵のかかったプールの入り口にまっしぐら、突っ込んだ。

その先には、暁と安眠の姿がチラッと見えた。フェンスを登って中へ進入しようとしているところだった。

「ぎゃああああ！ ぶつかるー！」

「うおっ、何だ!？」

フェンスの頂上に足をかけた暁に激突。そのまま、プールサイドへ突っ込んだ。頭でスライディングして制止した談子は、思いっきり擦れた額をさすりながら、上体を起こす。

「いったー。何てことするのよ、もう……」

「そりゃ、こっちの台詞だ！ いきなり飛んできやがって、どこのミサイルだお前は！」

同じく上体を起こした暁が怒鳴る。背面を打ったらしく、しきりに背中を押さえている。

「そんなこと言ったって、あたしは何も……」

「ぐうぐう！」

一人、身軽にフェンスを跨いできた安眠が声を上げ、腕を伸ばした。言い合いを中断してそちらを向くと、水の張られたプールの向こうサイドに揺らぎが。

あれを越えれば、外に出られる！ 胸に期待が膨らんだ。

しかし安堵する暇はなく、隣のタイムカウンターの数字を見て、二人は飛び起きる。

「急げ、あと十秒！」

そして全速力で駆け出した。

▲□▲□▲

午後の太陽が降り注ぐ、広いグラウンド。足元に散らばった、素晴らしき対・鬼兵器の中から、水泳用のゴーグルを拾って装着するドレッドヘアの男――福内鬼外。

これも戦略の一つだ。半透明の膜に覆われた、太陽の光をも遮る水中眼鏡をはめていれば、向こうにこちらの眼球運動を悟られにくい。したがって、相手に動きを読み取られたり、うっかり目を合わせて魂を抜き取られる確率も、ぐんと低くなるのだ。

「この地に流れ着いて、早幾年。拙者は、この時を待ちわびておった」

鬼外は笑う。両手には、十八番である水を操る文明の利器、水鉄砲が二丁。引き金を引く寸前の状態で構えられている。

その銃口が向かうは、すぐ前方の輝く大地。大小、多数のガラスの破片を身に纏った白髪の夜叉に、しっかりとポイントされていた。

「拙者の名は、福内鬼外。その名に鬼の名が刻まれているのは、鬼のように強く大きく、そして鬼よりも繊細で懸命な忍となるよう望まれ、この世に生を受けたため。その由来を知ったときから、拙者の夢は唯一つ！ 目指すべく鬼と対峙し、乗り越えて真の強さを得ることにあり。その夢叶うことなく見知らぬ土地に行き着いてしまったが、よもや、このようなところで捜し求めた鬼と戦うことになろうとは、数奇な巡り合わせよ。ここであつたが百年目、今日この地で貴様

を倒し、忍の世を統べる王となろう！」

鬼外は構える。その奇怪な姿を、鬼が睨みつける。

鬼の表情は、経てして変化しない。まるで仮面でも被っているようだ。その赤い裂けた三日月状の口から、潰れた咆哮が迸る。低く、重い音波が鬼外の周囲の空気を震わせた。

凄まじいプレッシャー、常人ならば、その場に腰を抜かして失禁しそうな恐怖感が、辺りを包みこむ。

鬼の威嚇行動に、鬼外が臆する気配はない。逆に挑発するように、ゆっくり足を前へ押し出した。

鬼の声が止まる。目の前の怪しげな男の動きに反応し、一瞬の間を見せる。

鬼外の好機。

逃さず突進する。

グラウンドが抉られ、小さな穴が点線を描くように直線に延びる。その僅か上空には、纏まって綺麗に飛び散る、砂の塊。鬼外が地面を蹴り進んだ跡だが、その残像は全く見えない。

微動だにしなかった鬼が、反応した。その瞬間には、既に鬼外は鬼の懐の中だ。

「貴様には、これで充分！」

水鉄砲を懐にしまい、ズボンのポケットから取り出したのは自動火打石。ライターとも言う。

「食らえ、火遁、火遁、大爆発！」

シュボ、シュボと連続で火を起こす。その小さな熱に驚き、怯む鬼。その顔が、突如として炎に包まれた。

直後に耳を劈いた爆発音。ライター本体が強烈な炎を巻き上げ、爆発したのだ。

本来、ライターには爆発するような仕掛けも素材も使用されてはいない。これを鬼外に渡したみかんが、何らかの仕掛けを施した可能性もあるが、その原因のほとんどは、鬼外の自然現象を操る能力にあった。

火遁は最も危険で苦手な技だが、この程度の規模の炎を誘発させることなど、寝ながらでもできる。

爆発の直後、その高温の熱のせい、強烈な爆音と煙のせい、鬼は顔を抑えて悲鳴を上げた。

身体が引き裂かれそうな、高音の叫び。あまりにも強烈過ぎて、先手を打った鬼外も怯み、その後の連続攻撃に繋げることができなかった。

耳を押さえても聞こえてくる、激しい声。妙な超音波を出しているらしく、校舎一階の窓ガラスに罅が入り、中央から割れて砕け散った。

「くうっ、何と非常識な……」

人のことは言えないまでも、鬼の放つ技の威力は、桁違いに凄まじい。

鬼外は自分の手が震えていると気付いた。

ゼロ距離で暴発を促したせいで、鬼外の身体もダメージを受け、手や制服は、火傷や煤で真っ黒になっている。

自ら身体を張っての攻撃と、それに対する予想以上の反動。

有利かと思われた戦況だったが、じわじわと悪化の道を辿っている。

「あの衝撃を受けて、無傷だと言うのか……？」

大きく舌打ちする。鬼の髪や着物など、燃えやすいものは多少焦げていたが、その硬い鱗のような肌には、焼け焦げ一つ付いていない。

鬼はもともと、火山口付近で生活をする種族だと言われている。熱には、めっぽう強いのかも知れない。

「ならば、やむ負えん、拙者の最終兵器を食らえ！ そら、水遁、水遁！」

懐から取り出した水鉄砲の引き金を引く。

ピューピューと水が飛び、鬼との間の地面を濡らす。だがその攻撃は、乾燥したグラウンドでは、間抜けで無駄な行為にしかならなかった。

いかんせん、水量が足りない。雨でも降らない限り、水は火のように空気中に分散しない。大技を使うには、それ相応の体積の水が必要となる。幸いにも、背後にはプールがあるのだが、果たしてそこまで逃げ切れるか。

だがどう頑張っても、水鉄砲では鬼に太刀打ちできない。最終兵器を封じられ、また少し鬼外は怯む。

その弱気になった魂を、鬼は決して見逃さない。

反撃が開始された。

こちらへ向かって突進してくる。

「ちいっ！ 仕方がない、いったん退却……」

逃げようと背を向けかけたその時、偶然にも、その光景を目に留めてしまった。

追いかけてこようとした鬼の動きが、何やらぎこちない。

スピードが格段に落ち、足元がおぼつかず、ふらふらしている。何事かと地面を見てみれば、鬼はグラウンドの乾いた砂だけを、一生懸命踏みしめて進もうとしていたのだ。

鬼外の顔が、歓喜に綻ぶ。

「成程な。見つけたぞ、鬼の弱点！」

素早く印を結び、固定した両掌を、地面に叩き付ける。

瞬間、グラウンドが砂丘に変貌した。平らに均されていた地面が鬼を頂点に膨張し、小さな山のように盛り上がる。

「土遁、無頂点！」

再び印を結ぶと、小山が破裂し、鬼が上空へ吹き飛んだ。おぞましい姿形をしていても、身体は童女のものだ。小規模な爆風で、かなり高くまで砂と一緒に巻き上げられる。

それを見計らい、鬼外も跳んだ。あっという間に鬼と同じ高さまで上昇し、飛び上がる前に手に入れておいた長い棒を、鬼めがけてスイングする。

これはかつて、孫悟空も使ったとされる伸縮自在の如意棒だ。と鬼外は思っているが、実はただの物干し竿である。みかんの配慮で、若干は伸び縮みするようだが。

棒は鬼の背中を直撃、ダメージを受けたかは、手応えから謀り知ることはできなかったが、小さな身体はその反動で、勢いよく飛ばされた。

鬼が飛んだ場所は、先ほど談子を投げ飛ばしたプール。

プールサイドを一生懸命走っている人影が三つ、空の上から確認できた。

影が向かうその先には、外界へと繋がる揺らぎの扉。

その側につけられたデジタルカウンターは、既に十秒をきっている。談子たちは無事、潜り抜けることができただろうか。それを確認する余裕は、残念ながらなかった。

素早く着地した鬼外は、鬼の後を追うように駆けだし、外壁を飛び越えてプールに潜入。

プールサイドに着地すると同時に、鬼が水の中に落ちた。

「ギャアアアアアア!!」

凄まじい悲鳴。塩素まみれの水を口の中で泡立たせながら、必死でもがいている。

「やはりな、貴様の弱点は水だ！ 敵の弱きを突く、これすなわち卑怯に非ず！ 立派な戦法である。悪く思うな」

鬼の暴れる目の前で仁王立ちし、鬼外は勝利に酔いしれる。腰に手を当てて、大らかに笑った。

。

溺れながらも水をかき、鬼がプールサイドへ接近した。足場へかけられた鬼の手を踏み抜こうと、鬼外の足が油断なく動く。

しかし、その行為そのものが油断だった。

鬼は振り下ろされてきた足首をタイミングよく掴み、人外に相応しい怪力で、鬼外を水中へ引き摺り込んだのだ。

「んなっ、何とオ！」

不意を突かれた。足を滑らせ、水の領域へ真っ逆さま。

衝撃と共に立ち昇った水柱。深部まで引きずり落とされた鬼外だが、水中眼鏡とは、本来ここで使うものだ。水の中でも、鬼の動向がよく見える。

陽光が差し込む水底。まだプール開きには早いですが、毎年冬になると、近くの川に飛び込んで寒中水泳を日課とする鬼外にとっては、ぬるま湯と何ら変わらない。

水中で、鬼が暴れていた。必死で泳ごうとしているが、着物が水を吸って、その重みでどんどん沈んでいく。手足を動かすたびに、小さな泡の集合体が生み出され、上へ上へと登っていく。

水の中で、鬼外はほくそ笑む。鬼には悪いが、水中の戦闘は鬼外の最も得意とするところ。

戦闘値が大幅にアップする鬼外のテリトリーに入り込んでしまった以上、逃げることはできない。

水中で素早く印を結ぶ。

『水遁、螺旋流巻！』

術の発動を促した。次の瞬間、プールの水が大きな渦を描いて回り出す。しかもただ回るだけではない。回転はどんどん高速化し、ついには重力による空気抵抗を破壊、上空へと飛び出した。

。

それは外から見れば、おそらく巨大な水の竜巻に見えるだろう。それに巻き込まれ、鬼が水と共に上昇する。鬼外もわざと巻き込まれ、共に登っていく。

ある程度上昇すると、水の威力も底を突き、滝のような雨となって、がらんどうのプールへと

再び帰っていった。

水の舞から放り出された鬼は、溢れた水が波打つプールサイドに叩きつけられ、奇声を上げながら倒れた。必死で起き上がろうとしているが、痙攣する身体はうまく動かないようだ。

その側に、鬼外が無傷で着地する。ゴーグルを目からはずして額に上げる。その満悦した笑顔で鬼を見下し、歓喜の声を上げた。

「ふふふ、やったぞ、してやったり！ ついに鬼に一矢報いることができた！ これで拙者も世に数多という強者達と、名を連ねられるというものだ！」

悦に入り、笑いが止まらない。背中を逸らせて、威張り散らしている。

が、その体勢は、いささか命取りだった。

「お？ 何だ、頭が重い……」

鬼外は気付いていなかった。頭が火遁の影響で爆発し、金タワシみたいなアフロヘアと化していたことを。さらに、知らなかった。大量に水を吸ったアフロが、どれほどの質量になるかを。

背中がだんだん反れ、必要以上に重くなった頭が、地面に落ちた。想定外の出来事にジタバタしてみるが、ブリッジの体勢から動くことすらままならない。

「くうっ、何たる失態、せっかく、鬼に一撃を与えられたというのに、何とも情けない姿！」

顔を歪めて、己の失態を恥じる。これは、誰が見ても明らかに、格好悪い。

体勢を整え直そうともがいていると、足元から嫌な空気が漂ってくるのが感じ取れた。

寒気を覚えたのは、体中が濡れているからだけではないはずだ。

妙な威圧感。

鬼外は、唯一動く眼球を精一杯下げ、顎を引いた。腹部の曲線が見える。そこから日の出のように登ってきたのは、雫をたらした白髪一束。

荒い息を吐き出しながら、それはこちらへ近付いてくる。ゆらり、ゆらりと身体を左右に揺らしながら。

「ば、馬鹿な。先程まで、満身創痍だったはず。起き上がることすら、できなかったのに……」

――鬼を侮りし者、無様に散り逝く姿は、さぞ見物なり。

昔どこかで聞いた、物語の終わり文句が、頭の中に響く。

だがそれも、すぐにかき消された。

自分の上げた絶叫によって。

十七. 攻略失敗

流石に、水に飛び込むことは憚られ、プールサイドを通過して談子たちは遠回りを強いられた。カウンターは、残り十秒を切っている。緑色だった数字の表記が赤く変わり、点滅を始めている。

ドバーン！

もう一息で揺らぎに辿り着くという時、強烈な水音と共に、プールに波紋が広がった。

「なっ、何!？」

足は止めず、慌ててそちらを見る。しかし、向こう岸の様子は水の飛沫でよく見えず、何が起こったのかさっぱり分からない。

「あと五秒、間に合うぞ、急げ安眠！」

「ぐう！」

暁と安眠がラストスパートをかけた。談子はともかく、お目当ての不眠というキョンシーを連れてくるには、安眠の協力が不可欠なのだそうだ。不眠は天の邪鬼で、おまけに反抗期らしく、暁の言うことを全然聞かない。しかし安眠とは仲が良かったため、彼女の言うことなら、たいてい聞いてくれるらしい。

暁が揺らぎに手を伸ばす。もうすぐ届きそうだ。残り三秒。二、一……。

「ぐっ！」

安眠が転んだ。濡れていた地面に足を滑らせたのだ。身軽な安眠は、その拍子で暁の背中に思いっきり突っ込み、共に倒れる。揺らぎのすぐ真下だった。

零。

ビーっと、サイレンのような音が鳴り、カウンターの表示が黒くなる。同時に、揺らぎがすうっと消え、その場には目に見えない、しかし強力な結界が再び張り巡らされた。

立ち止まり、談子は「あちゃー」と頭に手を当てる。

出口が消えてしまったことも大変だが、安眠に対する暁の風当たりのほうが、もっと大変だ。心配そうに二人を見守る。

「ぐ……。ぐっ、ぐぐう！　ぐう！」

起き上がった安眠は、すぐに自分が転び、そして暁を巻き込み、更には最初で最後かもしれない絶好の機会を逃してしまったことに気付いて、焦り始めた。

安眠は賢い子供だ。何でもすぐに理解するし、素直で善悪の判断も、しっかり区別できる。

だがそういう子供は、自分が起こした不祥事について、必要以上に罪悪感を抱いてしまう。

抱えなくてもいい責任や苦痛を背負い込み、悪い事は悪い事だと理解しているから反論もできず、ただ謝ることしかできないのだ。

それを知ってか知らずか、談子の予想通り、暁は身体を起こした途端に安眠を怒鳴りつけ始めた。

「――どうして、お前はいつもいつも、大事なところで邪魔をするんだ！　ぐずで、のろまで、おまけに弱い。お前がもっとしっかりしていれば、こんな苦労しなくても、鬼にだって勝てたは

ずだろう!? ただでさえ役立たずなのに、最後の最後でへましやがって。この責任、お前はもうや
って取るつもりなんだ!？」

「ぐっ、ぐうう……」

「唯一の出口は塞がれた、不眠を連れてくることはできない。このままじゃ鬼も倒せない! や
りたい放題されて、全員がやられていくのを黙って見てるつもりか、お前は!」

「ぐうぐう、ぐうう!」

首を振り、安眠は必死で否定する。今にも泣きそうな、とても辛い顔をしている。

しかし、キョンシーは泣けない。悲しいのに、悔しいのに泣けないというのは、とても苦しい
ことだろうと思う。

そしてそれ以上に、安眠がそこまで苦しむ必要もないだろうと、談子は強く思った。

「も、もういいじゃない。アンちゃんは反省してるよ、そんなに怒らないであげてよ」

「うるさい、他人が口出しするな! 何も知らないくせに、何の責務もない環境でのうのうと暮
らしてきた人間が、偉そうな口を叩いてんじゃねえ!」

割り込んだ談子に、暁が怒鳴りつける。安眠が身体を震わせて、談子の後ろに隠れた。それほ
どに、暁の剣幕がいつもに増して激しいと言うことだ。

余裕のない、精一杯の主張。それが暁が出した数少ない本音だと理解する。

暁だって、実際に鬼と対峙してみて、自分自身の実力不足を痛感している。だからこそ、強さ
を求め、うまくいかなければ焦りと苛立ちに苛まれる。

自分を、無能だと認めたくないのだ。まだやれると、可能性に縋っているのだ。

だが怒鳴り終えて、暁はばつの悪そうな表情で俯いた。自分の言動が過剰だと理解している。
彼もまた、賢い人間だ。

ならばきっと、談子の言い分も理解してくれるに違いない。そう確信して、勢いよく暁の胸倉
を掴んだ。その行動に驚愕の顔色を見せる暁だが、談子は特に怒るでもなく、そのままの体勢で
静かに口を開いた。

「あんたの事情なんて、知ってるわけじゃない。知らないから口出しできるの、知らないから
、普通に考えて間違ってることは、ちゃんと注意してあげられるの。あんたやアンちゃんが、ど
んな世界で暮らしてきたかなんて、分からない。だけど、あんただって、あたしがどんな環境で
暮らしてきたかなんて知らないでしょう? そりゃ、のうのうと暮らしてきたって言われても、
否定はしないよ。本当のことだし。けどさ、辛いことの基準なんて、人それぞれ違うんだから
、自分だけが不幸なんだとか、考えないでよ。何でも悪い方向に考えないで。鬼が倒せなくた
って、何もできないわけじゃない。方法が見つからないからって、全滅するとは限らないのよ。
あたしは死ぬ気ないもの。綺羅姫を助けてあげるまで、絶対に死んでやらないんだから」

一気にまくし立てて、談子は呼吸を整えて、暁に笑いかけた。

「だから、もっと良い方向に考えようよ? まだ絶対、方法は残ってるんだから。ね?」

「……………」

暁は無言で、目を逸らした。態度は曖昧でも、絶対に頭の中では理解してくれているはずだ。

言うだけ言って満足した談子は、暁の胸倉から手を離れた。

「……ぐうー」

安眠が、談子の姿を見て、うっとりしていた。あそこまで、勢いづいて暁に言いたいことを物申せる談子に、尊敬の念を抱いたのだろう。

「……安眠、こっち来い」

静かに、暁が指示する。安眠は一瞬身体を強張らせたが、その声に、もう怒りがこもっていないことを敏感に感じ取り、そっと暁の側に寄る。

安眠の顔に、暁の手が伸びる。殴られるかと思ったのか、閉じたままの目蓋を、更に強く閉じる。痛みは感じなくても、恐怖はあるのだろう。

「鼻、折れ曲がってるぞ」

ゴキリ。暁の親指が安眠の鼻を押さえ、骨格を元に戻す。転んだ拍子に、鼻骨が折れたらしい。

普通に考えると凄く痛いはずだが、安眠は血も出ないし、気付いていなかったらしい。

キョンシーの痛みのないところは、いいなあと談子は思う。腕がもげるのは、困りものだが。

「ぐう、ぐうぐう」

安眠が必死に何かを訴える。暁に謝っているのかもしれない。暁は何も言わず、ただ安眠の帽子に手を載せた。それだけで、充分だったのだろう。安眠の表情はみるみるうちに笑顔に戻った。何にせよ、仲直りしてくれてよかった。談子も嬉しそうに二人を見ていた。

その時。突然プールが激しく波打ち、中央に水の竜巻が発生した。

「こっ、今度は何？」

驚いて構える。高さ数メートルに及ぶ、太くて長い竜巻。水の縄のようにも見えるし、螺旋階段にも比喻できないことはない。それくらい、大規模なものだった。

圧倒されていると、すぐに竜巻は収まり、塩素をふんだんに含んだ水が、大雨のように降り注ぐ。プールをはみ出し、サイドにいた談子たちにも豪雨のように水が落ちてきた。高い場所から一気に落下したほとんどの水は、地面にぶつかった勢いで跳ね上がり、津波のように側面へ押し寄せてくる。

「わわわ、うわー！」

談子たちは慌てて駆けだし、校舎裏と隣接するフェンスによじ登って難を逃れた。フェンスの隙間から、苔混じりの大量の塩素水が外へ流れ落ちて行く。呆然としながらプールを再度見ると、どこかで見たような人間が、妙な格好で横たわっていた。

「あれ、鬼外先輩だ。何でブリッジしてんだろ」

「つーか、髪型が変わってないか？」

器用に頭を支えにしてブリッジをするアフロ男に変貌を遂げた鬼外を見ていたが、その側に迫り来る、もうひとつの影に、目を疑った。

「おい、鬼が……」

先ほどからの轟音、大量の水飛沫、竜巻、津波。その災害めいた事象が、鬼外が鬼と激しい戦いを繰り広げていた証なのだと、談子は悟った。

自分たちのことで精一杯で、周りに目が向けられず、気付かなかったのだ。

鬼が、あんなに近くにいたなんて。鬼外が、命懸けで足止めをしてくれていたなんて。

「鬼外先輩、逃げて！ やられちゃうよ」

談子の辛辣な叫びは、虚しくも、鬼外の断末魔の悲鳴によって遮られた。

力が抜け、プールサイドに倒れて、鬼外は動かなくなる。その上に馬乗りになった鬼が、その姿を覆い隠す。

「や、やられ……」

身体から、血の気が引いていくのが分かる。目の前でまた、知った人間が命を奪われた。それがとても辛く、耐え難い。

「……鬼が、動かない？ 鬼は、かなり消耗しているみたいだ。今のうちに逃げるぞ」

鬼外の上で身体を倒した状態で制止してしまった鬼を見て、暁が気付いた。

落ち込んでいた談子も安眠に励まされ、面を上げる。

確かに、鬼はその場から動こうとしない。遠目にも、何だか苦しそうに肩で息をしている様子が見て取れる。

それだけ、鬼外との戦闘は過酷なものだったのだろう。

何にしても、鬼はまだ、談子たちの存在に気付く気配もなく、気付いても追いかけてこれるほどの体力も持っていない。

逃げるなら、これほどのチャンスはないだろう。

そうだ、こんなところで滅入っている場合ではない。まだ方法がなくなったわけじゃないんだから、時間の許す限り、立ち止まってはいけない。フェンスを乗り越え、三人は裏庭を抜けて、校舎の裏側へと向かった。

十八. 避難所の職員室へ

裏庭は静まり返り、表の惨劇が嘘のようだ。

何事もないように立ち尽くす、双子の創始者の像。

思えば、この場所から、悲劇は生まれたのだ。彼らは未だ止めることなく、昔話を語り続けている。

そう、鬼の悲劇を題材とし、悪しきものとして表現する、昔ならでわの今昔話。

「なぜ、物語の鬼は、いつもいつも退治されてしまうのかのう」

綺羅姫に出会うまで、一度も考えたことなんてなかった。

あの素朴で、しかし寂しそうな童女の声が、台詞が、頭から消えない。

鬼は、特殊な力を持った人間によって退治されるものである。桃太郎にせよ一寸法師にせよ、鬼はいつも、人間の前に跪く。

でも、それはあくまで作り話だ。過去の産物として、後世に伝えるのもいいだろう、日本の歴史や文化を知る上では、欠かせない大事な文献なのだから。

だが、だからといって事実まで、そうである必要はない。

「じゃあ今度は、鬼がやられるオチのない話を考えてあげるよ」

綺羅姫に、そう約束した。鬼が出てきても、人間と対等に扱われるような、人間の持つ鬼の先入観を覆せるような、そんな話を作ってあげよう。

そう言ったのが、もう何年も昔のことのようだ。

実際のところ、本物の鬼というものを見て、その約束が守れそうにないと思った。

あんなおぞましい光景を見続け、たくさんの人たちが犠牲になっている現状を目の当たりにしてまで、鬼と人間を平等に見ることなどできない。

自分が捜し求めていた鬼とは、本当にあんなものだったのだろうか。結局、談子自身も、鬼という概念を持つにあたって、物語の中の、主人公にいと容易くやられてしまう弱い鬼しか思い浮かべることができていなかった。

それが覆され、鬼のことも、自分の気持ちさえも、よく分からなくなっていた。

「鬼が動いた気配はない。しばらくここで、身を隠しても良さそうだ」

周囲を偵察に行っていた、暁と安眠が戻ってきた。銅像の根元に腰を下ろして、項垂れている談子に歩み寄る。

「疲れたか？」

「ん？ ううん、平気だけど」

そう応えたものの、体中からは疲れがじわじわと染み出していたかもしれない。体力的にも、身体的にも、どこか歯止めがかかったように元気が出ない。

目の前に、小さな紙パックが差し出された。烏龍茶だ。少し驚いて顔を上げる。

「調達してきた。これでも飲んで、少し休憩してろ」

「ありがと」

「後で金返せよ」

「八十円くらい、いいじゃんよ。奢って」

「嫌だね」

ケチにドが付くほど、金にがめつい奴だ。

烏龍茶を受け取り、ストローを刺して中身を吸い込む。苦味があるが、渴いた咽を潤すには最高だった。

火照っていた頭が少し冷やされ、落ち着いてくる。ふと、頭によぎった疑問を、談子は暁にぶつけてみた。

「ねえ、暁は何で、生徒会に入って、鬼と戦ってるの？」

隣に腰を下ろして烏龍茶を飲んでいた暁は、横目に談子を見た。それから暫らく考え込むような態度を見せ、暫らくして重々しく口を開いた。

「俺の生家――春眠家は、中国に拠点を置いた、代々続くキョンシー使いの一族だ。何百年も前の先祖が、旅の途中にこの地へ立ち寄った時、事故に巻き込まれて死にそうになっていたところを、この銅像の二人に助けられた。その恩に報いるため、この地の人間たちが頭を抱えていた鬼の問題を共に解決しようと、堅い約束を交わした。その誓いが、今でも引き継がれている。だからキョンシー使いとなった春眠家の人間は、継続してこの地へやって来て、鬼の封印が発かれた際に無条件に力を貸す、という風習が、今でも続いている」

「……そっか、みんな色々大変なんだね」

そんな大昔のしきたりに今も縛られている。という事実に対して、暁は何の疑問もないようだ。

それが当然であり、かつそれを完璧に遂行することが、自分と言う存在を認めてもらえるための証明だと信じてているのだろう。さっきだって、失敗した安眠をあんなに激しく責め立てたのには、そういう理由があったのだ。

それを言うならば、他の生徒会役員たちだって、きっと同じような目的を胸に秘めて活動を行っているような気がしてならない。談子も少なからず経験があるが、今生徒会に集まっているような、鬼を封印するのに役立てそうな能力と言うのは、一般社会の中では異端そのもので、中には恐れられたり、激しく批判され、迫害されるものもあるのではないだろうか。

それこそ、鬼という存在と、同じように。

彼らが普通の人間として認められるためには、自分が人間にとって無害であること、その力が人間の平穏を保つために有効であるということを証明しなくてはならない。そのために、彼らは鬼の封印を監視し続けているように、談子は感じるのだった。

今、思い返せば、昔話で鬼を退治した主人公たちも、みんな異能の持ち主であった。桃太郎は桃から生まれたし、人並みはずれた強靱な力を持っていたし、一寸法師はその小さな体型を克服し、普通の人間になるために鬼退治へ挑んだ。

今も昔も変わらない、その理。多くの異能者たちは、鬼を倒すことで普通の人間として暮らす権利を得られた。

だとすれば、鬼はそのために利用されているようなものではないか。

なら、鬼という名の異能力を秘めた人間は、どうやってその存在を認めてもらえばよいのだ

ろう。

綺羅姫は、どうすれば普通の人間として、扱ってもらえるのだろう。

今、しつこく考えたところで、その答は浮かんでこない。

でも、考え続けなければ。誰かがその現実を認め、出ない答を悩み続けなければ、綺羅姫はいつまでたっても、独りぼっちな鬼のままだ。

思考に一区切りつけて、息を吐く。隣では、安眠が暁にもたれかかって、ぐうぐうと寝息を立てている。キョンシーに疲れがあるかは分からないが、休息をとるなら今ほどの時はないだろう。その姿を見ていると、緊張していた気持ちも少し和らいだ。

暫らくそっとしてあげたいところだが、突如、談子の携帯の着信音が辺りに響きわたる。

コケコッコー！

「お、電話」

ポケットから携帯を取り出す。ふと前を見ると、凄まじい形相でこちらを睨む暁が、慌てた様子で安眠の両耳を強く塞いでいる。

「ん？ どうかした？」

「変な着信音の設定してんじゃねえよ！」

突然怒鳴られ、訳が分からず、談子は膨れる。

「何さ、別に何にしてたって、いいじゃん」

「いいから、早く切るなり出るなりしろ！」

「何なのよ……」

傍でギャーギャーわめく暁を無視し、しつこく鳴き続けるニワトリ着メロを聞きながら、表示を見る。着信は由喜からだ。

「もしもしー、由喜ちゃん？」

のんびりと対話に応じる。それとは正反対に、回線の向こうの由喜の声は、とても焦っているようだった。

『談子ちゃん!? 今どこにいるの、無事?』

「今? 学校の裏庭だよ。無事って、どういうこと？」

とりあえず無事なことを確認すると、由喜は安堵の息を漏らした。そして、不思議そうにしている談子に、細かい説明を始める。

『よかったー。グラウンドを、暁くんや談子ちゃんが走ってるのが見えて、そしたら急に校舎の窓ガラスが割れてさ。プールのほうで、すごい爆発みたいなのが起ったりしたから、巻き込まれたんじゃないかって、心配してたんだよ』

「あたしは怪我ないけど……。ってことは、由喜ちゃん、学校にいるの？」

『うん。バレ一部の体験入部で、ちょっとね。今、職員室なんだけど、お昼頃から急に閉じ込められちゃって』

「一人？」

『ううん。バレ一部の先輩とか、あと瀬見先生。教頭先生とかもいるんだけど、気を失ってるみたいで全然動かないの』

「職員室だよな？ 待ってて、今からそっち行く！」

返事を聞き、電話を切った。

「職員室！ そこに由喜ちゃんたちがいるんだって。今度こそ、あたしたちも行って合流しよう。先生とかもいるみたいだし、なにかいい案を出してくれる人がいるかも！」

「……さっきから言っているが、職員室がどこにあるのか、分かってるのか？」

「……………」

暁的的確な突っ込みに、談子は現実を直視して頭を抱えた。しかしすぐに新たな考えを思いつき、元の表情に戻る。

「由喜ちゃんは、あたしたちがグラウンドを走ってる姿を見たって言ってた。だから、グラウンドに面した教室のどこかだよ」

「ほとんどの教室が面してるだろう」

「ぐぬう……それなら！」

談子は再び携帯を取り出し、由喜にダイヤルした。

「もしもし由喜ちゃん？ 今からあたしたち、グラウンドに行くから、姿が見えたら、教室の窓から大きく手を振って。お願い、じゃあね」

素早く切断し、勢いよく通路を指差す。

「これでよし！ さあ二人とも、グラウンドに行くわよ」

「随分と強引だな」

「何でもいいから行くの！」

「何でもいいが、着メロは他のに変えとけ」

「だから何で」

「何でもでもだ。次鳴った時に変わってなかったら、勝手に渡る世間は禿ばかりのテーマソング入れてやるからな」

「やめてよ、恥かしいから！」

なんて言い合いしながらも駆けだし、いざグラウンドへ。

▲□▲□▲

元来た道を辿ると、鬼と鉢合わせする可能性があったので、校舎の隙間を縫うように細い通路を辿り、陽のあたる校庭へと出た。

徐々に傾きつつある太陽に、少し焦りを覚える。日暮れとまでは行かないが、かなり薄暗くなってきている。

鬼と鬼外の激しい戦いが繰り広げられたであろう、グラウンドの惨状は物凄かった。

辺りに散らばるガラスの破片、大きく抉れた地面。

いったい、どのような激闘を行えば、こんな有様になるのか。

「すさまじいな……」

「本当に」

「ぐう」

後片付けが大変そうだ。そんなことを呆然と考えていると、頭上から声が。

「おーい、談子ちゃん、暁くん！」

由喜の声だ。見上げると、ガラスが粉々に砕け散っている三階の窓のすぐ真下の教室から、由喜と数人の生徒が顔を出していた。あそこが職員室のようだ。

「由喜ちゃん！ いまからそっち行くねー」

手を振ってくる友人に同じように振り返し、二階へ向かおうと、昇降口へ進み始めた。

その時。

由喜たちがざわめいた。

「な、何、あれ！」

その声に感化され、振り返ると、プールのある方角から、のっそりと黒い塊が歩いてくる。

「ちっ、動き出しやがったか」

「ど、どうしよう、早く上へ行かないと」

談子は慌てて駆け出す。こうしている間にも、鬼は迫ってくる。だが暁は冷静に周囲を見渡し、制止の声をかけた。

「校内に入ったら迷う。下手をしたら、鬼の思う壺だ」

「じゃあ、どうすんの？」

「安眠、窓の上へ跳べ！」

「ぐう！」

了解した安眠が、強く地面を蹴る。軽々と一階の窓の上にある、雨避けのコンクリート屋根に飛び乗った。

そこから更にバウンドし、二階の職員室の窓に手をかけて、飛び込む。突然の安眠の乱入に、由喜たちが驚いて、教室内で騒いでいる声が聞こえた。

「ええっ！ 跳ぶわけ？ ってか、あたしには無理だし、平民に雑技団みたいなことやらせないでよ！」

「お前に、そんな芸当ができるなんて期待してない」

それだけ言って、暁は談子の身体を勢いよく抱え上げる。

「うわっ、ちょ、また!？」

鬼外に投げ飛ばされた時のことを思い出し、衝撃に備えて身体を強張らせ、身構える。

「歯ァ食いしばれ！ 舌噛むぞ」

言った時には、暁は既に地面を蹴っていた。談子を抱えたまま、暁は勢いよく上へ飛びあがる。

その間、談子はずっと目を閉じていた。

地面が足に付き、全体的な安定感を感じる。目を開くと、既にそこは教室の中だった。

安眠が駆け寄ってくる。その向こう側には、遠巻きにこちらを見ている、数人のジャージ姿の生徒が。

その一人に向かって、談子は声をかけた。自然と表情も綻ぶ。

「由喜ちゃん！」

友人もまた、嬉し泣きしそうな表情でこちらへ駆けて来る。感動の再会を喜ぶべく、談子は両腕を広げた。

しかし涙の抱擁はさらりとスルーされ、由喜は暁の側へ真っ直ぐ駆け寄り、手を握った。

「暁くん！ 二階の窓から入ってくるなんてすごいわねー。大丈夫だった？ あっ、怪我してる！ 平気？ 痛くない？」

「……別に平気だけど」

色々と言い寄られて、言葉に詰まる暁。談子は背後から、由喜を思いっきり睨みつけた。

「何で無視すんの、由喜ちゃんのバカー！」

「あ、談子ちゃん。いたの？ 小さすぎて視界に入ってこなかったわ」

「ひどい！ あんな目の前にいたのにー。自分から電話してきていて、その待遇は何!？」

「冗談だってばほら、よしよし。無事でよかったわね」

ショックを受けて拗ねる談子の頭を、由喜は撫で撫でする。長年の付き合いからか、談子の手懐け方は誰よりも極めている。

「それより、いったい学校で、何が起こってるの？」

訊ねられるが、何を話せばよいのか談子は迷う。それ以前に、話していいものなのかも分からない。

ここにいるのは、偶然学校にいたために騒動に巻き込まれてしまった人たちばかりだ。余計なことを口走って、混乱や不安感を抱かせる必要はない。

こちらにアイコンタクトを送ってきている暁の瞳も、そう語っていた。同意して、あえて談子は嘘をついた。これも由喜のためなのだ。

「じ、実は校内でイノシシが暴れてて……」

談子のついた精一杯の嘘には、かなり無理があった。暁は呆れた表情で脱力しているし、由喜は不信感を露にして、思いっきり疑いの眼差しを向けてくる。

「談子ちゃん、イノシシが、あんなにバリバリ窓ガラス粉碎したり、グラウンド爆発させたり、プールで暴れたりできると思う？」

「さ、最近のイノシシは、進化してるから」

「談子ちゃん、私たち友達でしょ？ 私は談子ちゃんの口から、本当のことが聞きたいの、笑ったり怒ったりしないから言ってごらん？ 貶しはするかもしれないけど」

「前半、あれだけいいこと言っというて、なんで後半で、そうなるかな……」

兎にも角にも追い詰められ、対応に困っていると、救いの船が顔を出した。

「どうしたの？ 何か騒がしいけれど……。あら、月見さん？ それに春眠くんも。いったい、どこから……」

担任の時雨だ。助かったと、談子は話の筋をそちらへずらし、時雨にここへ来た経緯を簡単に話した。もちろん、鬼の話は抜きで。

「まあ、グラウンドからジャンプして？ 最近の高校生はイキがいいわねえ。でも賢明だったわ。職員室の扉、全く開かなくなっちゃってるから」

あまり驚いた様子もなく、どちらかという后感心したような口調で、時雨は話を聞いていた。そして、思い出したように暁に向き直る。

「そうだわ、春眠君は生徒会役員だったわね。少し話を聞きたいのだけれど、いいかしら？ 月見さんも、ちょっとこちらへ」

恐らく、今の現状について知っておきたいのだろう。先生なら、事情を全部話しても差し支えなさそうだし、鬼についてある程度のことは学校や生徒会から知らされていそうだと判断し、暁と談子はそれに応じて頷いた。

時雨に誘導され、職員室の奥にある応接室へ案内される。

「ごめんなさい、三人でお話がしたいの。みなさんは、ここで待っていてくださいね」

振り返ると、他の生徒達もぞろぞろと後をつけてきていた。事情を知りたいのは誰もが同じだ。だが、知らないほうがいいことだって、世の中にはたくさんある。

時雨のストップがかかり、バレー部員たちは不安げにも、しぶしぶ足を止めた。

「談子ちゃん……」

心配そうにこちらを見つめる由喜の姿が目に残り、談子も沈痛な面持ちになる。

「由喜ちゃん、ごめんね。後で、ちゃんと説明するから」

そう言い残し、二人の間を木製の扉が塞いだ。

十九. 最終手段

応接室の来客用のソファに座り、談子と暁は机を挟んで時雨と向き合った。時雨の後ろの床には、タオルが敷かれ、そこに年配の男性が横たわっている。

「あの、そちらにいるのって……」

気付いた談子の声に、時雨は頷いた。

「教頭先生。さっき、グラウンドで色々あったでしょう？ ここの窓からその一部始終を見ているときに、急に倒れられて。みんなには気絶しているだけって言ったけれど、あなたたちは分かっているのよね？」

息を呑む。ひょんなことから、鬼と目が合ってしまったのか。教頭先生も、鬼の犠牲者となったのだ。

「先生は、どれくらい鬼のことを？」

暁が訊ねる。時雨の理解度に応じて説明する内容も密度も大きく変わってくるからだ。

時雨は軽く息を吐き、知る限りのすべての知識を語り出した。

「自分では、どれくらい理解できているのか、正直、分からないわ。でも、この学校に赴任してきた時に、生徒会役員さんから簡単な話は聞いたし、鬼の特性も知っているつもりよ」

おそらく、初歩的な知識しかないのだろう。暁はそう解釈したようで、どの程度話すべきか思案し始めた。そして鬼が現れた経緯と、今までの被害状況を簡単に説明する。談子の話題も持ち出され、注目を浴びるたびに肩身が狭くなった。

「そう、もうそんなところまで……」

話を聞き終え、時雨は深い溜息をついた。事態のつかめない密室で、必死に生徒を宥め、励ましていた彼女自身、かなり憔悴しているようで、表情には普段は決して見せない疲れの色が濃く現れていた。

「では、この教室が最後の砦なのね」

「そうなります。こうなったら、逃げるよりも鬼に見つからないように、ここで息を潜めておくほうが、安全でしょう。見つからないことを祈るしか、俺たちにはできません」

悔しそうに、暁は顔を歪める。その間、談子は以前、時雨が見せた奇妙な言動を思い出していた。

それについて訊ねる。

「先生は、前に綺羅姫を見た時に、「夢じゃなかったのね」って言いましたよね？ あれって、どういう意味だったんですか？」

驚いた顔をした時雨は、しばらく無言だったが、すぐに困った笑顔を浮かべつつも、説明してくれた。

「聞かれちゃってたか。つい、口から零れ出ちゃったのよね。私が学生だった時にも、彼女を見たことがあって。数年前と全く変わっていない姿に、驚いてしまったのよ。――私が、この学校の卒業生だって、みんなに話したわよね？」

二人は頷く。入学式の日聞いた。彼女が授業を受け持つクラスの生徒なら、全員知っている

はずだ。

「私が在学していた頃にも一度だけ、鬼の封印が解けたことがあるの。その時は、ある一人の生徒の命を犠牲に、事態は収まったわ」

「その時のこと、詳しく聞かせてください」

暁は詰め寄る暁。何か、鬼に関する新しい情報が手に入るかもしれないと踏んだのだ。時雨は頷いて説明を続けた。

「あれは、私が二年生のとき。ちょうど、夏休み前のテスト期間中だったわ。試験は午前中で終わったけれど、私は調べものをしようと、友人と二人で図書室に残っていたの。途中で、外の様子が騒がしくなって、生徒会役員だったその友人に、非常事態の連絡が届いた。それが、鬼の封印が解けたという知らせだったのよ。学校から出られないことを知って、最初はできるだけ鬼に見つからなさそうな場所を探して、隠れようとしたわ。でも、校内の人たちが次々倒れていくうちに、だんだん怖くなってきたの。怯えている私に、友人は言ったわ。「図書室に、鬼を退ける方法が書かれた書物が隠されている。それさえ使えば、みんなは助かる」って。そして彼女は、一人で図書室へ戻っていった。私は体育倉庫の一番奥で、一人震えていたの。数時間して日が暮れ、鬼は自然と封印の中へ戻って行ったようだったわ。魂を抜き取られていた人たちもみんな息を吹き返して、他の生徒会役員の処置によって被害者たちの記憶が操作され、何事もなかったように騒ぎは収まったの。……ただ一人の犠牲者を除いて」

「その犠牲者が、先生のお友達……？」

「そう。私も、その後はずっと混乱していて、夢でも見ていたんじゃないかって思ってた。鬼なんていなかった、友人も、事故で死んだんだって、必死で自分を納得させようとして。でも、この学校に赴任して、鬼の話聞くに当たって、曖昧だった記憶がはっきりしてきてね。色々と思い出してしまったのよ」

囁くように、時雨は説明する。思い出したくない、嫌な思い出だったはずだ。できれば心の奥底に閉じ込めておきたかったに違いない。

それをわざわざ教えてくれたということは、今回の件に役立てそうな情報だと思ったのだろう。

「その図書室にあるという本は、どのようなものなんですか？」

「私にもよく分からなくて。ただ、鬼が日没まで消えなかったところを見ると、私の友人は、その本を使用するのに失敗したのでしょうか」

「ただ先生を安心させるために言った気休めって線は？」

「春眠君は、勘がいいわね。私も、ひょっとして、って同じことを考えたの。でもね、鬼が消えてから一番に図書室に向かったのは、私なのよ。中に入ると、図書室の床やら壁やら一面に、奇妙な凡字や紋様が描かれていて。……そう、まるで、ファンタジーに出てくる魔法陣のようだったわ。その中心で、彼女は息絶えていたの。その手には、「呪い定めの手紙」と書かれた古書が、しっかりと抱かれていたわ。そういった、鬼を封じるために有力な本が、実在していたのは事実よ」

「じゃあ、やっぱり失敗しちゃったってことですかね？」

「そうなのでしょうね」

「中身は？ 確認しなかったんですか？」

「開いてみたわ。でもそれはとても古い言葉で書かれていて、私には読めなかったの」

「その人には読めたの？」

「生徒会に任命されるような人間だ、おそらく、そういった能力を持っていたんだろう」

「――あれから数年。彼女の死が、今も私の中で引っ掛かっていてね。どうして彼女が死ななくてはならなかったのか。あの時、いったい何が起こったのか。それを確かめるために、私は古語を学んで教師の資格を取り、ここへ戻ってきたの。これからその本を探して、少しずつ解読していこうと思っていたの。けど、急すぎて何もできなかったわね」

残念そうに、時雨は肩を落とす。ふと、談子はあることを思い出し、あっと声を上げた。

「今、イナホ先輩が図書室にいる！」

「イナホって、生徒会書記の、秋田さんのこと？」

「はい！ 鬼から、あたしを助けてくれて、その後、図書室へ行くって言って別れたんです。鬼を倒す方法が、もう少しで見つかるかもしれないって」

「おそらく、その「呪い定め書」とやらのことだな」

「あたし、図書室に行ってきます！ 本が見つかったかも気になるし、イナホ先輩一人じゃ、危ないから」

談子は勇んで立ち上がる。しかし、暁によって冷静に制止された。

「図書室の場所も、分からないんじゃないのか？ それに鬼が彷徨っている、危険だ。お前はここにいる、俺が代わりに行く」

たしかに、暁なら鬼と遭遇しても死ぬことはないだろうし、足も速いから、撒くこともできるだろう。だが、道が分からないという点では同じだ。談子は役目を譲ろうとしなかった。

「ううん、暁はここにいて。もしここが鬼に襲われたら、元も子もないでしょ？ あたしには絶対太刀打ちできないし。大丈夫、必ず図書室見つけて、イナホ先輩を連れて戻ってくるから」

強引に言い聞かせ、談子は外に出る。

職員室の扉は、何らかの力が作用しているのか、押しても引いても開かない。まあ開いていればみんないつまでもこんなところにはいないだろうが。仕方なく再び窓から這い出て、雨水排水用のパイプを伝って隣の教室へ飛び移る。途中、由喜や安眠に止められるが、なんとか説得してその場を乗りきった。今は窓枠から、談子の危なっかしい動きをハラハラしながら見守っている。

職員室の隣は地学室になっていた。大きな地図や岩石の欠片がショーケースにたくさん展示されている。この教室の扉は内側から簡単に開けられたので、そこから廊下に出た。鬼がいないか慎重に周囲を確認しながらだ。

とりあえず鬼の姿は見当たらない。少し安心して廊下を歩き出した。しかし強がって出てきたものの、やはり図書室がどこにあるかは分からない。このまま戻っても呆れられそうだし、かと言って無闇に彷徨いいても、鬼に見つかってしまう。

確実に図書室まで行く方法はないものか。腕を組んで唸りながら考える。

ふと、胸元に硬いものがある感触がした。制服の内ポケットをまさぐると、体育館で拾ったお手軽ナビが出てきた。そのままくすねて持ってきていたのを忘れていたのだ。

これは校舎の配列をめちゃくちゃにした、みかんが作ったものだし、ナビというくらいだから、校内の見取り図でも搭載されているかも知れないと思い、電源を入れてみた。

『ヘーイ！ お手軽ナビ検索画面へようこそ！ ここに行きたい場所名を入力すると、そこまできっちり案内するよ』

お手軽ナビが言った。

ちゃんとあるじゃん！

喜んだ談子はカーソルを合わせて、矢印キーを動かして文字を選択していく。「としょしつ」と入力した。

『OK！ 受信完了、あとは目的地へ向けて、全速力で走ってくれ！』

「走れ？ ってまさか……」

ナビの電源が、自動で切れてしまう。走るというところから、嫌な予感が連想されてきた。

静まり返った廊下に、何やら大量の足音が響き渡る。それらは、だんだん、こちらへ近付いてきていた。

同時に、奇怪な声も聞こえてくる。

「迷わないでー」

「迷わないでー」

「やっぱり、こうなるの!？」

嫌な予感が的中する。廊下の彼方から凄まじい勢いでやってくる、ゾンビ、ゾンビ、またゾンビ。

それを視界に入れた瞬間、談子は一目散に逃げ出していた。

本物ではないと頭では分かっているものの、気持ち悪くて怖いことには変わらない。どんなに拒絶反応を示しても、お構いなしにゾンビたちは追いかけてくる。

「もーやだー、こんな方法しかないのー？」

「迷わないでー」

「迷わないでー」

「タコ食いなはれ！」

「一匹、関西出身がいる!？」

半泣きになりながら廊下を逃走する談子。無我夢中で走り続け、ゾンビの姿は次第に消えてなくなっていく。

やがて、ゾンビが追いかけてこなくなったことに気づき、疲れて足を止めると、目の前には図書室の入り口があった。

二十．図書室の悲劇

こんな私を見たら、あなたは何と言うかしら？ 笑顔を期待しているわけではないけれど、軽蔑されることも覚悟しているけれど。

せめて、怒って欲しい。愚かな私を、叱って欲しい。でも、あなたが全てだった私から、あなたを奪ってしまえば、この世界なんてどうでもよくなってしまうの。

あなたがいない世界で、これ以上生きていくなんて、耐えられそうもない。

誰にでも優しいあなたが、大好きだった。

時には、あなたに優しくされる、私以外の誰かを見ると嫉妬に染まることもあった。

でも、それがあなたの意志だから、あなたそのものだから、許すことができた。

でも、どれだけ望んでも、あなたはもう、この世には存在しない。

自分が犠牲になって、他の人たちを救うと言え、とても響きのよい話に聞こえるけど、結局私は自殺しようとしているだけ。あなたに会うために、そちらへ行こうとしているだけ。

もし、私がそっちへ行けたなら。

もう一度、あなたに会えたなら、愚かな私を叱ってください。花人さん。

それ以外は、何も望みません。

▲□▲□▲

不思議な凡字や、紋様で彩られた、白い魔法陣。

昔、時雨が見たというのも、こんな感じの奇怪な光景だったのだろうか。

図書館の扉を開き、隙間から中を覗きこめば、異世界に迷い込んだような感覚に囚われる。締め切られたカーテンのせいで、室内はとにかく暗く、普段見慣れたその場所とは、全く異なった空気を醸し出していた。

受付のある中央付近は、円形に開けた空間になっていて、そこが魔法陣の中心となっている。

カウンターの上に置かれた数本の蠟燭だけが、唯一の光源だ。

「何か、御用かしら？」

淡々とした、静かな声がした。

談子が扉を全開にし、室内へ踏み込む。

目の前には魔法陣の中央に立ち、片手に持った大きく分厚い本を開いて目を通す、美しい女子生徒の姿が。

「イナホ先輩」

彼女に向かって、談子はその名を呼ぶ。その声で、来訪者が誰だか理解したらしく、イナホは初めて面を上げた。

「月見さん。どうしたの。こんなところまでやってくるなんて」

「先輩が、図書室に行くって言っていたから、様子を見に」

談子はイナホに、みかんや蛇羅、鬼外がやられたことを報告した。そして先程の時雨との会話から情報を得て、ここまでやって来たことを説明する。それを最後まで黙って耳に入れていたイナホだったが、間があくとともに、物静かに口を開いた。

「そう、そんなことまで知っている先生がいたの。……これが、あなたたちの話していた「呪い定め

の書」よ」
隠し事がばれた子供のように、観念して肩を竦めて見せる。イナホは手に持っている、その本を翳して見せた。

「それを使えば、鬼を退治することができるんですよね？」

談子の目が期待に輝く。時雨の友人は、これを使っている途中に鬼にやられてしまったらしいが、イナホは今まさに、本に書かれた^{まじな}呪いのようなものを実行しようとしている。これが完成すれば、きっとみんな助かるに違いない。鬼も消え、綺羅姫も救われる。談子はそう信じていた。

「この本を初めて見つけたのは、今から二年前。呪文や古代文字を自在に読み取る能力を持って生徒会に所属した私は、この本の中身を解読したわ。そして、その時にはもう気付いていたの。この本に、鬼を封じる力も、打ち倒す方法も記されていないことをね」

「え、それって……」

予想外の返答に、談子は言葉を詰まらせる。

「じゃあ、なぜその本を使って、儀式みたいなことをしているんですか？ 鬼が倒せないのなら、こんなことしていても、無意味じゃありませんか」

「あなたにとっては、そうかもしれないわね。でも、私にはとても重要な書物なの。この儀式も、決して無駄ではない。――この「呪い定め

の書」はね、最終的にタイムオーバーとなり、鬼が封印の中に帰って行った時、道連れにされる魂を、術の発動者に固定するためのものなの」

「……どういことですか？」
「つまり、この本に書かれた儀式を実行した人が、鬼に魂を抜き取られ、さらに全滅を免れて鬼の封印がタイムオーバーを迎えた場合に限り、鬼は強制的に儀式の実行人の魂を連れて行くことになるの。要するに、ルール崩しね。これを発動しておけば、他の魂を抜かれた人たちは、確実に助かることができるわ」

「でもそれって……、イナホ先輩の命を、犠牲にするってことでしょうか？」

イナホは、静かに微笑む。表情を歪めた談子は、彼女に駆け寄り、本を奪い取ろうとした。しかし本は、イナホの手に張り付いているかのように、全く動かない。

「やめてください、そんなの駄目です！ きっと、みんなが助かるような方法があるはずだから、一緒に考えましょう！」

「あなたの力を以って、鬼を封じる方法は見つかった？」

「そ、それは……」

口ごもる。実際、今までいろんな人を犠牲にしてまで逃げてきたにも拘らず、結局そんな方法を見つけることはできずにいた。

それを全て見通していたかのような笑顔で、イナホは談子の肩に、自由に動く側の手を置いた

。「ごめんなさい。あなたを信用していると言った手前、あまり期待はしていなかったの。だって、ないんだもの。今まで必死で探してきたけれど、そんな方法が記された書物は、一冊だってありはしなかった。結局、鬼を鎮めるには、絶対に生贄が必要なのよ」

「だからって、それがイナホ先輩である必要なんてないでしょう!？」

「でも、それ以外の誰かである必要もないわ。これは、私がずっと心に誓ってきたことなの。もし今度、鬼に対峙する機会が与えられたならば、必ず実行しよう」と

イナホは談子を言い宥め、ゆっくり話を続けた。

「二年前にも、この学校で鬼が暴れたことは知っているわね？ その時に魂を持って行かれた夏祭花人という人は、私の恋人だったの。彼は、私が教えた、この呪い定め術を使って、自らの魂を鬼の元に固定してしまったのよ。……最後まで生き残っていたのは、私一人で、横たわる彼の側で、ずっと震えていたわ。日没が訪れ、鬼の封印が再発動してからも目覚めない彼を見て、私は後悔した。鬼を憎んだ。彼の命を奪った鬼が、鬼をその内に湛えた綺羅姫が許せなくて仕方がなかった。でも、どんなにあがいても、結局、私にはどうすることもできない。あの時も、これからもね。そう悟った時、私は決めたの。せめて私の目が届くうちは、私の手で犠牲者をなくせるようにしよう。本当に憎まなきゃいけないのは、鬼でも綺羅姫でもなく、あの人に死を選ばせた、私自身だったんだって」

「そんなのおかしいです！ 別に鬼が現れたのだって、その人が死んでしまったのだって、イナホ先輩のせいじゃないでしょう？ 先輩が負い目や責任を感じることもなんてないですよ。逃げましょう、一緒に逃げて、他の方法を考え直しましょう」

イナホの腕を取り、無理矢理にでも引っ張っていこうとする。

こんな間違っている。生贄なんて、絶対に必要ないのだ。

「もう、無理なのよ。私は術の中に入ってしまったから」

イナホは、その場から動かない。彼女の足元を見ると、大量の文字の群れが巻きついていて。文字たちは、足から伝ってどんどん上昇し、イナホの身体を埋め尽くしてゆく。腕に到達した文字列が、不要物を排除するように、談子の手を弾き飛ばした。

「陣から出なさい。その本棚の側の床に、抜け穴があるの。そこから逃げられるわ。文字たちが鬼を呼んでいる、もうじきここへ、鬼がやって来る。逃げて。春眠くんたちと、必ず生き残って」

「い、嫌です、そんなの、そんなの……」

一心不乱に首を振る談子に、イナホは笑いかけた。今までに見たことのない、満たされた、優しい笑顔だった。

「お願い、あの人のところへ、逝きたいの。私の犠牲で皆が助かるなら、それで私は満足だから」

直後。図書室のドアが勢いよく剥がしとられ、激しい咆哮の嵐が吹き荒れた。

「早く行くのよ！」

イナホに突き飛ばされ、談子は背後にあった本棚に背中をぶつける。足元の床が、談子の重さ

で下がり、足場がなくなる。視界が落ち、暗闇の中に吸い込まれた。

「イナホ先輩！ 嫌だ、先輩!!」

最後に見た光景。

入り口に立ち尽くす鬼、それを視線を通い合わせ、体勢を崩したイナホの姿。

その光景は、目蓋の裏へ鮮明に焼きつき、目を閉じても決して消えなかった。

どこをどう落ちてきたのか。

明るい場所に出て、床にぶつかる。

出口はどこかの天井だったらしく、真っ逆さまに落下した。

叩きつけられた身体に痛みが走り、その場に俯せに横たわる。

身体より、心のほうが痛いと感じた。

「一一月見さん!？」

驚きを含んだ、しかし柔らかな声が耳を翳め、朦朧としていた意識が、徐々に戻ってくる。

「どうしたの、何があったの？」

声の主は、慌てて談子の身体を起こす。視界もはっきりしてきた。

目の前に、談子の顔を覗き込む時雨と暁の姿が。ここは接客室のようだ。図書室は、職員室の真上にあっただらしい。

暁が談子の落ちてきた天井を見上げる。今は既に天井は閉じていたが、そこだけ他の天井と色が違うので、からくりは分かったといった様子で頷いていた。

「隠し扉か。で、秋田には会えたのか？」

その何の悪ぶれもない単調な問いかけが、今の談子にとてつもない苦痛を伴わせた。瞬きすれば浮かんでくる、数瞬前の光景。

談子の目尻が熱くなる。堰を切ったように大粒の涙が溢れ出し、顔を濡らして行く。

「って、おい、ちょ.....」

突然泣き始めた談子に驚き、言葉を詰まらせる暁。時雨が背中を撫でて、宥めようとする。

「月見さん、落ち着いて。ゆっくりでいいから、何があったのか教えて」

「先輩がっ.....、い、イナホ、先輩が.....」

それが精一杯だ。時雨にしがみついて、談子は大声で泣きじゃくる。そうすることでしか、胸のうちの明かすことはできなかった。ただ込み上げてくるいろんなものを、出るがままに吐き出すしかない。

時雨と暁が、困惑したように顔を見合わせていた。そして最悪の事態を想定し、理解したらしく、互いに頷き合う。

「辛い思いをしたのね。もう大丈夫よ、ここにはみんないるからね。安心して」

時雨に頭を優しく撫でられ、少しずつ落ち着きを取り戻す。嗚咽はしばらく続いたが、途切れ途切れに、ゆっくりと自分が見たことを説明した。

思い出すたびに、止まったはずの涙が溢れてきたが、それでも最後まで諦めず、全てを伝えきった。

「そう.....。「呪い定めの手紙」は、そういう用途で使われるものだったのね」

話を聞き、時雨は肩を落とす。それによって、友人の意図がはっきりと理解できたようだ。彼女の友人は、儀式に失敗したのではない。成功したからこそ、目覚めなかったのだ。

そして、今度はイナホが。

陽が落ちれば、図書室に横たわる、イナホの死体だけが発見されるだろう。それを思うと、息が詰まり、また涙が流れる。ハンカチが濡れ過ぎて、使い物にならないくらいだ。

暁が、無言で自分のハンカチを差し出してきた。それを無言で受け取り、鼻をかむ。今度は後で返せとは言わなかった。

「月見さん。私の友人も、そして秋田さんも、私たちを助けようとして書を使ったのね」

「でも、どうしてそこまでして……。どうして先輩や、先生のお友達が、死ななきゃいけなかったんですか」

「分からない？」

「分かりません！」

半ば八つ当たり気味に声を張り上げる談子に、時雨は優しく語りかける。

「私は、何となく分かった気がするわ。「呪い定め」は、誰にでも使える書物ではないでしょう？ なら、それを使える自分が何とかしなくちゃって、彼女たちは同じように考えたのでしょうね。それを使って、自分に何かできるならって」

「で、でも、だからって……」

無理に使う必要なんてなかったはずだ。使ったからと言って、事態が良い方向へ流れるわけでもない。結局、同じことが繰り返されるだけなのだ。

「私、思うんだけどね。あの儀式を行うには、物凄く勇気がいるし、とてもリスクが大きいわ。全滅してしまえば元も子もないわけだし、何より死ぬ覚悟なんて、常人には絶対できっこないもの。でもね、私たちが必ず生き残ってくれる、そう強く信じてくれたから、彼女たちは少しでも不安を払拭し、それが実行できたのだと思うの。秋田さんだって、月見さんならきっと生き残って、他のみんなを生き返らせてくれる。そう信じたからこそ、犠牲になろうと決めたのよ」

時雨の表情が厳しく、そして強くなる。

「だから、託された私たちは、なんとしても生き抜くの。できれば、私だって誰の犠牲もなく済めばいいと思うけれど、これ以上はどうすることもできないから。最小限の犠牲に留めることを考えるので、精一杯」

辛そうな時雨の表情を見て、談子は思う。

先生だって、悔しいんだ。友達の仇だって、とりたいと思っているだろうし、何より教師として教え子を救えない気持ちは、とても痛みを伴うものかもしれない。どうにもできなくて、ただ流れに乗って進むがままに行くことしかできない自分自身に、もどかしさを感じているのだ。

談子と、同じじゃないか。

いや、談子以上に、時雨先生は苦しんでいる。そう思うと、いつまでもメソメソしている自分が恥ずかしく思えてきた。

「……そうですよね、先輩の気持ちを無駄にしないように、今できることをやっていかなきゃ、ですね」

まだ目尻に溜まる涙を拭い、頑張っって笑顔を見せる。それを見た時雨も、少し笑顔を取り戻した。頭では、まだ完全に納得できていないが、いつかきっと、理解できる時が来るだろうと、考えることにした。

「下の階にも、降りられる抜け穴がある。いざって時は、ここから逃げればいいな」

話に区切りがついたのを見計らって、暁が割って入り、話題を変えた。

ちょうど、談子が落ちてきた天井のすぐ真下の床が、取り外せるようになっていた。開ければ下の階へ逃げられるようになっている。

「少しは、落ち着いたか？」

暁に訊ねられる。突然のことで、一瞬思考が止まったが、大きく頷いて見せた。

「そうか」

あっけなく納得して、またそっぽを向いてしまう。彼なりに心配してくれたのだろう。

相変わらず無愛想だが、その気持ちが何だか嬉しくて、自然と笑ってしまっていた。

そんな様子を見て、時雨もまた、柔らかな微笑を浮かべていた。

静かな時間。しかしそんな束の間の休息も、さほど長くは続かない。

「ぐうっ！　ぐううっ!!」

外にいた安眠が、接客室に飛び込んできた。物凄く焦っている様子が、はっきり伝わってくる。

「どうした、安眠……？」

暁が聞き返すと共に、ドアの向こう側で悲鳴が上がった。そして、何かが碎ける激しい音、威嚇するような聞き苦しい咆哮。

それが耳を掠めると、身体が大きく痙攣を起こした。まるで拒絶反応を起こしたかのように。

「今の声……。まさか、由喜ちゃん！」

「畜生、こんなところまで、鬼が……！」

談子と暁が立ち上がり、隣の部屋へ向かおうとした。

「駄目よ、止まりなさい！」

しかし、時雨によって制止される。すかさず彼女は、壁に立てかけてあった箒を握り締め、ドアを塞ぐ。

「危険な場所に、わざわざ出向くことはないわ。あなたたちは、その抜け穴から逃げて。ここは私が引き止めますから」

「でも、まだ無事な人を避難させないと」

確かに、駆けつけたところで何もできないだろう。しかし助かるかもしれない人たちを見捨てていくなんて、残酷すぎる。

「そんなことをしていたら、鬼に追いつかれるわ。それで全滅したら、秋田さんに示しがつかなくなるわよ」

談子は何とか説得しようとする。だが、時雨も頑固だ。その場を離れようとしなない。

「必ず生き残って。みんなの命、あなたたちに託すわ。信じてるからね」

ドアが勢いよく閉まる。扉の向こうへ飛び出していった時雨の姿が見えなくなっても、悲痛な叫び声や何かが壊される音が絶え間なく響いてくる。

談子の心が追い詰められていく。それに従って、耳が研ぎ澄まされる。物語りの智慧が、談子に声を送ってくる。

人間だけでなく、鬼に破壊され、見る影もなくなったであろう机や、棚の断末魔の叫びまでもが、頭に入り込んできて、思わず頭を押さえて蹲る。

「おい、しっかりしろ！」

暁と安眠に宥められ、なんとか吐くのはこらえる。しかし胸焼けのような気持ち悪さは治まらない。

「とりあえず、逃げるぞ。先生の言う通り、全員やられたら、元も子もない。恐らく、生き残っている魂を持った、人間はお前だけだ」

暁に腕を引っ張られ、何とか立ち上がる。

その頃には、扉の向こうが静まり返っていた。

みんな、やられてしまった？

由喜ちゃんも、時雨先生も、他の生徒達も。

みんなが苦しんで、魂を抜き取られていっているのに、あたしだけ逃げてばかりでいいの？

無駄だと分かっているけど、これ以上逃げるのは嫌だ。暁の手を振り払い、談子は駆け出した。制止も聞かず、ドアを押し開く。

その向こう側の空間は、まさに地獄絵図。凄まじいまでに破壊された職員机たち。その上に倒れていたり、壁に叩きつけられて絶命している、たくさんの人間。

今度は、視覚からの情報が、嘔吐感を誘発させる。

足元では、時雨が物言わず横たわっていた。優しげな笑顔も、今は恐怖に怯えたような、歪んだ顔のまま、時間が止まっている。

その向こうに、鬼がいた。壊れた机たちを掻き分けながら、何をすることもなく彷徨っている。

「……どうして、こんなことするの。どうして、みんながこんな目に遭わないといけないの？」

先輩達も、親友も、先生たちも。

綺羅姫も。

お前さえいなければ、誰も苦しまなくて済んだのに！

談子の中に怒りが込み上げる。許せない、鬼が許せない。絶対、許さない。

鬼と話ができれば、仲良くなれたら。そんな初々しかった時の気持ちは、完全にどこかへ消えてしまっていた。今はただ、全てを奪っていく鬼が憎い。

憎くてたまらない。

「うわあああああ！」

時雨の側に落ちていた箒を拾い、談子は鬼へ向かって突進する。机を踏み越え、高くジャンプし、鬼めがけて箒を垂直に振りかざす。

直撃した。鬼の顔面に箒の柄が直撃し、箒はへし折れる。鬼も少し怯んだように頭を下げるが、悲鳴一つ上げず、ダメージを受けた素振りは見せない。

鬼は顔を上げた。垂れた目蓋の下から除く、黒い大きな瞳が談子を睨めつける。その瞳の奥が見えた。仄暗い世界が一気に広がり、談子を飲み込もうと襲い掛かってくる。

身体の体温が奪われてゆく。頭に上った血が一気に冷え下り、徐々に冷静さが戻ってくる。

そうやって初めて、自分の行いの愚かさに気付き、後悔が身体中を電流のように駆け巡った。

イナホの期待を、裏切ってしまった。また綺羅姫に、重い枷を背負わせてしまう。

全てを、元に戻さなければならなかったのに、全てをぶち壊してしまった。

あたしは、なんて愚かなんだろう。

暗い、暗黒の底のような冷たい水晶に、だんだん吸い込まれていく感覚に、体が少し重く感じた。魂はマイナスの質量を持っていて、死んだ人は生前より若干、体重が重くなるらしい。

絶体絶命の時なのに、そんなことを冷静に考えている自分が、なんだかおかしい。

蛇羅の言った言葉の意味が、何となく分かった。本当に何も感じない。空気の暖かさも、冷たさも、触れるものなんて何もない。

でも、怖いとは思わない。むしろそれが自然すぎて、違和感がなさ過ぎて、妙にしっくりきた。

本当に、無とは、こういうことなのだ。だんだん世界が遠くなる。

ずっと遠くで、自分を呼ぶ声を談子は聞いた気がした。ものすごく聞き慣れた声。

嫌味が多くて、ひねくれているけれど、時には真面目になったり、頼りにも感じられる、そんな人間の声。

でも、きっと気のせいだ。

こんな身勝手なことばかりする人間に構っている余裕なんて、あいつには、ないはずだろうし。

▲□▲□▲

地獄という比喩が相応しい、凄まじい惨状の職員室。

暁が飛び込んだ時には、もう手遅れだった。鬼と対峙し、向かい合う少女——月見談子。

その身体が、静かに崩れていく。

「お前が死んだら、誰が鬼を封印するんだ。全滅しちゃったら、元も子もないだろう！」

必死で呼びかける。しかし、それに反応する素振りには、返ってこない。

「死ぬな月見！ 死ぬな!!」

大声で怒鳴る。だがそれも虚しく、願いは届かず。談子の身体が、壊れた机の残骸の上に落ち、横たわる。視界が開け、鬼の姿がよく見える。額と髪の付け根に、赤い痣ができていた。談子が最後のチャンスにかけて攻撃した跡だろう。そこから、顔面に向かって小さな罅が入っていたように見える。遠目で、確認は取れなかった。そうする前に、鬼は小さな、悲しげな唸り声を上げ、教室の扉を蹴破って、出て行ってしまったのだ。

一瞬、鬼の横顔に、光沢のある液体の筋が垂れていたように感じた。

涙か？

そうなのかもしれないが、気のせいかもしれない。

だが、そんなことは、この際、どうでもいい。

終わってしまった。結界内の人間が、全滅してしまった。すぐにでも鬼の封印は、すべての魂のエネルギーを以って、再度封印されるだろう。

だが、もう誰も、甦りはしない。

「俺が、もっと強ければ……」

「ぐうう……」

暁は地面に膝をつき、脱力した。

二十二. ……したはずが。

生気を感じられない、閑散とした部屋。

辺りには人形のように横たわる、魂を失った人間達が複数人。

暁は、冷たい壁に背を当てて、座り込んでいる。無言で呆然と、天井を見上げていた。

その右手には、白い、一回り小さな手が握られていた。手首から腕へと視線を向けていくと、静かに横たわる、一人の少女の顔が。その媒体からは魂が抜け落ち、血の気を失って青白くなった肌が、いっそう寂涼感を強調している。

「ぐうう……」

少女の反対側の手を握り締める、さらに一回り小さな両手。安眠は不安と必死に戦いながら、それでも談子が、さっきまでと変わらず笑いかけてくれるはずだと、信じているのだろう。

安眠は死んだ体を術によって動かしている、キョンシーだ。今の談子と、同じ色の肌をしている。死者として、尚も存在し続けるその身体に、苦痛はない。痛みを伴わない肉体は戦闘に適し、人間の持つ、不自由な生活の営みのほとんどを必要としない。味覚も、嗅覚もない。それが幸せであるのかどうかは、暁には分からない。

だが、魂はなくとも、心がある。その穢れを知らない幼い心は、きっと屍となり、キョンシーに成り果てた今でも、辛い思いをすれば、締め付けられるのだ。彼女が談子を見つめながら、悲愴な顔をするのが、何よりの証拠といえる。

「……それにしても、おかしい」

「ぐう？」

談子の顔を見ながら、暁は眉を顰めて疑問を漏らす。それに反応し、安眠は不思議そうな表情を向けてくる。何がおかしいのか、と問いかけるように。

「月見が死んだことで、校舎内の人間は、全て全滅したはずだ。なのに」

遠くから、今もなお聞こえてくる、鬼の咆哮。

この鬼捕獲用結界の中に存在する魂を、全て鬼に食われてしまえば、鬼は満足して封印の奥、すなわち綺羅姫の身体の中にある、地獄へと戻っていくはずだ。そして再び綺羅姫が、元の姿を取り戻す。それで終わりだ。

暁と安眠は、この領域内に魂を持たない。よって結界内では最初から除去された存在となり、幾つかある鬼の封印条件の対象には成りえない。

そのため、最後の一人となった談子の魂が食われた時点で、鬼はこの場から消滅しなければならなかったはずだ。

なのにどうして、鬼は変わらず、校内を彷徨い歩いている？

「ぐうぐう！」

訳が分からず唸っている主人に近寄り、安眠は暁のポケットから携帯電話を取り出した。

「ぐぐう」

「あ？ 何だと、兄貴に連絡しろだ？ 冗談じゃねえよ、いくら非常事態とはいえ、あいつの助言を受けるくらいなら、自分で考えたほうがマシな意見が出るってもんだ」

「ぐうぐ、ぐぐぐう！」

嫌がり拒む暁だが、今は駄々を捏ねている時ではない。安眠が必死で説得を試みってくる。もう、考えを纏める時間も残されていないのだから、鬼との対峙経験のある兄、春眠覚に話を聞くのが最短の解決法に違いない。少なからずとも、何かいい案をくれるはずだ、と安眠は言い切る。

何もしないよりマシだと、押しに押され、暁は物凄く嫌そうにしながらも、しゅしゅ携帯のメモリを探り始めた。そして兄の名を見つけ、ダイヤルする。

数十秒の呼び出し音の後、聞きなれた嫌な声が暁の鼓膜を震わせた。

『呼んだかい、僕の子猫ちゃん。僕の魅惑の美声が聞きたくなっただよよね、いいともいいとも、枕元で君が眠りにつくまで愛の言葉を囁き続けてあげるよジュテーム。いやいやお礼なんていらぬさ、君と僕の仲じゃないかマイハニー、ただそっと君の横顔を見つめていられれば最高のボーナス間違いなしだよ』

「いい加減にしろ、変態野郎。だれかれ構わず、気色悪い電話の出方をするな」

身体中に鳥肌を立てて、暁は怒鳴りつける。相手が女性ではないと分かった瞬間、電話の向こうの相手――覚は態度を一変した。

『んだよ、男じゃん。おい、どこの誰だか知らないが、野郎の分際で俺に電話をかけてくるとは、いい度胸だ。女の子様たちの愛の言葉で染められた俺の電話回線を臭い息で濁した罪は大きいぞ、環境破壊推進委員会の差し金め。受話器越しに耳へ小型ミサイルをぶち込まれたくなかったら、今すぐ回線を切って携帯をへし折ってドブ川に捨てるんだな。ついでにお前も飛び込んで、細菌まみれになって死んでしまえクソ野郎』

「ふざけんな、この忙しいときに。着信表示見たら、誰からの電話かくらい分かるだろうが」

『表示？ 何もない、ただ番号が意味なく羅列されているだけだ』

「お前、俺のアドレス消しやがったな？ ちゃんと残しとけて、前にも言っただろうが」

『何だ貴様、ずうずうしい。さっきから俺俺と偉そうに代名詞を使いこなしやがって。さてはオレオレ詐欺か。残念だったな、俺から金をふんだくりたかったら、今度から艶めかしい声の女性に頼んでやってもらうことだ。採点基準九十点を超えたら、お前の口座に三十ペソ振り込んでやろう。で、結局、お前は誰だ？』

「一回しか、俺って言ってないだろうが。黙って聞いてりゃ、どうでもいい話でとことん時間潰しやがって。お前との通話料金、全額請求してやるからな。肯定したくないが、俺はお前の弟だ。分かったら、さっさと用件に入らせろ」

『弟ー？ 何を言う、俺には弟はいない！ 俺に必要なのは美しい姉と可愛い妹だけだ！ 男はいらんっ』

「テメーの願望で家族設計立ててんじゃねえ！もういい、いくら安眠に言われたとはいえ、お前なんかにものを聞こうとした俺が馬鹿だった。時間の無駄だ、もう切る」

『斬る!? なんて恐ろしいことをあわわ。冗談に決まってるだろう暁わはは。ちょっとしたナウでヤングなジョークだったの、真に受けるなようふふ』

「その台詞自体、年寄り臭いんだよ、脂の乗ってないサンマみたいな声出しやがって」

『フッ、お前も、人の罵り方というものが分かってきたようだな。で、結局のところ、何の用だ

』

「鬼が出た。対策法を教えろ」

『それが人に物を聞く態度か。まあいいだろう、盆暮れに里帰りした時にでも鍛え直してくれるわ。鬼が出ただと？ 随分と周期が早いな、まだ二年やそこらしか経っていないというのに。生徒会役員とコンタクトはとってるんだらう？ 蛇羅くんにも相談しなさい』

「あいつ死んだぞ」

『もうやられてんのかい。そういうことは先に言え。ならイナホちゃんだ。彼女なら何か新しい知恵をくれるやもしれん。近付くのが怖かったら、みかんちゃんでもいい』

「どっちも死んだ」

『マジ!? 弱いぞお前ら、そんなことで世界鬼ごっこ選手権に優勝できると思ってるのか!』

「そんなことはどうでもいい。……すでに全滅してるんだよ。俺と安眠以外、生き残っているやつは校内にはいない。なのに、鬼の封印が再発動しないんだ、これがどういうことか、さっさと説明しろ役立たず」

『おかしな話だな。全滅すれば自然と鬼は元の姿に戻る、と鬼ごっこマニュアル初心者篇に書いてあったが。……しかし、今度は何が原因で、鬼は復活したんだ？ クソガキ』

「物語りの智慧を持つ奴が現れた。その所為だ」

『なんと！ これは重要なことだ、ちゃんと応えろよ。それは女か?』

「そうだ」

『ガッテム！ あと一年遅く生まれていれば、運命の出会いを果たせたかもしれないのに！ 留年すればよかった、ああ惜しいことした。憎い、お前が憎いぞ肉井さん！ 何丁目の肉井さんだお前は！ なあ、その娘可愛い？ 目は二重ですか、泣き黒子ついてる？ 下着の色は、スリーサイズは?』

「知るか！ それとこれと、何の関係もないだろうが」

『関係ないわけないだろうが！ その娘の可愛さレベル次第で、俺のトークテンションは大きく変動するぞ。対処法を教えて欲しいんだらう、なら言え、その娘はビューティーなのかブースーなのか!』

暁は横目で談子をちらりと見た。そして少し照れくさそうに返答する。

「……可愛いよ。黙ってりゃ」

『ほうほう。お前程度の美的センスで可愛いと言うことは、まあ大きく見積もって、六十点くらいと考えるのが妥当か』

「ぶっ殺されたいのか」

『まあまあ、そんなに憤るな。心配しなくても、お前が惚れた娘に手は出さん。でも今度紹介しろよ』

「惚れ!? いい加減なこと言ってんじゃねえよ、そんなんじゃ……」

『あー照れるな照れるな、パラリラパラリラ。これで春眠家も安泰だな。跡のことはお前に任せる。俺はこれから美女大国ブルガリアに行って王族に養子縁組してくるから。今、神戸空港に来ているのさ』

「そんな遠くで何してんだよ」

『タコ検定を受けようと明石にやって来たんだが、既に終わった後だったんだよ！ 俺だって成田空港が良かったんだ』

「そういう問題でもない。つーか、勝手に家を押し付けるな、だいたい、お前、ブルガリア語なんて話せないだろう」

『馬鹿にすんなー！ そんなものペラペーラに決まってるだろう。よく聞いてろよ、シオタラン！』

「下らん。もういい、切る」

『KILL!? ついにお前は殺人にまで手を染めようというのか愚か者！ そんな子に育てた覚えはお父さんありませんよ！』

「お前に育てられた覚えはない」

『冷たい奴だな。というわけで、俺は旅立つ。今度会ったときには、俺のことは魅惑のプリンスサトールと呼ん』

通話を切った。

「.....だから言っただろうが、結局、何も分からないじゃねえか」

「ぐふう.....」

二人は、大きく溜息をつく。無駄な時間が過ぎただけで、振り出しに戻った。実に疲れる。

もし、ストレス量で給料が配給される会社で働いていたら、億万長者も夢ではないだろう。

何にしても、これからどうするかと考えていると、携帯が再び振動する。安眠も電話に耳を傾けた。着信は覚からだ。出るや否や、覚が怒鳴る。

『シオタラン、日本語に訳すと塩足らん！』

「やかましい！ 今度は何だよ、もうお前に聴くことは何もない、二度とかけないから、お前もかけてくるな。じゃあな」

『待たんかい、薄情な弟め。いいところで切りやがって。言おうとしたことを忘れていたから、わざわざかけ直しててやったんだぞ、感謝しろ崇め奉れ！』

「用があるなら、さっさと見え。つーか、最初に言っとけ」

『ええい、どこまでも口が減らんやつめ。まあいい、正月に里帰りした時は覚えてろよ。よく聞けよ、全滅したのに鬼が消えない。その原因を考えると、思い当たることは一つだ。まだ校内に生き残っている奴がいる』

「何だと？ でも福内が調査した校内にいる人間数と、やられた数は一致してるぞ」

『まだまだ甘いな、暁。鬼外くんがやられたのはいつだ？ 恐らく鬼ごっこ前半じゃないのか』

「まあ、中盤くらいだな」

『なら、それ以降に、もし校内に入り込んできた人間がいたとすれば.....?』

「――そうか、そういうことか！」

『お前の皺のない脳味噌でも、分かったようだな。また困ったことがあったら、いつでも俺の名を呼ぶといい。その時はこう呼ぶんだぞ！ 魅惑のプ』

携帯の電源を切った。

「今の聞いてたな、安眠！ そいつが鬼にやられる前に、校内をくまなく探すんだ」

「ぐう！」

意気込み、安眠が先頭を切って教室を飛び出した。暁も腰を上げ、握っていた談子の手を離し、その青白い顔に語りかける。

「何とかしてやるからな、待ってろよ」

そう言って駆け出した。

二十三．生き残りは救世主

「いいか、安眠。こんな祝日の昼に、学校へ何の用もなしにやってくる奴なんて、そういないはずだ。となると、おそらく夏が連絡を送った生徒会役員の誰かが、月見達がやられるまでに校舎内に入って来た可能性が高い。初顔合わせの時に会った、役員の連中の顔は全部覚えてるな？」

「ぐう！」

「よし、まずはそれに該当する奴が、校内にいないか探すんだ。迷わないようにな」

「ぐぐ！」

大きく頷いて、安眠は廊下を駆け抜ける。それに続いて、その姿を見失わないように、かつ安眠が見落とした部分がないか確認しながら暁も小走りに走り出す。

この学校の生徒会には、綺羅姫率いる生徒会中枢部に所属するみかん、蛇羅、イナホ、そして暁を含む四人の他に、計十二人の委員長が存在する。鬼外や安眠はその委員長クラスの人材として、中枢部の人間の下で鬼対策の活動を行っている。

それら生徒会役員は選挙などではなく、鬼に対抗できる特技を持っているかで決められ、スカウトされる。したがって、もし校内に入り込んだ人間が委員長クラスの誰かであった場合、うまく行けば暴れる鬼と対等に戦える力を、持っているかもしれないということだ。

そうでなかったとしても、その誰かが鬼にやられてしまえば、今度こそゲームオーバー。

魂を抜かれた全ての人間が、死んでしまう。そのたった一人を最後まで守り抜くことができれば、死んだ人間のたった一人の魂と引き換えに、残りの人間は助かることができるのだから、被害は最小限に食い止められる。

今は、それに賭けるしかない。

現在、最終的に魂を持っていかれるのは、呪い定めの手紙による呪術を発動したイナホと決まってしまう点だが、かなり複雑ではあるが、全滅するよりはいいに決まっている。イナホだって、自分で選択した末に決意したことだ、それ相応の覚悟があったはずである。

だが、その局面に陥った時のことを考えると、どうしても浮かんでしまう。

談子の泣き顔が。

自分がどんなに辛い目にあっても、こんな訳の分からない鬼ごっこに巻き込まれても、愚痴や文句は言えども、決して弱音一つ吐かなかった彼女が、他人のために大粒の涙をこぼし、鬼に対して本気で怒鳴り散らした。

最初はただの好奇心丸出しの、何も考えていない馬鹿女だと思っていたが、誰よりも責任感の強い、そのため全てを一人で背負い込んでしまう、そんな人間なのだと分かった。

彼女が泣いた時、暁に焦燥も困惑も大してなかったが、妙な恐怖が湧き上がったのを覚えている。彼女が絶望して涙を流した。それだけで、本当に何もかもが終わってしまったかのように感じたのだ。校内に閉じ込められてから、馬鹿にしたりされたり、罵りあったりしていたが、随分と談子の存在に助けられていたのだと、彼女が倒れて、改めて分かった。だから、次に目を合わせたときには、泣き顔なんて見たくない。

自分が助かって、イナホが死んでしまったと知れば、やはり泣いてしまうだろうか。だが、

鬼を倒して日没までに封印することなんて、やはり今の暁には到底不可能だ。

「……俺にできることなんて、限られてるんだよ」

だから、これで勘弁してくれ。

両頬を掌で叩き、精一杯の喝を自分に入れる。気を取り直し、暁は廊下を駆け抜けた。

「ぐ？ ……ぐうぐう！」

前を走っていた安眠が立ち止まり、上を見上げて叫び出した。暁が側に寄り、小さな指がさす先を見る。

そして、顔を歪めた。

裏庭に面した校舎の壁に、カタツムリが張り付いている。それも、ただのカタツムリではない。なんせ、これだけ離れた場所からでも、その形や渦巻き模様がはっきり見えるのだから、かなり大きなものだ。

「う……。よりによって、こいつか」

暁は、あからさまに拒否反応を示す。

このカタツムリを、生徒会役員顔合わせの際に見たときから、どうにもこうにも苦手だと思っていた。別にカタツムリもナメクジも嫌いではない。塩を振れば溶けるところが何とも魅力的だと勝手に思っている。

塩から連想されてシオタランがでてきたため、不愉快に思い思考を目の前の巨大カタツムリに戻した。

「アレはほっといても、鬼にやられる心配はないな」

できるだけ、アレに近付きたくない暁は、そう自分に言い聞かせて、そっとしておこうと思った。そのまま関わらず、素早くその場を去ろうとした時。

「ぐぐう！」

安眠が地面を蹴った。その飛び上がった先には、例のカタツムリが。あの渦巻に、なにか興味そそられるものがあったのかもしれないし、ただ単に、壁から剥がして落としかっただけかもしれない。

「安眠、やめろ、戻って来い！」

暁はそれに気付くや否や、慌てて呼び戻そうとしたが、もう手遅れだった。カタツムリの張り付いている建物と、暁がいるこちらの建物の壁を交互に蹴り飛ばしながら、安眠はどんどん上へ登っていく。そして、カタツムリの目の前に来て一瞬動きを止め、力を溜めた。

「ぐうー、ぐっ！」

そして、強烈な右足蹴りが炸裂。その衝撃で、渦巻き模様の殻は壁から剥がれ、回転しながら、暁めがけて飛んできた。

「うおっ！ コントロール良すぎ」

下半身に力を入れ、暁は跳んだ。ゴールキーパーではないので、受け止めるなんて自殺行為は避け、その場から逃げるように、大きく横へ跳ぶ。

ズドン。まるで隕石でも落下したかの如き、衝撃と轟音。平日だったら、大騒ぎになっているところだ。

地面にめりこんでも、まだ回転している殻。コンクリートの地面を、えぐりながら数十センチ進んで、ようやく制止する。煙を上げて動かなくなった巨大カタツムリに、軽々と着地した安眠と、遠くに避難していた暁が近寄る。

「ぐ、ぐう……」

やりすぎたかもしれない。安眠は中身の壮絶な現状を想像したらしく、怯え震えていた。

暁は恐る恐る、カタツムリの殻をドアをロックするように叩いてみる。

ビシッ。叩いた場所に、罅が入った。驚いて、一歩後退る。まるで、卵が孵化するように、ビシビシと亀裂を走らせるカタツムリ。それも限界を迎え、殻は一気に割れて、中から何かが生まれ出た。

「キャ～！　ぐるぐる～、ゲロゲロ～!!」

悲鳴を産声に飛び出したのは、ヒヨコでも恐竜でもエイリアンでもない。一応、人間だった。

長い金髪は、これでもかというくらい縦に巻かれ、何本もの長いバネが頭から生えているようだ。ナルト蒲鉾を貼り付けたかのような、渦巻く眼球は、目を合わせた者までもを渦の中の世界へ引きずり込もうとする。目が開いていない安眠でさえ、目を回して倒れてしまった。

いちおう、この学校の生徒であることが着ている制服で分かるが、ネクタイの先端まで、心なしか丸まっている。なんだかグルグルな、変な女。

だが、暁は知っている。こいつは三年生で広報委員長の、^{かたつむうり}片津霧梨だ。

霧梨は目が回りすぎたのか、気持ち悪そうに殻から外に出て倒れる。

「うおえ～。吐く、マジキモ～」

「キモいところ悪いんだが、もう時間がないんだよ。とっとと起きて、俺について来い。今生き残っている奴は、お前だけなんだ。鬼の目の届かないところへ逃げるぞ」

あのまま張り付いていれば、絶対に安全だっただろうが、落ちてきてしまったからには仕方がない。何としても、鬼にやられないように保護しなければ。一瞬、このグルグル目で鬼の目を回せないかと考えたが、そんな退治の方法は自分自身の戦闘美学が許さないと、思い直した。

「なんじゃい、このヤロ。誰かと思えば、変態春眠一族の末裔じゃん。あちきは、みかんちゃんに頼まれて、わざわざ長い道のりを学校まで歩いてきたのよ～。みかんちゃんを出しなさいよ～」

癖なのか生まれつきなのか、彼女の口調は凄くゆっくりで、聞いているこっちがイライラしてくる。短気な暁なら尚更だ。まさにカタツムリ。だからあまり、関わったり会話をしたくなかったのだが、今はそうも言っていられない。

「もう、鬼にやられちまってるよ。つーか、一族全部を変態呼ばわりするな。異質なのは兄貴だけだ」

「んなこた一、どうでもいい～！　そんなら、みかんちゃんの死体置き場へ連れて行きなさい～、あちきが生き返らせてあげるから～」

霧梨が起き上がり、どーんと言い張った。

「生き返らせる？　どうやって」

暁は不審そうに顔を顰める。霧梨は空を見上げ、頭をゆっくり回し始める。

「ぐるぐる～。あんたには、見えないの～？ こっくらへん、鬼に抜き取られた魂が、飛び回ってるじゃないのん～。まだ鬼に吸収される前の段階だから～、あちきの能力を持ってすれば～、体の中に戻すことだって～、不可能じゃないワケよ～」

「何、マジかそれ！ もしやお前、黄泉^{よみぐ}繰りの一族？」

空を見上げて、暁には魂なんてものは見えない。鬼に抜きとられた不完全な魂が見えるのは、特殊な力を代々受け継いだ、死者に魂の情報を再び与えるといわれる、黄泉繰りの一族だけだ。

少なくとも、暁はその一族以外に、魂を意図的に本体に戻せる人間を見たことがない。彼らは春眠家とも深い繋がりがあり、キョンシーを作る際、その媒体の魂を呼び戻すため、彼らに依頼するのだ。

しかし、彼らはその名の通り、一度死んでキョンシーとして再生された媒体にしか、魂を送り込むことができない。だから記憶は戻るが、肉体は死んでいるため、今まで人間として当たり前に行って来た生理現象がほとんどできなくなるのだ。感覚器も、ほとんど使い物にならなくなる。

もし霧梨が、この時点で黄泉繰りを行えるとすれば、完全な人間を復活させられると言うことに繋がるのかもしれない。本当に可能ならば、彼女は凄まじいレベルの力を操れるというわけだ。暁の心中に、大きな期待が膨らむ。

だが、霧梨は首を傾げて、頭を回す。

「よみ～？ なにそれ～？ あちきは、しがない魔法使いですよ～」

今度は、暁が首をもたげる。また何か、おかしいことを言い始めた。

「あちきは～、マイマイ星からやって来た～、素敵な捨て身な魔法使い～なのですよ。みかんちゃんの作った電波受信機に導かれ～、遙々この地球って星まで、やってきたのです～」

「……アホ話はいいから、早く行くぞ」

「アホとはなんじゃい、ワレ！ 世の中には、訳の分からん星から来たとかいう変な宇宙人が、地球人の税金を搾り取って侵略を企むような、そんな時代に突入しとるんじゃい！」

「分かった、分かったから落ち着け！」

胸倉を捕まれ、恐怖心をそそられる怒りに歪んだ顔に睨みつけられ、暁は逃れようと必死で霧梨を宥める。

ある程度落ち着いたのか、霧梨はまた、機嫌良さそうにのんびり話し始めた。

「そ～そ～、それでね～、マイマイ星の住民は、みんな渦巻くものを操れるの～。水でも～、風でも～、頑張ればヒトの魂だって～、ぐるぐる回して綺麗に収納できてしまうかもしれないのです～」

「なるほど、要は洗濯機みたいなもんか」

その経緯はどうあれ、霧梨が生徒会に、みかんにスカウトされたのは、その能力を活用するためなのだ。そうと決まれば、彼女の力に頼って、今まで倒れた全ての人間を生き返らせてもらえればいい。

「ならその能力で、死んだ奴らを何とかしてくれ。こっちの教室で大量に死んでるんだ」

「それはム〜りで〜すよ〜。ム〜リ無〜理。あちきは霧〜梨」

「何でだよ」

「あちきは、まだまだ修行中の身〜。それに魂は軽いけど、中々抵抗力があるのね〜ん。せいぜい生き返らせるにしても、一人が限度かな〜なんて〜」

「んだよ、使えねえな。……分かった、俺が悪かった。凄い力だから」

小さく舌打ちしたが、再び胸倉を掴まれ、必死で霧梨を宥める。

そして考えた。一人しか生き返らせられないならば、効率よくいきたい。みかんは、あくまで鬼に対して行動制限を行うことで精一杯だろう。彼女が復活したところで、鬼を倒すことは難しい。

なら確率的に見て、鬼を封印できる可能性が高い人間を生き返らせたほうがいいのではないかな？

それなら一人、薄いながらも望みがありそうな人間がいる。

「片津、夏より先に、生き返らせて欲しい奴がいる。物語りの智慧を持つ人間だ。分かるだろう？ その能力を持つ者は、鬼の封印を解いてしまう危険性が最も高いが、逆に鬼を封じる術を得られる確率も高い人間でもあると言われている。そいつに、この戦いを託したいんだ。夏も、そうしたほうがいいって、言うに決まってる」

みかんは、ああ見えて、かなりの策士だ。今となっては真相も闇の中だが、全てを見通した上で、事態がこうなってしまうことも、霧梨がやってくることも計算のうちに入れていたのかも知れない。

ならばやはり、最後に希望をかけるなら、生き返らせるなら、あの少女——談子しかいない。

「頼む、あいつを生き返らせてくれ。きっと、夏やみんなを、無事に生き返らせられる筈だ」

頭を下げる。普段の暁なら絶対有り得ない行動。それだけ、期待は高まっているのだ。

もう、どうあがいても、自分一人の力ではどうすることもできないと確信してしまった、ができるだけのことはやりたい。暁なりの意地でもあった。

その思いが通じたのかどうかは定かではないが、霧梨は首を回して考え始めた。

「う〜ん。みかんちゃんが〜、そういうかもしれないなら〜、きっとそれがいいのかも〜？ そう言えば〜、みかんちゃんから来たメールにも〜、そんなことが書いてあったような〜。……うん、書いてあった！」

必死で過去の記憶を手繰り寄せ、携帯で受信メールを確認し、霧梨は拳を握った。

「見て、ほら〜」

暁は霧梨の携帯の画面を覗き込んだ。

「さむ〜さりちゃんへささ。がさっこさうにさこれたさらさゆうささせんしさてださんこさちゃんさをささたすさけさてあげさてねさ。くさわしさくはさあかつささきくさんささにきささいてちよさ」

「……何が書いてあるか、さっぱり分からん」

「マジョ〜？ あったま悪〜。下の添付画像見てみなよ〜」

画面をスクロールさせると、写真が出てきた。湯気を立てた、おいしそうな学食の人気メニュー

一が現れる。

「うどんだな」

「うどんですよ～。うまそ～。ハラヘリヘリハラ～飯食ったか～？」

「だから何なんだよ」

「まだわかんないっすか～？ 霧梨ちゃんは、すぐに分かったですのに～。しょ～がない、ヒント。これは何うどん～？」

「これはたしか、さぬきうどん……」

暁はハッとする。

「そうか、「さ」を抜くのか！ つーかアホらしい……なんでこんなところで、頭の体操みたいなことしなきゃいけないんだよ」

時間もないっていうのに。タネが分かったため、急いでメールを解読する。

「む～りちゃんへ。がっこうにこれたらゆうせんしてだんこちゃんをたすけてあげてね。くわしくはあかつきくんにきいてちょ」

そう書いてあった。それが分かった瞬間、別に頑張っけて訳さなくてもよい内容だったと気づき、暁は脱力する。

「じゃ～、なぞなぞも解決したところで～、その子のところへ連れて行きなさい～。霧梨ちゃんが、何とかしてあげちゃうからね～」

「おっし、頼むぞ！」

後悔先に立たず。膳は急げ。

倒れている安眠を叩き起こし、トロトロ歩く霧梨の腕を引っ張って、職員室へ戻ろうと暁は駆け出す。

「ちょ、待っ、あんま早く走らないで……う」

「う？」

「うううう……」

急に身体を激しく動かしたせいか、霧梨は立ち止まり、顔を見る見る青く染める。

「お、おい、もう少し我慢しろ！」

「も、ダメ……」

直後、渡り廊下の側の溝には、絵にも描けない凄まじい光景が広がった。

二十四. 復活の儀式

「こいつだ。頼むぞ」

職員室の端に横たわる少女の側に、霧梨は案内された。

「はふ～。さて、少し胃のムカムカもとれたところで～、始めましょうか～」

出すものを全部出し切って、すっきりした霧梨は、改めて、その月見談子という少女を見た。

みかんが「助けてあげて」というくらいの重要人物だ。その理由は、やはりこの娘が物語りの智慧の持ち主であるからだろう。

「可哀想に～。こんな姿になっちゃって～」

「全くだ。鬼の惨劇の跡ってのは、残酷なもんだよ」

「ぐう」

霧梨は、同情めいた顔で談子を見つめる。暁と安眠も同意する。

「こんなところで、突然キズモノにされちゃって～、目覚めた時に自分が処女じゃなくなってるって知ったら～、どう思うかしら～」

「……おい、どういう意味だ、それは」

「どういっても何も～。手の早い変態春眠覚の弟が、ずっと側についていて～、こんな可愛らしい小娘ちゃんに手を出さないはずないわ～。今なら間に合うわよ～、その罪を全部吐いておしまいなさい～。ゲロゲロ～ってね」

「何もしてねーっつの。別に、服装とか乱れてないんだから、分かるだろうが、そんなもん」

「往生際が悪いわよ～。真の変態ほど、隠蔽工作がうまい者はいない～」

「いい加減にしないと、殴るぞ」

「ま～、本命以外の女には、容赦なく手を挙げようって魂胆ね～。サイテ～」

「……もう、何でもいから、早くやってくれ。日が暮れる」

諦めたように、暁は肩を落とした。

「そうね～。あなたをからかうのは、いつでもできるものね～」

今は、今しかできないことをやるべきだ。それが若者の醍醐味というやつだろう。

霧梨は天井を見上げた。この教室に横たわる、数名の教師や生徒たちの白い魂が、渦を描きながら飛び乱れているのが良く見える。鬼に吸い取られた魂の意思は冥土に送られるらしいが、それは精神的な空間であり、物質と精神の狭間に存在する霊魂そのものは、現世を宛てもなく飛び交うのだ。逝き場を求めてぐるぐる彷徨う魂に限って、霧梨は見ることもでき、触れることもでき、さらには本体に引っ張り戻すこともできた。

同じ形をした、あちこち不規則に飛び回る魂を注意深く見つめる。

突如、霧梨の渦巻いた眼球が光った。

「ていやっ！ そこ！」

バツと腕を伸ばす。凄まじい早業、その腕の動きは、暁にも安眠にも見えなかったはずだ。

がしっ、と一本の魂の尻尾を掴む。「キャー」と小さな悲鳴を上げて、魂は必死で逃れようと、もがいていたが、そのしっかり握られた手から、すり抜けることはできなかった。

「談子ちゃんの魂を～、捕まえたわ～」

「何、本当か！」

「ぐぐう！」

風船をもらった子供のように、霧梨は歓喜の声を上げる。手にしている魂が全く見えない暁たちは、霧梨の言葉だけを頼りに、歓声を上げる。

「これから～、こいつを持ち主の身体の中にぶっこむわよ～。一人では大変だから～、手伝ってちょうだいな～」

「わ、分かった。何をすればいいんだ？」

暁は頷いて、緊張しながら息を呑む。霧梨は、にやりと笑って指示を送る。

「まず～、談子ちゃんの側に座る～」

言われたとおりにした。

「お次に～、ネクタイほどいて～」

言われたとおりにした。

「さらに～、シャツのボタンを上から順番にはずしていきましょう～」

「……？」

言われたとおりにしようとしたが、二つ目のボタンをはずした時に何かおかしいと気付いたらしく手を止めた。

「何の意味があるんだ、これは？」

「キャ～、スケベ～、変態～。無抵抗の女の子の服を剥ごうなんて、サイテ～」

「……………」

一人で盛り上がる霧梨を、暁は無言で睨みつけてくる。

「うっ、さすがに、その殺気を帯びた視線を向けられると～、身の危険を感じてしまうわ～。ダイジョ～ブ、ちゃんと真面目にするから～。あなたは彼女の手でも握って、励ましてあげなさい～」

冗談はここまでにして。霧梨は暁を宥めてから、魂を見上げて集中し始めた。

「はあああああああ～。そいや！」

まるで踊るように、おぼつかない足を動かし始める。一見、阿波踊りでも踊っているかのように見えるが、あくまで魔法発動のための儀式だ。その手に握られた魂が、上下左右に不規則に揺れる。既に動きを霧梨によって制御されているのだ。

「そ～らそ～ら、回れ回れ～」

ブンブンと魂を投げ縄のように上空で振り回す。それと併せて、霧梨は自分の足の動きを早め、ついには自分も回り始めた。

「ぐるぐる～、ぐるる～！」

霧梨は独楽のように回る。その凄まじい回転は徐々に速度を上げ、傍から見れば金色の竜巻が回っているかのようにも見えるだろう。

周囲に風が巻き起こり、壁に貼り付けられたポスターや、破壊された教員達の机の上の紙類が宙を舞った。強風に揺さぶられ、立て付けの悪い窓ガラスがガタガタと震える。霧梨の手に握ら

れた魂は、叩き伸ばされたうどんのように細く長く伸び切って、それでも尚、上空で渦を描いて回っていた。

「よし、今だ〜！」

ピタッと、霧梨が緩急なく制止する。止まった先は、しっかり談子の頭の前に向いていた。彼女を挟んで向かい側では、その手を握った暁が、呆然と霧梨を見上げている。

霧梨は腕を、一気に振り下ろす。人差し指と中指が談子の額に突き刺さった。そこから、空中で渦を描いていた、素麺みたいになってしまった魂が、ボタンを押された掃除機のコンセントのようにシュルシュルと頭の中に入っていく。数十秒の時間をかけて、長細くなった魂は、全て談子の中に収納された。

「ぐるう〜。お、終わったわよ〜。バタリ」

眼球を鳴門海峡のように激しく回しながら、霧梨は倒れた。全身フル回転の後遺症が、今になってやって来た。あそこまで回り込めば、体力の消耗も激しいし、回る世界から抜け出すのは困難だ。

「……おい、本当に月見は生き返るのか？ 全く目を覚ます気配がないぞ」

相も変わらず、横たわり続けたままの談子の姿に、暁は焦って霧梨を見る。

「あとは〜、談子ちゃんが自力で戻ってくるしかないわ〜。あちきにはどうすることもできないし。ああ目が回る」

霧梨はそれだけ告げて、ガクリと首をうな垂れた。

二十五. 生と死の狭間で

暗い。というより、何も見えない。

談子は足場もない壁もない、虚無の空間を漂っていた。無重力の宇宙を浮遊するような感じだろうか。肌には何の感覚もないので、良く分からない。意識だけがはっきりし、まるで自分が意思だけの存在になってしまったようだ。

その状態に、違和感はない。嫌だとか、気持ち悪いとも思わない。

ただ、強く実感できた。これが、死なのかと。

ふわふわと漂っていると、急に視界が開けた。

赤い。空間一面が、赤かった。

その鮮やかな色に刺激されたのか、談子の感覚器が、一気に目を覚ます。

嗅覚が訴える。これは、血の匂い。錆びた鉄が発する、あの独特の匂いが湧き上がり、生暖かい感触を起こす。

赤い血は、徐々にどす黒さを帯び、動脈を流れる二酸化炭素を多く含んだような色に変わった。

なんとも、おぞましい光景。足元に、生暖かい感覚がした。

談子は、血だまりの中に足をつけて立っていた。膝下まで完全に赤く染まっている。気持ち悪いという感覚が戻ってきて、少し嫌な感じがする。

ゆっくりと、辺りを見渡した。風景も背景もない。ただ、赤い空間が広がっている。その向こうに、陸が見えた。陸といっても、ほんの小さな、公園の砂場くらいの大きさの敷地が、血溜まりから盛り上がっているだけだが。

そこに、誰か人がいた。胡坐をかき、手に赤い糸を絡ませて、休む間もなく動かしている。

柔らかな雰囲気青年だった。着ている服は、談子と同じ、仁鳴高校の制服だ。

「あの……」

恐る恐る声をかける。しかし男子生徒からの返事はない。こちらに気付いているかも分からない。

なので、率先して話を切り出した。

「何やってるんですか？ こんなところで」

「あやとりだよ」

男子生徒は即答してきた。外見と変わらず、優しくそうな声色。保育士なんか向いてそうな人だなという印象を受けた。

でもそういうことじゃなくて。赤い糸を指で操り、東京タワーなんかを作っているのは、見て分かるが、別にそれが知りたい訳ではない。

「どうして、こんなところにいるんですか？ ここはどこですか？ どうしてあたし、こんなところにいるんでしょう？」

多々の疑問をぶつけてみる。中には彼にだって分からないだろうものもあるが、聞かずにはいられなかった。そんな手前勝手な質問に、男子生徒は優しく返答してくれる。

「君はもう、全部分かっているんじゃないかな。ここは血の池。何もない、鬼が魂を保管するためだけに作られた、地獄の一番上の階層。冥土とも言うね。君も僕も、鬼に魂を抜き取られたから、ここにいるんだよ」

そうだ。談子は思い出した。あたしは、死んだのだ。

我を忘れて鬼に向かっていき、あっけなくやられた。

あの時、生き残っていたのは自分だけだったのに。

全滅してしまったのだろうか。みんな、死んでしまった？

みかんも、蛇羅も、鬼外も、イナホも、時雨も、そして、由喜も一一。

みんな、自分のせいで死んでしまった。取り返しのつかないことをしてしまったんだ。

「……どうしたの、なぜ、泣いているの？」

男子生徒が尋ねてくる。談子の頬は、透明な水で濡れていた。

「あたしのせいなんです。あたしのせいで、みんな死んじゃった。みんな、あたしのことを信用して、命を託してくれたのに、あたしは自分のことばかり考えて、その気持ちを踏みにじってしまった……」

談子は泣きじゃくる。男子生徒は手を止め、その姿をじっと見ていた。二重の、少し眠そうな黒い瞳が細められる。

笑顔だ。

「まだ、鬼は封印の中へ戻ってきていないよ。現世に留まっている。それは、まだ全滅していないということじゃないかな？」

談子は顔を上げた。もし何かの偶然で、まだ学校内に人が生きていたとしたら一一。虫のいい考え方だが、そうなら、どれだけ有難いか。

だが、全滅を逃れられても、談子の心の痛みは治まらないだろう。

「でも、もしこのまま日没まで全滅しなかったとしても、あたしはやっちゃいけないことをしてしまったんです。自分から鬼に飛び込んで、魂を抜かれて、みんなに迷惑をかけて。何より、綺羅姫に無意味な罪悪感を押し付ける結果になってしまった……」

綺羅姫の身体を乗っ取った鬼が、談子を食らったと知ったら、綺羅姫はどう思うだろう。

そして、もしみんなが無事に生き返ったとしても、それがイナホの犠牲の上に成り立つ結果であれば、素直に喜べるかどうか。

「綺羅姫は、鬼の容れ物として利用されているだけなのに、受けなくていい心の傷をたくさん蓄えてきたんです。それを何とかしてあげようって、苦しみから解き放てる方法を探してあげようって決心していたのに、こんな結果になってしまって……。綺羅姫に、合わせる顔がありません」

嗚咽を漏らす談子をじっと見上げ、男子生徒は、ポツリと口を開いた。

「本条綺羅姫は、鬼である。過去に生きた者達によって人間の血を注がれ、人と妖との境界が曖昧になってしまった、女鬼である」

談子は、潤ませた瞳を男子生徒へ向ける。視線に対して何の反応も見せず、彼は淡々と続ける

「君も、勘違いをしている。綺羅姫が鬼であることを、否定してはいけない、それは綺羅姫の存在そのものを否定することと、等しいから。鬼を封じるということは、本来の綺羅姫の人格を心の奥底に押し込むということ。それは人間の平穩を取り戻すためには必要だけれど、それを当然の事象として、軽はずみに受け入れてはならない。彼女という尊い犠牲の上にあるものだと、しっかり理解した上で封印を探し、実行しなければ。そして、目に見えるものだけでなく、全てのものを受け入れられなければ、この連鎖は永久に続く。――君のように、誰かのために一生懸命考え、泣ける人ならば、連鎖に終止符が打てるかもしれないね」

笑いかけてくる。呆気にとられた談子は、興味深く男子生徒を凝視していた。泣くことも忘れて、ただ呆然と。

「あたしに、綺羅姫を救えると思いますか？」

「全てを、受け止められるならば」

綺羅姫は鬼である。

その事象、薄々勘付いてはいた。談子が鬼に対しての印象を語った時に見せた彼女の表情に、偽りがなければと。

受け止める覚悟。そんなもの、最初から決まっているじゃないか。この鬼ごっこに巻き込まれたその時から。

その強い意思を談子が表したこと確認して、男子生徒は微笑んだ。

彼は何者なのだろう？ 多くの事情を知っているようだが、なぜ冥土に、慣れ親しんだように留まっているのか。

「……あなたは、いったい誰？ いつから、ここにいるんですか？」

「君と同じさ。好奇心で鬼の封印を解いてしまい、あっさりと食われた、憐れな魂。君よりはずっと長い間、ここにいる。僕にはもう肉体がないから、ここにいることしかできないが、君はまだ戻れる。――ここに来るのは、時期尚早だよ。帰らなきゃ」

「帰るって、でも、あたしだって、鬼にやられて……」

「大丈夫、耳を澄ませて。聞こえない？ 君を呼ぶ声。君が戻ってこれるように、必至で呼びかけてくれている人たちの声だよ」

談子は上を見上げた。赤い空の一点が、黒く滲んでいる。暗い穴のように奥が深く、吸い込まれそうな感覚に囚われる。

『――見、月見！』

誰かの声が、そこから落ちてくる。聞きなれた声。力強く、そして温かい。

「……暁？」

『戻って来い、月見！』

『ぐうぐう！』

「アンちゃんも！」

間違いない、あの二人が呼んでいる。戻れと言っている。それを確信した途端、身体が軽くなり、血の池から足が離れた。

「良かったね、待っていている人のところへ、戻れるよ」

男子生徒は、笑った。笑って、浮かび上がっていく談子を見送っていた。

「ま、待って、あなたは……」

手を伸ばす。でも、その手は届かない。

「形のある命だけが、全てじゃないんだ。目に見えない場所にこそ、答はあるんだよ。頑張っ
て」

男子生徒が手を振った。やがて、黒い穴に吸い込まれて、その姿も見えなくなった。

肌が空気に触れた。すさまじい、いろんな感覚が談子を包み込んで、押し潰そうと襲ってくる

。

恐怖。その感情が頂点を制し、自分の身体が震えているのが分かる。

あれは夢だったのだろうか。それとも、こっちが夢？

どちらともつかず、頭の中にいろんな感覚が溢れ返ってくる。

何もかもがある。空気も重力も、人の温もりも。

それが、とても怖い。

談子の身体が、大きく痙攣した。

二十六. 復活

「一一月見、月見！」

「ぐうぐう！　ぐう！」

暁と安眠は、必至で談子に呼びかけていた。魂が本体に戻った今、こうするしか他に何もできない。

後ろには、使命を終えて力を使い果たし、倒れている霧利がいる。彼女が言うには、あとは談子の意志次第で、生き返るかどうか左右される。

魂は道に迷いやすく、帰り道を間違えたり、戻るべきなのか、戻っていいのかと躊躇って動かなくなってしまうこともあるという。

だから、こちらへ戻ってこれるように、声を掛け続けているのだ。

ビクン。談子の身体が、大きく痙攣を起こした。カッと勢い良く目蓋が上がり、開ききった瞳孔が、空を見つめている。

「あ、こ……」

「大丈夫か、しっかりしろ！」

何かに怯えるように、談子は拳動不審に辺りを見渡す。その身体は、激しく震えている。手にも足にも鳥肌が立ち、歯もカチカチと音を立てている。暁はその手を強く握り、押さえつける。安眠も談子に抱きついて、必至で落ち着かせようとした。

暫らくすると震えも収まり、身体の機能が正常に戻ったようだった。

胸を押さえながら、談子が起き上がる。大きく息を吸い、ゆっくり吐き出した。すごい汗だ。

「ぐうう、ぐう！」

「あ、ありがとう。もう、大丈夫……」

まともに口が開けるようになったらしい。暁は安堵の息を吐く。どうやら、蘇生は成功したようだ。

「気分は？　どこか、痛いところはないか？」

尋ねると、談子は暁に虚ろな目を向けて、頷いた。

「平気。ちょっと、怖かっただけ。でも、もう治まった」

「そうか」

黄泉返りの反動は、とても大きい体に負担をかけるものと聞く。蛇羅も言っていたが、実体を持つことに、凄まじい恐怖を感じるそう。キョンシーは、そういった感覚をほとんど失っているから、現世に戻されても、ある程度は平気でいられる。しかし、やはり生身の状態では、きついものがあるだろう。暁には分からないから、身を案じるくらいしかできないが。

暁は、談子が死んでからのことを、簡潔に説明して聞かせた。後ろで倒れている霧利のことも。

事情を知って、談子は慌てて霧利に這いより、頭を下げた。目を覚ましていた霧利は、その姿を見て、グルグルの眼球でにやりと笑う。

「い～って、い～って。あちきよりも、暁くんにお礼言わなきゃね～。つきっきりで介抱してく

れたんだし〜。そりゃもう身体張って一生懸命〜」

「いらんことを言うな」

暁が霧利の頭をはたいた時には、談子は自分の制服の胸元がはだけていることに気付いていた。

暁の顔が強張る。しまった、それどころじゃなかったので、元に戻しておくのを忘れた。

談子の顔が、みるみる赤くなる。

「ちょ、何よこれ！ あんた、あたしが動けない間に、何してくれてるわけ!？」

「何にもしてねえよ！ それは片津が……」

「信じらんない！ この変態、酔狂者、死体愛好家！」

「この野郎、言わせておけば……！」

弁解の余地もなくまくし立てられ、暁も顔を熱くして怒る。安眠さえも仲裁に入る余地がないほどのいがみ合いが続き、目から火花が飛び散る。

背後で霧利がにやにやしていたが、気にしている余裕はない。

「ちょっと服乱されたくらいで、ギャーギャーぬかすんじゃねえよ！ お前が死んでる間に、こっちがどれだけ苦労したと思ってんだ、額に肉って書かれなかつただけ、有り難いと思え！」

「開き直ってんじゃないわよ、そんなことしたら、あんたの口の周りに泥棒ヒゲ描くからね！」

「上等だ、やってみろ！」

「望むところよ！」

「ぐうう、ぐう……」

床に転がっていた油性ペンを素早く構えて戦闘態勢に入る二人を、必至で安眠が止めようとするが、それはもう不可能に近い。

これほど暴れ回る元気があれば、もう大丈夫だろうが、病み上がり状態の人間に激しい動作をさせるわけにもいかない。

だがここで引いて、更に嘗められても不愉快だ。この戦いに引導を下すべく、暁は談子に飛び掛った。

「いやー！ やめてよ、何すんだコノヤロー！」

「うるせー、これでも食らえ！」

数分に渡る激しい激闘の末、やっと二人の動きは治まった。顔中マジックの落書きだらけにして、肩で息をしている。その顔を見ていられなくなったのか、安眠がタオルを二人の顔に投げつけてよこした。

湿ったタオルからは、シンナーが染み込んだ匂いがする。できるだけ吸わないように、それで顔を拭き、マジックの汚れを落とす。そして鬼によって破壊された扉から外に出て、手洗い場で顔を濯いだ。

暁と談子は、息をつく。思いっきり叫んで暴れて、少し張り詰めていた気分が晴れたような気がしたのは、気のせいではないはずだ。

窓から見た空は夕焼けで、大きな太陽の根元が少しだけ、山の向こうに隠れようとしていた。

頭が整頓され、残された時間に自分がすべき事が、はっきりと判断できる。

落ち着いたように、暁は息を吐いた。

「もうすぐ日没だ。このまま鬼と遭遇しないように逃げ切れるか……」

談子の顔を見た。うっすらと、落書きが残っている。暁は軽く笑った。

「まだ汚れ、取れてないぞ」

「暁だって。ぷっ、変な顔ー！」

「お前がやったんだろうが」

互に顔を見て、そして笑う。爆笑。腹のそこから笑って見せた。もう憂鬱な気分を全て吹き飛ばすかのように、それこそ大声で。

こんな時間がいつまでも続けば、これほど平和なことはないだろうに。そう実感できるひと時だった。

もちろん、幸せなんてものは、そう長く続くものではないが。

また数分後。談子は腹を抱えて廊下に横たわっていた。

「痛い痛い、おなか痛い……」

「そんな筋肉痛の腹で、馬鹿笑いするからだ」

側で暁と安眠がこちらを見下ろしている。さっきまで一緒に馬鹿笑いしていたくせに、今はもうすっかり、いつもの冷め顔である。

謀られた。本気でそう思った。

「鬼の封印が再発動するまで、あとわずか。俺たちが鬼の気を引いて足止めするから、お前はここでじっとしてろ。どうせ動けないだろうけどな」

「ううっ、卑怯なあ……」

起き上がって止めようとしたが、どうにもこうにも、腹筋が痛くて動けない。こんなところで筋肉痛が仇となるとは、思ってもみなかった。

「大丈夫だ。死なない程度に、こちらへ注意を引かせるだけだ。そうすれば、ほとんど全ての人間は助かるんだ。それで上等じゃないか。この期に及んで秋田の話はさせないぞ、あいつは自分で望んで術を発動したんだ、その気持ちも汲んでやれ」

談子に、返す言葉は見つからない。イナホの件を諦めたわけではないが、やりきれないことには変わらない。

でも身体が動かないのも、覆せない現実だ。

「で、でも待って、そんなことしても、綺羅姫は救われないよ……」

談子の意志とは裏腹に、暁たちの姿は遠くなっていく。必死で声をかけるも、それを止めることはできなかった。

二十七．最後の闘い

眠りについたらはずなのに、次に起きた時にも眠っていた。でも意識がはっきりしている。目の前には、いつも一緒に遊んでくれた哥哥ゲーグがいた。哥哥は自分と、一緒にいた不眠に向かって、冷たい眼差しで命令した。

「今日からお前たちは、俺のキョンシーだ。俺の指示に従うこと、俺には絶対に逆らわないこと。分かったな。もう、俺は哥哥じゃない。これからは暁と、そう呼べ」

哥哥の表情は、とても辛そうだった。自分と不眠が死んだのだと聞かされたときは、良く分からなかったが、その話をする哥哥の辛そうな顔を見ていると、だんだんそれが悲しいことなのだと分かった。

哥哥は、死んでしまった自分を、キョンシーとして助けてくれた。側においてくれた。嬉しかった。その恩に報いるために、今まで戦ってきた。でも自分は不眠より弱いから、どうしても役立たずになってしまう。それがとても苦痛だった。

でも今日だけは、不眠の力が借りられない今回だけは、どうしても役に立たなくてはいけない。哥哥は大切な人たちを守るために戦っているのだ。力にならなくては。

恩返しを、しなくては。

▲□▲□▲

「いたぞ、鬼だ」

外に出た暁と安眠は、桜並木のうちの一本の陰に隠れて息を潜めた。昇降口の辺りに、鬼が彷徨っている。

相変わらず、まだ微かに漂ってくる人間の魂を探しているのだろう。

「引き付けるだけでいい、無理に戦おうとするなよ」

「ぐう」

暁の合図で、二人は鬼の目の前に飛び出した。鬼もこちらに気付き、邪魔をさせまいと襲い掛かってくる。

鬼の爪が、暁の顔面目がけて振り下ろされた。紙一重で避けるも、完全に躲しきれず、暁の頬の皮が破れて、血が飛び出る。

「ぐううっ！」

「大丈夫だ。俺に構わず、鬼に集中しろ！」

悲痛な声を上げる安眠を声で制し、暁は隙を作らず鬼に攻撃を繰り返す。つかず離れずの距離感を保って、何とか鬼の注意を引き付ける。太陽もだんだん低くなり、辺り一面が橙色に染まっていく。安眠の顔も、鬼の顔も。暁の表情に、一瞬焦りが生まれた。

その時に生じた、僅かな隙が、鬼を勢いづかせた。鬼の腕が暁の肩を強打し、身体を吹き飛ばす。

迂闊だった。校舎の壁にぶつかって勢いを止めるも、肩が外れて、そこから起き上がれない。

元に戻そうと、強引に骨格を変形させる。ゴキリと嫌な音が鳴り、激痛が走った。

「ぐあああああ！」

思わず声を上げてしまう。そのせいで、安眠の注意力も格段に落ち、鬼の魔の手が伸びる。

「ぐうっ！」

安眠は鬼の攻撃を、紙一重で避けた。小さく身軽な身体を駆使して、必死に戦おうとしているが、どうにも実力不足だ。その基礎力が大幅に違いすぎる。

「安眠、引け！ やられるぞ」

キョンシーだから、身体がボロボロになるまで戦っていいというものでもない。その媒体が復元不可能にまで破壊されれば、安眠は完全に死んでしまうのだ。そんな無茶をさせるために、暁は安眠をキョンシーにしたのではない。

「ぐうううっ!!」

しかし、安眠は引かなかった。

主の命令に逆らう。今まで、絶対にしなかったことだ。

安眠は懐から携帯電話を取り出す。安眠は携帯を持っていない。あれは談子のものだ。こっそり、盗み出してきたらしい。

蓋を開き、何やら探して操作している。それが何か悟った暁は、大声を張り上げた。

「やめろ安眠！ 今、目覚めたら……」

しかし、その声も虚しく、安眠は携帯の着信音を盛大に鳴らした。

コケコッコー！

何とも奇怪な、鶏の鳴き声の着信。変えろと言ったのに、変えていない。暁の表情が歪む。

その音を聞いた安眠に、異変が起きる。携帯を落とし、背を丸めて、小さく項垂れた。

「ぐううううううう……」

咽の奥から聞こえてくる、血に飢えた獣のような唸り声。

間に合わなかった。いつも眠そうに閉じられていたその目が、カッと開かれる。

焦点の存在しない真珠のような大きな白眼が、鬼の姿を映し出す。

安眠が、覚醒した。

「ぐうあああああ！」

安眠はすさまじい速さで、鬼に向かって飛び掛る。

小さな足が繰り出す蹴り、普段は決して威力の強くない拳が、鬼に直撃する。途端に、鬼は激しく吹き飛んだ。

安眠の体内には、すさまじい潜在能力が眠っている。鶏の鳴き声を合図に目覚め、その力を発揮するのだ。その事実を知ったのは、安眠を使役し始めて暫くしてからだが、その威力は不眠さえも凌駕し、この世に現存する、どのキョンシーよりも破壊的で強力であると思い知った。

しかし、その力は安眠の小さく脆い身体では制御することが難しく、下手をすれば己の身さえも滅ぼしてしまう、まさに両刃の力なのだった。

こうなってしまうとは暁の指示も聞かなくなるし、もはや力尽きるまで、止める術はないに等しい。

これだけは使わせないと、昔に誓ったのに、まさかこんなところで覚醒してしまうとは。

その分、鬼が食らったダメージは、今までの比にならないほど凄まじかった。鬼の着物は裾が千切れてボロボロになっているし、その中から覗いた硬そうな肌にも、痣ができています。

安眠の蹴りが腹部を直撃。赤い口から黒い血を吐き、鬼は悲鳴を上げる。ひょっとすると、このまま勝てるのではないだろうか。一瞬、そんな淡い期待を抱いてみたが、やはり鬼は一筋縄ではいかない。

腹部にめり込んだ安眠の足を掴んで、引きちぎったのだ。

「安眠！」

暁の悲痛な叫びと共に、安眠は投げ飛ばされ、こちらへ飛んでくる。暁は慌てて、その体を片腕で受け止めた。反動で再度壁にぶつかり、背中を強打する。

痛みを堪えて、安眠に注意を払う。気を失ってしまったようだ。

安堵の息を吐く。これ以上、身体の組織を破壊されると、直せなくなる。

鬼は、身体を震わせてその場に蹲る。暫くは動けないだろうが、こちらも満身創痍だ。

次に鬼が動き出せば、確実にやられる。鬼が動き出すのが先か、日没が先か。

緊張に身体を強張らせる。歯を食いしばって、どう逃げるべきか考えていると、上から髪の毛を引っ張られる感触がした。

「暁、こっち」

上を見上げると、窓から上半身を乗り出した談子の姿が。

「早く、中入れる？」

ゆっくり身体を起こし、安眠を談子に手渡し、校舎の中へ押し込んだ。

直後に素早く、鬼に視線を向ける。己の体力を回復させるのに必死なようで、暁たちの動きには気付いていない。それを確認し、暁も談子に手を貸してもらって、窓の棧に足をかけた。

教室内に降り立ち、静かにかつ素早く窓を閉める。薄暗いその部屋は、今は使用されていない、何もない閑散とした空き部屋だった。あるのは、立て付けの悪い和製の筆筒くらい。

この部屋は、綺羅姫が人知れず生活していた教室だ。鬼の存在が公にならないように、ここでひっそりと息を潜めて、日々を過ごしていた。みかんによって色々改装が成されているので、今見ただけではただの空き教室だが、夜になると人間が普通に生活できるくらいの家具や寝具が床から取り出せるようになっているらしい。

辺りを見渡していると、肩に激痛が走った。脱臼した部分に、談子の手が触れたのだ。

「あ、ごめん。どうしたの、怪我したの？」

あまりの痛さに、思いきり顔を歪めると、談子は慌てて手を離し、心配そうに顔を覗き込んだ。

「ほっとけば治る。それより、こんなところで何してる。のこのこやって来て、鬼に見つかったら終わりだぞ」

「大丈夫、上で霧利先輩が伸びてるから」

談子は上を指差す。教室の天井の端に、人がひとり通れる程の四角い穴が開いていた。もし再度談子がやられても、上に霧利がいるから全滅はしないと、そう言いたいのだろうか。しかしそ

の考えには賛同できず、暁は尚も顔をしかめたまま談子を睨みつける。

「この上、職員室なんだ。さっき見つけた、応接室の穴がここに通じてたの。ちょうどいいと思って降りてきたんだよ」

「丁度いいって、何が」

「あのね、あたし、思い出したの。鬼を封印する方法」

「何っ、本当か？」

暁が身を乗り出すと、談子は少し自信なさ気に頷いた。

二十八. 封印

『この中には、なくてはならぬものが入っている。開くことができるのは、来るべき時に現れた選ばれし者のみ。

触れてはならぬ、中を覗いてはならぬ。

開けてはならぬ、中のものを取り出してはならぬ』

以前と変わらずそう語る、目の前の筆筒。一昨日触った時には開かなかったが、きっと何か、役に立つものが入っているに違いない。

その話を、談子は暁に説明した。肩を負傷した暁は、気を失って人形のように動かなくなった安眠を抱きしめて、黙って話を聞いている。

安眠は左足がもげてしまっているが、魂は分離していないので接続がうまく行けば、また今までどおり動けるようになるそうだ。

頑張っけて鬼と戦ってくれたから、今はそっと眠らせてあげている。

「今から、この筆筒をもう一回、開けてみようと思ってたんだ。やってみるね」

暁は頷いた。談子も頷き返し、筆筒の引き輪に手をかける。

確か、一番上の引き出しだけが開かずじま이었다。それは、大事なものが収められているからだ、筆筒は語っている。

あの時は、まだ開けるべきではなかったのだろう。開くためには、それに相応しい時に、相応しい人間が現れなければならないのだ。

来るべき時——それを鬼の封印が解けた時と考えるなら、きっと選ばれし者は、その筆筒の音が聞ける、物語りの智慧を持つ人間ではないだろうか。

自分が、そんな大それた人間だとは思っていないが、談子にできることは、もはやこの引き出しを開けるくらいしかない。

お願い、開いて。

思い切って、筆筒を引く。

前は重くて、ピクリとも動かなかった引き出しが、音もなく、滑るように軽やかに手前に出てきた。

「——開いた！」

談子の表情に、笑顔が浮かぶ。それと同時に、筆筒が談子に語りかけてきた。

『我が声に耳を傾ける者が現れた。是を大いに活用せよ。さあ、中のものを取り出すのだ』

筆筒の中にちょこんと置かれていたもの。それは大きな円を描いて撒かれた、真っ白な糸だった。手に取ると、絹糸のようにさらさらしていて、とても軽かった。細いのにとても頑丈そうで、柔らかいのに芯が硬い。

『これは蜘蛛の糸。現世で使えば、地獄の住民を元の場所へ戻らせる力を持つ。地獄で使えば、現世の人間を一人だけ、元の場所へ連れ戻すことができる。部屋を覆うように、糸を広げて形取れ。入り口は開けて、地獄の住民を招きいれよ』

筆筒の言う通り、談子は教室中に糸を張り巡らせた。細かく慎重に、陣を描くようにしっか

りと、教室の角に糸を引っ掛けていく。

どれだけ引っ張っても、糸は切れないし、なくならなかった。必要な分だけ増えていっているような、本当に不思議な糸だ。

ようやく、指示通りに糸を張り終える。それと入れ違いに、鬼の叫び声が窓の向こうから聞こえてくる。体力を回復し、談子達の気配を追ってきたのだ。

「暁、教室から出て！」

安眠を連れて、暁が外へ出るのを確認して、鬼のやってくる場所から死角になるように、談子も教室の端へ隠れる。

壁に背中を貼り付けて、息を潜めた。窓の棧に、長い爪が引っかかる。白髪の頭が覗き、鬼の顔が、額縁に飾られた絵のように、姿を表した。

来い。

談子は身構える。

鬼は縁に足をかけ、勢いをつけて、軽々と教室の中央に降り立った。

「今だ！」

談子は思いっきり、糸を引っ張った。すると教室に設置した糸が、自動的に中央に寄り集まり、糸の中心に立つ鬼を、締め付けはじめた。

「ガッ、ガアアアアア！」

暴れる鬼。もがけばもがくほど、糸は身体に食い込み、激しく締め付ける。

しばらくすると、その足元が泥のように溶けはじめる。鬼を飲み込むように、徐々に深くなっていく。まるで、底なし沼だ。

溺れるように、鬼は手を地面に叩きつける。透明な、どろみを帯びた液体が、バシャバシャと辺りに跳ねた。鬼は水が苦手だったはずだ。このような得体の知れない液体状の物質でも、例外ではないのだろう。

これが、鬼の封印。談子は息を呑んで見守る。暁も、教室の外から啞然と、その様子を眺めている。

「ガアッ！」

その一瞬の油断が、命取りとなった。鬼が最後の力を振り絞り、蜘蛛の糸を思いっきり引っ張ったのだ。

しっかりと糸を握り締めていた談子は、バランスを崩し、そのまま勢い任せに引き込まれ、沼の中へ身体を突っ込ませた。

もがけばもがくほど、身体が沈んでいく。暁が名を呼ぶ声が聞こえたが、それに応える余裕はない。

既に全身が沼に浸り、鬼と共に、果てしない地獄の底へと、沈んでいくところだったから。

その時の感覚は、魂を抜き取られた時のものに良く似ていた。しかし、今度は手に触れる空気の感触もあるし、身体に重さが感じられる。

その分だけ、どこか安心できた。



泥の底に到達した。そう感じた瞬間、身体が重力に支配され、真っ逆さまに落ちているのが分かった。

「うわああああああ！」

視界に入ってきたのは、一面赤の世界。ここはあの、血の池地獄だ。

バシャーンと音を立て、池の中へ頭から突っ込む。水面で肌を強打した。顔がすごく痛い。

血の匂いが、味が口の中に広がってくる。とても気持ち悪い。

急いで顔を外に出し、側にあった陸地に登った。口の中に入った血を吐き出しながら、周囲を見渡す。さっき、魂となってやってきた場所とは、少し感じが違った。

あそこよりも空気が重苦しく、血の色も、どことなく黒さが勝っていた。

相変わらず、公園の砂場くらいの大きさの、平らな陸地が一つだけ、ぽつんと漂っている。その中央で、小さく背を丸めて三角座りしている影があった。黒い長い髪、紅白の簡素な着物。その背中を見るだけで、誰だかはっきりわかる。

「……綺羅姫！」

声をかけると、その人物は身体をビクリと振る寄せた。顔を上げ、首だけこちらへ振り返る。

「談子……？ なぜ、ここへ？ わらわは、また皆を食らってしまったのか……？」

怯えた瞳。憔悴しきっていて、まるで別人のようにやつれてしまっている。談子は綺羅姫に歩み寄り、笑顔で手を差し伸べた。

「ううん。迎えに来たんだよ。鬼はあたしが封印したから。一緒に帰ろう？」

「……嫌じゃ、帰らぬ。もうわらわは、ずっとここにいる」

「どうして？」

「外の世界には、人間しかおらぬではないか。何度わらわは、人間の都合で外に呼び出されて、迫害されて、食いたくもない人間の魂を食らって、月に怯えてここへ戻ってこなくてはならぬのじゃ。もう疲れた、戻りとうない」

再びそっぽを向いてしまった。談子は困って、彼女の肩に手を置く。そのとき気付いた。綺羅姫の黒く丸い頭から、二本の角が突き出ている。

談子は、先刻出会った男子生徒の言葉を思い出していた。そして、その時に決意した自分の意志も、心に深く刻まれていると再確認する。

綺羅姫は、角を両手で覆い隠すようにして押さえ込んだ。

「……わらわは、鬼の子じゃ。生まれた時からずっと。昔の人間どもは、わらわに人間の血を混ぜて、人に近い理性を与えようとした。そうすることで、扱いやすくしようとしたのじゃろう。しかしその所為で、わらわの精神は二つに割れてしまった。昼には狂気の鬼が、夜には人間の習慣が染み付いた半端者が、現世に現れては人々に害を成した。そこへやってきた旅の人間が、狂気の鬼を地獄へと押し込めた。馬鹿なことをしてくれたものだ。名前さえ呼ばれば、すぐにも扉を蹴破って出てきてしまうというのに。……もう分かったじゃろう。わらわは鬼じゃ、人間とは決して相容れることはできない、化け物じゃ。関わった人間は皆、死んでしまう。ここへ来

れたのならば、帰る方法も知っているはずじゃろう、今すぐ現世へ戻れ」

ふと、談子は天を見上げた。はるか上空から、光り輝く糸が一本、真っ直ぐこちらへ向かって垂れている。

蜘蛛の糸。そんな話を昔読んだことがある。欲に目がくらんで地獄に落ちた男が、以前蜘蛛の命を助けたことによって慈悲深さが認められ、仏によって現世へ戻る糸を垂らしてもらう話だ。その糸は細くて脆く、たった一人の人間しか引っ張り上げることはできない。結局、男は周りの人間に邪魔されて、現世へは戻れなかったが――。

幸い、ここには邪魔するものはいない。

「綺羅姫、これ持って」

談子は無理矢理、綺羅姫にその糸を握らせた。糸に触れた綺羅姫は驚いたように談子を見上げる。

「何じゃこれは、何の真似じゃ？」

「これは、現世に住む人間を地獄から呼び戻すための糸なんだって。これが掴めるんだから、綺羅姫も現世に戻ってもいいんだよ。大丈夫、誰も綺羅姫を迫害したりしない、みんな綺羅姫のことを考えてくれてるんだよ。だから絶望しないで、怖がらないで」

「……………」

談子は笑う。綺羅姫は大きく目を開き、涙を流した。血のような涙だった、赤く透き通り、とても綺麗に見えた。

「本当か、本当にまだ、わらわの側にいてくれるのか？ わらわを苛めたりせんのか？」

「しないよ、絶対しない。だから、帰ろう」

目を潤ませながら、綺羅姫はやっと頷いてくれた。その瞬間に、糸は物凄い速さで巻き取られ、食いついた魚を全速力で引き上げる釣り糸のように上へ上がっていった。

「だっ、談子よ！ 登って行ってしまおうぞ、早く来るのじゃ！」

そのあまりの速さに、綺羅姫は驚いて談子の名を呼ぶ。綺羅姫から手を離れた談子は、それを見上げて声を張り上げた。

「それは一人乗りなの！ 後からすぐ行くから、先に行って！」

それに対する返答がないまま、綺羅姫はあっという間に地獄から現世へと連れ戻された。それを談子は見送る。その表情が、静かに曇るった。

「……ごめん。嘘ついちゃったかも」

蜘蛛の糸は、一本きりだ。

談子がここから出る方法は、おそらく、ない。

すぐ側に、白い乱れた髪を垂らした、小さな子供が立っていた。

紅白の、ボロボロの着物を着た、恐ろしい般若のような面をかぶった鬼。

綺羅姫の分離した、もう一つの人格。この池の主は、きっと彼女だ。

「あの、あたし帰り道がなくなっちゃって。よかったら、ここにいてもいい？」

鬼に笑いかける。鬼は、談子の手をとった。長い爪が、談子の腕に食い込む。血が滲み出るが、ふしぎと痛みはなかった。そして、鬼は寂しそうな呻き声を上げた。

「……あなたも、一人は嫌だよね。あたしも、嫌なんだ」

鬼の手を取った。冷たい鬼の手が、談子の暖かな手に解されていく。般若の仮面が、顔の中心に亀裂を走らせ、縦に真っ二つに割れた。中から出てきたのは、透明な涙を流す、綺麗な顔をした童女だった。

「大丈夫、綺羅姫は、もう一人じゃないよ」

童女は驚いた顔をした。そして、涙を流しながら、笑った。その笑顔が見たかったから、談子は今まで頑張ってきたのだ。本当に逢いたかった鬼は、ここにいた。

「やあ、こんなところまで来たの？」

童女の後ろから、誰かがやって来る。優しい雰囲気男子生徒。手では相変わらず、赤い糸であやとりを黙々と続けている。

童女は談子から手を離し、男子生徒へ駆け寄った。制服の裾を掴み、頬を摺り寄せる。

とても懐いているようだ。彼も童女に笑いかけ、再び談子に話を振る。

「君は戻らないと。約束してたじゃないか、綺羅姫と一緒に遊ぶって」

「いやその、帰る方法、なくなっちゃって」

情けなく笑ってみせる。ふーん、と男子生徒は少し考えるように首を傾げた。

そして、手に巻きついていて、あやとりの赤い糸を外して、差し出してくる。

「これをあげるよ。蜘蛛の糸」

糸は、みるみるうちに長く伸び、天井に突っ込んで、一本の線となった。談子は呆気にとられて、それを見上げる。

「ど、どうして……？」

「この糸は、この血の池から作った、鬼の動きを制するためのものなんだ。用途はもちろん、君が持ってきた白いものと、全く同じ。つまり糸は、この池から、いくらでも量産可能ってこと」

「なら、どうしてあなたは、これを使って帰らなかったんですか？」

「これに気付いた時には、既に自分の身体は墓の中だよ。だから、これは君が使って。僕はここで、この子とずっと一緒にいるから。外の綺羅姫は、君に任せるよ」

少し肩をすくめて、笑いかけてくる。

恐る恐る、談子は赤い糸を握り締めた。触れることができた。それを見た男子生徒が、何か思い出したように付け足す。

「そうだ、ついでに戻ったら、謝っておいてくれないかな。僕のほんの好奇心から、たくさんの人を巻き込んでしまった。僕が死んでしまったことで、深い傷を受けてしまった人も、いるみたいだ。二年前の生徒会のみんなや、綺羅姫に。そして――イナホにも。もう気にしなくていい、罪を償う必要なんてないと。自分の幸せを探して欲しいと、伝えて欲しい」

その言葉に、談子はふと、あの名前を思い出す。

「あなた、ひょっとして夏祭さん……？」

呟いた時には、糸が引き上げられ、談子の身体は宙に浮かんでいた。

「頼んだよ」

夏祭花人は笑った。その顔も、やがて見えなくなり――。

気付けば、冷たい床の上にあった。

▲□▲□▲

電気のつけられた、閑散とした教室。

側には暁と目を覚ました安眠、そして、泣きじゃくりながら談子の身体にしがみついている、綺羅姫の姿があった。窓から見えた、線のように細くなってしまった夕日が、山の向こうに沈んでいく。

今、日が暮れようとしていた。

「……間に合ったんだ」

日没までには、何とか。談子は大きく息を吐いた。

とある日の、昼休み。

校舎の外れにある質素な教室。表のプレートには、汚い手書きで「生徒会室」と書かれていた。

いつ書かれたのかも分からないくらい黄ばんで埃にまみれ、傾いて今にも落ちそうである。

中には、寄せ集められた机の塊が配置され、それをとり囲むように、三人の生徒が椅子に腰掛けていた。

学年は様々、男子が一人、女子が二人。

机の上には、大きなボードが敷かれていた。ボードには小さくコマ分けされた道が迷路のようにびっしり描かれ、隅には手で回すルーレットが貼り付けられている。

その上に三つ、チェスで使用するものに似た駒が置かれ、バラバラの場所に配置されていた。

駒には、それぞれ名前が書いている。

メカマスター。

冬眠男。

呪詛女。

「あれから、綺羅姫の様子はどうだい？」

冬眠男がルーレットを回し、コマを動かした。手は骨折の名残で、白い包帯がぐるぐるに巻かれている。ギプス時代よりは、まだマシに動かせるようになったらしい。

「前より、明るくなったよね。毎日元気に過ごしてるって感じー。こないだメルヘンジャー見せてあげたら喜んでた」

メカマスターも続いてルーレットを回し、コマを進める。

「そりゃよかった。いつまでも同じしきたりじゃ、綺羅姫だって飽きてしまうからね」

「そうだよー。今度からマニュアル変更しよっか」

「それ以前に、これ以上鬼の封印を解かない配慮をしたほうがいいんじゃない？」

的確な突っ込みを入れ、呪詛女がルーレットを回し、コマを進めた。彼女が今のところ、一番勝っている。

ゴール直前でコマが止まる、そのマスには「ふりだしに戻る」の指示が。

冬眠男とメカマスターが顔を歪めた。こめかみに汗を伝わせ、焦った顔で彼女を見つめる。

呪詛女は笑って、コマをスタート地点へ戻した。

「残念だわ、せっかく勝ってたのに」

「「……………」」

二人は顔を見合わせて、驚いて笑った。

「イナホちゃん、大人になったねー」

「いつまでも塞ぎこんで、あの人に心配かけたくないしね。前向きに生きようと思っただけよ」

呪詛女は、窓の外を見つめた。暖かい日差しの下、小さい子供を背負って、慌ただしく廊下を走る女子生徒の姿を見つけ、優しく微笑む。

「暑くなってきたわね。そろそろ衣替えの季節だわ」

さらりと、流れる短髪を指で梳く。

その手首には、赤い糸がミサンガのように巻きつけられていた。

▲□▲□▲

高校生活にも、すっかり馴染んだ一年一組の教室に、一人の女子生徒が戻ってきた。

「ひー、間に合った」

息も絶え絶えに教室に入ってくる少女、月見談子。その背中には、小さな童女が張り付いている。

「お疲れ、談子ちゃん。先生の子供の子守でしょ？ 毎日大変ねえ」

「まあねー」

席に座ると、友人の名残由喜が歩み寄ってくる。

鬼に接触し、一度魂を抜かれた人間は皆生き返り、生徒会に所属している、部分的に人の記憶を夢化できる役員の能力を以って、鬼の情報を全て改ざんされた。

だから関わった生徒たちは、あの一件についてはみんな夢だと思い、あやふやにしか覚えていない。

この童女についても、学校の裏山にあるお寺から来ている教員の子供で、近くだからと、ちょくちょく学校に入り込んでくるので、ひよんなことから世話を任された、ということで話はまとまっている。

周知の事実となった今では、小さな子供をおんぶして校内を走り回っている談子を見ても、不審がる生徒はほとんどいなくなっていた。

時計を見ると、次の授業までまだ時間がある。背中から童女・綺羅姫を下ろして、談子はさっき仕入れてきた情報を嬉しそうに由喜に話す。

「あのねあのね、学校の裏の池に、河童が出るんだって！」

「へえ、胡瓜かじりながら歩くおっさん？」

「違うっての、今度こそ本当に本当なの！」

「鬼の次は河童か。いい加減にしないと、本当に出てくるぞ」

のんびりと教室に入ってきて、すれ違うように談子の話に茶々を入れる男子生徒、春眠暁。

談子を馬鹿にした表情が気に入らず、談子は彼を睨み返す。

「いいじゃないよ、鬼がいたんだから、河童なんて、もっといそうじゃないの」

「いたから、どうなんだよ。お前、河童に会って何する気だ」

「うーん。とりあえず、頭の皿を割る？」

「アホか」

「なにおー！」

「本当に、毎回毎回、飽きないわね……」

火花を散らせて、いがみ合う二人。それを見て、由喜は呆れた息を吐いた。

授業開始のチャイムが鳴る。それに気付いて、談子は思い出したように、机の中からぶ厚いノートを取り出して、綺羅姫に渡した。

「授業だから、放課後まで、それでも読んで待っててよ」

「おお、完成したのか。ではのんびり読ませてもらうぞ」

綺羅姫は楽しそうに、てくてくと教室を出て行った。その手に、大事に抱きしめられたノートの表紙には、こう書いてある。

『新説・鬼遊戯』

前から約束していた、鬼が退治されるオチのない話だ。絵本風に書いてあり、大きな文字と一緒に、あまり上手くはないが心のこもったイラストも付け加えてある。

綺羅姫と入れ違いに、五限目の授業、古典の担当であるクラスの担任、瀬見時雨が入ってくる。

それに合わせて、由喜と暁が席へ帰っていった。全員が席について静かになったことを確認し、時雨は授業を始める。

「はい。それでは、今日から新しい話に入りますね。今日から勉強するのは、『河童の川流れ』です。では月見さん、読んで下さい」

指名され、談子は立ち上がって教科書を読み始めた。

「えーと、河童の川流れとは、胡瓜を丸呑みしながら楽しそうに泳ぐ様子のことではありません？ ……なんじゃいこりゃ」

あとがき

初めまして、もしくはお久しぶりです。

幹谷セイ、と申します。

拙作を手にとっていただき、誠にありがとうございます。

幹谷の作品を販売する電子書籍レーベル「みきやbooks」の三作品目をお送りします。

ついに三作目。まだまだ少ないですが、世に出せた作品数が増えてくると、なんだかうれしくなります。

今回は、和風の学園もの。

学校の中に封じられていた鬼の封印を解いてしまった主人公の女子高生が、個性的な異能力を持った生徒会役員たちと一緒に、鬼を再度封じるためにリアル鬼ごっこを繰り広げる、という。

そんなお話をお届けしました。

非日常のお話を書きたくて、学生時代の頃にコツコツと書いていたものです。この度、改稿をし直して無事に陽の目を見ることができました。たいへん嬉しく思います。

かつて、これを書いていた頃には、某殺し合いサバイバル映画が流行ったりしていましたので、その影響を色濃く受けていますね。あの作品ほど残酷さは持たせずに、コミカルかつ、シリアスなところはシリアスに書いたのを覚えています。

今回、電子書籍化するにあたって推敲を行いました。それほど大きな修正もなかったのも、個人的に完成度は高かったのだろうと思います。

楽しんでいただけると幸いです。

イラストは、葉月七瀬様に描いて頂きました。

他の書籍の表紙なども書かれている方ということで、創作界隈ではけっこう有名なイラストレーター様です。幹谷もたまに、別の方の作品の挿絵などで、お名前を拝見します。

主人公の二人を独特なタッチで美しく描いてくださいました。ありがとうございます！

みきやbooksでは、今後も色々なジャンルの作品を出していきたいと思っています。

二〇一八年三月現在では、ライトノベル作品を他にも二冊、販売しております。

全て無料で読めますので、幹谷の作品に興味を持っていただけたら、ダウンロードしていただくと幸いです。

無料作品は、小説投稿サイトでも読むことができます。

詳細は、みきやbooksの公式ページにて確認できます。

【みきやbooks】で検索お願いします。

次の作品は、できるだけ早く出せるようにしたいと思います。

それでは、失礼いたします！

幹谷 セイ

しんおに。～新説・鬼遊戯～

幹谷セイ 著

葉月七瀬 イラスト

発行日 2018/3/14

価格 無料

発行 みきやbooks

書籍紹介サイト

公式ページ [ぬうトピア](#)。内「[みきやbooks](#)」

この物語はフィクションです。実在の人名、地名等はいっさい関係ありません。

当書籍はデジタル著作権管理 (DRM) フリーですが、文章内容、イラスト共に各作者が著作権を保有しております。

純粋な読書鑑賞以外の用途での無断使用、改変、自作発言、その他著作権を侵害する行為は固くお断りいたします。

しんおに。～新説・鬼遊戯～

<http://p.booklog.jp/book/120863>

著者：幹谷セイ（せい。）

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mikki0723seim/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/120863>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト